

八表、及び天文志は昭か補ふ所に係る、蓋固の原本たる、亦多くは古人の成文を潤色して、其体裁を整齊せしに過ぎず、即ち其書、始元以前は太史公之を先んし、始元以後は叔皮之を成し、昭帝より平帝に至る凡六世は、賈逵、劉歆に資し、復た陳宗尹、敏孟異の徒ありて之を共にせしものなれば、固の獨力を以て自ら爲りしもの幾んど希なりと云ふへし、蓋孟堅は本、浮華の士にして、全く學術なく、専ら剽竊を事とし、編輯を以て能とせしに過ぎざるのみ、故に憲宗嘗て宰相竇憲に語て云く、卿の班固を愛して崔駰を忽にするは葉公の龍を好むに似たりと、其己に當時に定價ありしと此の如し、後世の批評家も多くは孟堅を以て剽竊の雄と爲して、曾て創作の才を以て之に許さず、殊に廣治平畧編者の如きは、頗る一味痛切の言を爲して『後世作史修書、道旁築室、掠人之文、竊鐘掩耳、皆固之作俑也、固之事業如此、而史家猶奔走班固之不暇、不復測其深淺、至有棄遷而用固尊班而抑馬者、……古今著作、如孟堅者、何幸哉』と云ふに至る、然れども其文の齊整にして平贖なるは復た決して之を誣ゆへからず、假令ひ其文の曲折變化に乏しきにもせよ、其体の遷史を襲くにもせよ、能く其材料を整理し、且つ之に琢磨を加へて、一個の偶像を彫刻せし技能に至りては、決して其功を没すへからず、范曄は、後漢書を修して、固の史筆を稱して『遷文直而事覈、固文贖而事詳、若固之序事、不激詭、不抑抗、贖而不穢、詳而有體、使讀之者者々而不厭、信哉其能成名也』

と云へり其論の當否は姑く論せず、其『序事不激詭不抑抗』と云ふもの、直に固の文の平淡直叙にして、跌宕奔逸の弊に乏しきを顯すなり、而して其文の跌宕ならざるは、究竟孟堅の特質たるものなり、程伊川馬班二家の文を評して云く『子長著作、微情妙旨、密之文字蹊徑之外、孟堅之文、情旨盡露文字蹊徑之中、讀子長文、必越浮言者、始得其意、超文字者乃解其旨、班氏文章亦稱博雅、但一覽之餘、情詞俱盡、此班馬之分也』と正に二家の才力、筆力の高下を評盡せるものなり、蓋孟堅の筆意は、自ら孟堅の才力を見るべく、子長の文氣は以て子長の抱負を察するに足ること論を缺たす、若し孟堅を以て子長と對較せんか、子長は直に文に聖なるものなり、而して孟堅は竟に文に賢なるに過ぎざるなり若し更に風景を以て之を譬へんに、雲海澎湃して魚龍百變し、日月、暈を隠し、山嶽秀を碎くものは、子長の文なり、鑑湖風平にして、細鱗、波を吹き、岸樹參差として小艇あるに似るもの、蓋孟堅の文なり、之を要するに、二家の書、一は疎爽を以て勝ち、一は密塞を以て勝つ、然れども、漢書の撰は、假令ひ孟堅なしと雖も、當時猶能く之に任するに足る者あり、史記の文に至りては、兩漢四百餘年を通して、一人の能く司馬氏に似る者あるを見ず、是遂に太史公の才の雄にあらされは、以て之を成すこと能はざるなり、世の眼識なきこと久し、魚目を貴と爲して、夜光の璧、市に售られず、彼の循々たる者、猶能く他人の藩籬に傍ふて走り、以て能ありと稱



せらるも、才氣雄健なる者に至りては、長材、却て其累を爲して、褒貶寵辱、一時に喧く、終日轉嬾、其身に翻ふもの、豈獨り司馬子長一人のみならんや、今左に二家の文例を掲ぐ、唯班固叙事の文、自家の筆意に出るもの寡きか故に、姑らく其論贊を標出す。

楚軍夜襲阮秦卒二十萬人新安城南、行略定秦地、函谷關有兵守關、不得入、又聞沛公已破咸陽、項羽大怒、使當陽君等擊關、項羽遂入至于咸陽、沛公軍霸上、未得與項羽相見、沛公左司馬曹無傷使人言於項羽曰、沛公欲王關中、使子嬰爲相、珍寶盡有之、項羽大怒曰、且曰、沛公先破秦入咸陽、還軍霸上、以待將軍、勞苦功高、未有封爵之賞、而將軍聽細人之說、欲誅有功之人、此誠秦之不取也、項羽曰、沛公先破秦入咸陽、還軍霸上、以待將軍、勞苦功高、未有封爵之賞、而將軍聽細人之說、欲誅有功之人、此誠秦之不取也、項羽曰、沛公先破秦入咸陽、還軍霸上、以待將軍、勞苦功高、未有封爵之賞、而將軍聽細人之說、欲誅有功之人、此誠秦之不取也、

以負翼蔽沛公、莊不得擊、於是張良至軍門、見樊噲、樊噲曰、今日之事何如、良曰甚急、今者項莊拔劍舞、其意常在沛公也、噲曰、此迫矣、臣請入與之同命、噲即帶劍擁盾入軍門、交戟之衛士、欲止不內、樊噲側其盾、以撞衛士、仆地、噲遂入、披帷西面立、睨目視項王、頭搶地、目眦盡張、項王按劍而跽曰、客何爲者、張良曰、沛公之參乘樊噲者也、項王曰、壯士、賜之卮酒、則與卮酒、噲拜謝起、立而飲之、項王曰、賜之彘肩、樊噲覆其盾於地、加彘肩於上、拔劍切而啗之、項王曰、壯士、能復飲乎、樊噲曰、臣死且不避、卮酒安足辭、夫秦王之有天下、皆賴沛公之先破秦入咸陽、還軍霸上、以待將軍、勞苦功高、未有封爵之賞、而將軍聽細人之說、欲誅有功之人、此誠秦之不取也、項王未有以應、曰坐、樊噲從其坐、須臾、沛公起如廁、因招樊噲出、沛公已出、項王使都尉陳平召沛公、沛公曰、今者出、未辭也、爲之奈何、樊噲曰、大行不顧細謹、大禮不辭小讓、如今人方爲刀俎、我爲魚肉、何辭爲、於是遂去、乃令張良留謝、良問曰、大王來何操、曰我持白璧一雙、欲獻項王、玉斗一雙、欲與亞父、會其怒不敢獻、公爲我獻之、張良曰、謹諾、當是時、項王軍在鴻門下、沛公軍在霸上、相去四十里、沛公則置車騎、脫身獨騎、與樊噲、夏侯嬰、靳彊、紀信等四人、持劍盾步走、從郢山下、道芷陽間行、沛公謂張良曰、從此道至霸上、不過二十里耳、度我至軍中、公乃入、沛公已去、間至軍中、張良入謝曰、沛公不勝枵腹、不能辭、請使臣奉白璧一雙、再拜獻大王足下、玉斗一雙、再拜奉大將軍足下、項王曰、沛公安在、良曰聞大王有意督過之、脫身獨去已至軍矣、項王則受璧、置之坐上、亞父受玉斗置之地、拔劍撞而破之、曰、唉、子不足與謀、奪項王天下者、必沛公也、吾屬今爲之虛矣、沛公至軍、立誅殺曹無傷、(史記項羽本紀節錄)



在閭巷、少年攻剽推埋、劫人作姦、擄家鬻幣、任俠并兼、借交報仇、箕逐幽隱、不避法禁、走死地如驚、其質皆爲財用耳、今夫遺女鄭姬、體形容、柳鳴琴、偷長秋穠利履、目挑心招、出不遠千里、不擇老少者、奔富厚也、游閑公子飾冠劍連車騎、亦爲富貴容也、弋射漁獵、犯晨夜、冒霜露、馳阮谷、不避猛獸之害、爲得味也、博戲馳逐、鬪鷄走狗、作色相矜、必爭勝者重失負也、醫方賭食技術之人、集神極能爲重精也、更士舞文弄法、刻章僞書、不避刀鋸之誅者、沒於賂遺也、農工商買賣者、固求富益貨也、此有知盡能來耳、終不餘力而讓財矣、諺曰百里不販糧、千里不販糧、居之一歲、種之以穀、十歲樹之以木、百歲來之以德、德者人物之謂也、今有無秩祿之奉、得邑之入、而樂與之比者、命曰素封、二封者食租稅、歲率戶二百、千戶之君則、二十萬、朝觀膠李出其中、庶民農工商買賣、率亦歲萬息二千、戶百萬之家則二十萬、而更備租賦出其中、衣食之欲、恣所好美矣、故曰隨地牧馬二百蹄、牛蹄角千、千足羊、湯中千足黿、水居千石魚鰲、山居千掌之材、安邑千樹棗、燕秦千樹栗、蜀漢江陵千樹橘、淮北常山邑南河濟之同千樹萩、陳夏千畝棗、齊魯千畝桑麻、渭川千畝竹、及名國萬家之城、帶郭千畝、畝鍾之田、若干畝危曹、千唯穀也、此其人皆與千戶侯等、然是富給之資也、不親市井、不行異邑、坐而待收、身在處士之義、而取給焉、若至家貧親老、妻孥軟弱、歲時無以祭祀、進饌飲食、被服不足以自通、如此不慙耻、則無所比矣、是以無財作力、少有開智、既饑爭時、此其大經也、今治生不待危身取給、則賢人勉焉、是故本富爲上、末富次之、貧富最下、無處處奇士之行、而長貧賤、好畧仁義亦足羞也、(史記貨殖傳一章)

書戒變夷猾夏、詩稱戎狄是膺、春秋有道、守在四夷、久矣夷狄之爲患也、故自漢興、忠賢嘉謀之臣、曷嘗不述籌策、相與爭于廟堂之上乎、高祖時、則劉敬、呂后時、樊噲、季布、孝文時、賈誼、晁錯、孝武時、王恢、韓安國、朱買臣、公孫弘、董仲舒、人持所見、各有同異、然總其要歸、兩科而已、繇紳之備、則守和親、介冑之士、則言征伐、皆偏見一時之利害、而未究匈奴之終始也、自漢興以至于今、曠世歷年、多事春秋、其與匈奴、有修文而和親之矣、有川武而克伐之矣、有卑下而承事之矣、有威服而臣之矣、謂仲異變、疆弱相反、是故其詳可得而官也、昔和親之論、發于劉敬、是時天下初定、新遭平城之難、故從其言、約結和親、略遺單于、冀以收安邊境、孝惠高后時、道而不遵、匈奴寇盜、不爲衰止、而單于反以加驕僞、逮至孝文、與通關市、妻以漢女、增厚其賂、歲以千金、而匈奴數背約束、邊境屢被其害、是以文帝中年赫然發憤遂朝戎服、新御鞍馬、從六郡其家材力之士隨射上林、講習戰陣、聚天下精兵、取于廣武、顧問馮唐、與論將帥、喟然歎息、思古名臣、此則和親無益、已然之明效也、仲舒親見四世之事、猶復欲守舊文、頗增其約、以爲強勸君子、利動貪人、如匈奴者、非可以仁義說也、獨可說以厚利、結之于

天耳、故與之厚利以沒其意、與盟于天、以堅其約、質其愛子、以累其心、匈奴雖欲展轉、奈失重利何、奈欺上天何、奈殺愛子何、夫賦歛行賂、不足以當三軍之費、城郭之固、無以異于士之約、而使邊城守境之民、父兄殺帶、稚子嗚呼、胡馬不親于長城、而羽檄不行于中國、不亦便乎天下乎、察仲舒之論、考諸行事、乃知其未合于當時、而有闕于後世也、當孝武時、雖征伐克獲、而士馬物故、亦略相當、雖開河南之野、建朔方之郡、亦塞遼陽之北九百餘里、匈奴人民、每來降漢、單于亦輒拘留使、以相報復、其桀驁尙如斯、安肯以愛子而爲質乎、此不合當時之旨也、若不置質、空約和親、是與孝文既往之悔、而長匈奴無已之詐也、夫邊城不選守境武略之臣、修險備塞之具、厲長戰勁弩之械、恃吾所以持邊寇、而務賦歛于民、遠行貨賂、割剝百姓、以奉親誓、信甘言、守空約、而幾胡馬之不親、不已過乎、至孝宣之世、承武帝奮擊之威、直匈奴百年之運、因其擾亂幾亡之阨、權時施宜、覆以威德、然後單于稽首臣服、遣子入侍、三世稱藩、實于漢庭、是時邊城晏閉、牛馬布野、三世無犬吠之警、燕庶亡于戈之役、後六十餘載之間、遭王莽篡位始開邊隙、單于由是歸怨自絕、莽遂斬其侍子、邊境之禍構矣、故呼韓邪始朝于漢、漢議其儀、而蕭望之曰、戎狄荒服、言其來服、荒忽無常、時至時去、宜待以客禮、讓而不臣、如其後嗣逆逃竄伏、使于中國、不爲叛臣、及孝元時、蕭望之守塞之備、侯應以爲不可、可謂盛不忘衰、安心思危、遠見讖微之明矣、至單于咸其愛子、味利不顧、侵掠所獲、歲饋萬計而和親賂遺、不過千金、安在其不棄質而失重利也、仲舒之言、滿于足矣、夫規事建議、不圖萬世之固、而論特一事之邪者、未可以經遠也、若乃征伐之功、秦漢行事、嚴尤論之當矣、故先生度土中、立封畿、分九州、列五服、物土貢、制外內、或修刑政、或昭文德、遠近之勢異也、是以春秋內賂夏而外夷狄、夷狄之人、貪而好利、被髮左衽、人面獸心、其與中國殊章服、異習俗、飲食不同、言辭不通、辟居北垂塞落之野、逐草隨畜、射獵爲生、隔以山谷、雍以沙幕、天地所以絕外內也、是故聖王禽獸畜之、不與約誓、不就攻伐、約之則費賂而見欺、攻之則勞師而招寇、其地不可耕而食也、其民不可臣而畜也、是以外內不交、疎而不戚、政教不及其人、正朔不加其國、來則懲而御之、去則備而守之、其意雖而貢獻、則接之以禮讓、禮讓不絕、使曲在彼、蓋聖王制御蠻夷之常道也、(漢書匈奴傳贊)

第二節 傳記

既に前節に於て、馬班正史の文を叙したり、猶其外に於て、叙事文の見るべきものを、韓嬰の韓詩



外傳、劉向の新序、說苑、及び烈女傳等とす、韓詩外傳は、其標題の表はすか如く詩の外傳に係るものなれども、其の主とする所は、寧ろ古人の言行を記するに在り、而して其の詩を引て之を裁する處、全く此書の特徴に屬す、新書、說苑の二書、亦共に前言往行を撮録するものにして、其の經史諸子に散見するもの亦甚多し、蓋向の意、儒術の事實上に徴すべきものを撮叙して治化を輔けむと欲するに在るなり、列女傳の今行本は、後人の竄入、混して、悉く向の舊にあらす、而して其趣味亦他の三書に及はざると遠し。

韓嬰 は燕人なり、文帝の時に博士と爲り、景帝の時に常山王の太傅に至る、武帝の時に、董仲舒と帝の前に論す、其人精悍、事に處すること分明、仲舒も難詰すると能はざりしと云ふ、嘗て詩人の意を推して、内外傳、數萬言を作る、内傳は亡して傳はらず、外傳のみ獨存す、其文簡古にして清婉なり、王鳳洲云く、韓詩外傳は大抵詩を引き以て事を證す、事を引き以て詩を明かにするにあらず、蓋馳騁勝て詩を説くの旨微なりと、楊汝承は韓嬰、古を推て今を揚げ微を闡て顯を彰はし、馳騁貫穿一家の言を成すと云へり、共に皆主として其文筆の馳騁を稱せり蓋其文の簡古清婉なるは以て人の肺腑に入り易く、以て俗を訓するに足るべきものなり、古人の稱して宛然たる聖門の家法と云ふもの、固に其の膠らざるを知るなり。

劉向 は字を子政と云ふ漢の宗室なり、人と爲り簡易にして威儀なく靡靡にして道を楽しみ、世俗に交接せずして、専ら思を經術に積み、晝は書傳を誦し、夜は星宿を觀て、時に或は寐ねすして且に達することあり、宣帝、元帝、成帝の三朝に歷事して、列大夫の官に在ること前後三十年、數に上疏して得失を言ふ、而して其の召見せらるる毎に、輒ち云ふ、公族は國の枝葉なり、枝葉落れば、本根、庇蔭する所なし、方今同姓疏遠にして、母黨、政を專にし、祿は公室を去りて、權は外家に在り、以て漢室を強ふし、社稷を保ちて、後嗣を安固する所以にあらざるなりと、又云ふ、外家の日に盛なるは、其漸、必ず劉氏を危ふするに至らむ、吾幸に同姓の末屬たるを得て、三世漢の厚恩を蒙り、身、宗室の遺老と爲りて、三主に歷事す、吾にして言はされは、孰か當さに言ふべき者と、遂に封事を上りて、極諫す、其言痛切、至誠より發す、而して務て之を儒術の旨に引く、又嘗て以爲らく、王教は内より外に及び、近者より始めて遠きに至ると、故に詩書に載する所の賢妃、貞婦の以て法則と爲すべきもの、及び孽嬖亂亡の以て戒と爲すべきものを採取序次して、列女傳を作る、又傳記、行事を採て、新序、說苑の二書を著して之を奏す、以て觀覽を助て、遺闕を補はむと欲す、帝其言を嘉して常に之を嗟嘆す、向の文、反覆回轉、毎に諷諭の意あり、間、諄雅ならざるのあるも、亦忠愛懇惻の旨を失はず、唯其の陰陽五行の見に拘泥し、媿々として天災報應の徴を言



ふは、固より有識の取らざる所たるも、當時五行休徵の説、一般に行はれて、賢士大夫と稱せらるる者すら、猶且つ其の浸潜を免る能はされは、亦獨り向に於てのみ咎むべきにあらざるなり、要するに、向は漢代の一儒家として、優に董仲舒、楊雄の間に介立して、愧ぢざる者と云ふへし、班孟堅、向を稱して曰く「豈非直諫多聞、古之益友歟」と、蓋亦過稱にあらざるなり、向卒する時、年七十二、少子歆亦能く名を知らる、嘗て父の業を繼て七略を輯す、事は前章總論に出つ、今復た之に及はす。

原憲居魯、環堵之室、茨以蒿萊蓬戶、黜腐腐而無楹、上漏下濕、匡坐而絃歌、子貢乘肥馬、衣輕裘、中紺而表素、軒不容巷、而往見之、原憲結繩杖、而應門、正冠則纒纒、振襟則肘見、納履則踵決、子貢曰、嘻先生何病也、原憲仰而應之曰、憲聞之無財之謂貧、學而不能行之謂病、憲貧也、非病也、若夫希世而行、比周而友、學以爲人、教以爲己、仁確之匪、車之飾、衣裘之麗、憲不忍爲之也、子貢逡巡、面有慚色、不辭而去、原憲乃徐步曳杖、歌商頌而反、聲淪於天地、如出金石、天子不得而臣也、諸侯不得而友也、故養身者忘家、養志者忘身、身且不愛、孰能辱之、詩曰我心匪石、不可轉也、我心匪席、不可卷也、(韓詩外傳)

楚人有獻魚楚王者曰、今日漁獲、食之不盡、賣之不售、棄之又惜、故來獻也、左右曰、鄙哉辭也、楚王曰、子不知漁者、仁人也、整閒田食粟有餘者、國有餘民、後宮多幽女者、下民多曠夫、餘行之善聚於府庫者、境內多貧困之民、皆失君之道、故府庫有肥魚、廐有肥馬、民有饑色、是以亡國之君藏於府庫、寡人間之久矣、未能行也、漁者知之、北以此諭寡人也、且今行之、於是、乃遣使恤寡寡而存孤獨、出介廢發幣帛、而振不足、罷後宮不御者、出而遊廐夫、楚民欣々大悅、鄰國歸之、故漁者一獻餘魚、而楚國賴之、可謂仁智矣、(說苑)

學者崇名、立身之本也、儀狀齊帶、而飾貌者好、質性同倫、而學問者智、是故士苟欲深明博察、以垂榮名、而不好問訊之道、則是伐智木、而塞智原也、何以立身也、騏驎雖疾、不遇伯樂、不致千里、千將雖利、非人力不能自斷焉、烏號之弓雖良、不得排擊、不能自任、人才雖高、不務學問、不能致聖、石積成川則蛟龍生焉、土積成山則豫章生焉、學積成德則富貴尊顯至焉、千金之裘、

非一狐之皮、豨鬣之機、非一木枝、先王之法、非一士之智也、故曰問者、智之本、思慮者智之道也、(新序)

#### 第四章 詔敕、上書、及び書牘の文

凡詔敕、上書、及び書牘の文は専ら議論を用ふるにあらす、又専ら叙事を以て文を行るにあらす、或は事理を辨するものあり、或は情狀を纏述するものあり、又或は慰撫教諭の旨に出るものあり、而して其用筆も亦簡約なるあり、直叙なるあり、婉曲なるありて、素より同一の筆意に出ると能はずと雖とも、之を槩するときは、詔敕の文は、多く謹嚴正大を以て勝ち、上書の文は、實情を敬虔の中に悉すを貴ひ、書牘は暢達簡明、俱に其要得るをを以て主と爲すか如き、是其文牘の性質上、亦必ず此に出でざるべからざるものあるなり、而して漢代に於ける此等の文も、亦曾て其範圍を脱出すること能はずして適、其牘を完成せしめしを見る、然らば讀者は應さに知るべし、吾人は既に上章に於て議論、叙事二種の文を叙したるにも拘らず、今又此章を次するの已むべからざるものあり。

詔敕の文とは、蓋天子、萬民の上に在りて、其政令を施行するに當り、以て其命を傳ふる所以のものを云ふ、而して其名稱は、特に漢に起ると雖とも、其實は既に虞夏三代の誥誓より出つ、周に於



ては之を命と稱す、其史傳に散見して王命と云ふもの、即ち是なり、秦、天下を併せて、多く古來の稱呼、名號を變易するに及び、乃ち命を改めて制と云ふ、漢に至りて更に禮儀を定むるに及び、命に策、制、詔、勅の別あり、而して州郡を戒むるには勅を以てし百官に告ぐるには詔を以てし、赦命を施すには制を用ひ王侯を封するには策を以てせしか如き、其用處亦各一區別する所ありたり且其辭令たるや、直に當時に在りて其美を取るのみにあらず、亦大に後昆に向つて誇耀せんと欲するの意ありしを見る、今試に前後兩漢書の諸帝紀を披閱せば歴々として其例證を見るに難からざるへし、而して其文、大抵文景以前に在りては、多く浮新の傾向あるも、武帝に至りては、言を選むこと密にして、毎に三代を規模と爲せしかは、其詔策中には、最も古奥を極むるものあり、故に漢代詔策の美は、武帝を以て翹楚と爲さるへからず、他は千百の論言も、一東の公式文の如く、論するに足るもの、殆んと其の多からざるを憾むのみ。

上書は、下より上に對して事を言ふの文なり、而して其稱呼も亦時に變遷あり、周末春秋の際に至るまでは多く上書と稱せしが、秦に至り改めて奏と云へり、漢に及んで更に分て章、表、奏、職の四目を立つ、而して其の事を奏するを或は上疏とも稱し、又其上疏を板に書して、之を飛封し、以て進獻するものを封事と稱せり、然れとも皆下より上に獻陳謝するものに外ならざるなり、此

體の文に於て、最著名なるは、西京に在りては、誼の論時政疏、即ち治安策、鼂錯の言兵事疏、鄒陽、枚乘の諫吳王書、及び陽の獄中上書、司馬相如の諫獵書、董仲舒の賢良策及び劉向の外家封事等の類とす、而して東京に在りては、諸葛亮の出師表一篇の如き、華實、並ひ備りて、一毫毛の以て間然する所あるを見ず、其人は三代の下に在りと雖も、其文は直に三代の上に位するものと云ふへし、坡仙の伊訓、說命と相表裏すと云ひしもの洵に浮言にあらざるなり。

書牘の文は、司馬遷の報任安書を以て、古今大書牘の祖と稱せざるからず、其文曲折反覆、首尾聯貫して一絲紊れず、殊に其慷慨激揚、神來の筆を以て、直に胸中の感憤を發抒するに至りては、雄奇豪宕、人をして轉、悲痛慨憤の意を起さしむるものあり、之に次ては楊惲の答孫會宗書、尤其風致瀟洒の處を見る、頼翁嘗て評して小尺牘の祖と云へるもの、蓋亦之を得たりと爲す、其他紛紜たる筆札、一二を以て數ふへからず、今姑らく省略に従ふ。

太史公牛馬走司馬遷再拜言、少卿足下、曩者辱賜書、教以慎於接物、推賢進士爲務、意氣懣懣懇懇、若望僕不相師、而用流俗人之言、僕非敢如此也、僕雖驢馬亦嘗聞長者遺風矣、願自以爲自殘廢、動而見尤、欲益反損、是以獨抑鬱而與誰語、勝曰誰爲爲之、孰令聽之、雖鍾子期死、白牙終身不復鼓琴、何則士爲知己者用、女爲說己者容、若僕大賢已虧缺矣、雖材懷附和行者由夷、終不可以爲榮、適足以見笑而自黜耳、書辭立符、會東從上來、又迫賤事、相見自淺、卒卒無復更之間得竭忠、今少卿抱不測之罪、涉旬月、迫季冬、僕又漸從上雍、恐卒然不可爲辭、是僕終已不得舒憤懣以曉左右、則長逝者魂魄、私恨無究、晴略陳固陋、闕然久不報、幸勿爲過、僕聞之、修身者、智之符也、愛施者、仁之端也、取予者、強之表也、耻辱者、勇之決也、立名者、行之



極也、士有此五者、然後可以託於世、而列於君子之林矣。故福莫密於欲利、患莫慘於傷心、行莫醜於辱先、罪莫大於宮刑、刑餘之人、無所比數、非一世也、所從來遠矣。昔衛靈公與雍渠同載、孔子適陳、商鞅因景監見、趙襄寒心、同子參乘、袁絲變色、自古而耻之、夫中材之人、亦有關於宜毀、莫不傷氣、而況於慷慨之士乎、如今朝雖乏人、奈何令刀鋸之餘、應天下豪傑哉、僕賴先人緒業、得待罪登殿下、二十餘年矣、所以自惟、上之、不能納忠教信、有奇策材力之譽、自結明主、次之、又不能拾遺補闕、招賢進能、顯廢火之士、外之、不能備行伍攻城野戰、有斬將搃旗之功、下之、不能執口累勞、取警官厚祿以爲宗族交遊光寵、四者無一遂、苟合取容、無所短長之效、可見於此矣、總者僕亦嘗聞下大夫之列、陪外廷末議不以此時引綱維盛思慮、今已斷形爲掃除之隸、在園罪之中、適欲仰首信眉、論列是非、不亦輕朝延、羞當世之士耶、嗟乎嗟乎、如僕何言哉、尙何言哉、且事本末、未易明也、僕少負不羈之才、長無鄉曲之譽、主上幸以先人之故、使得委薄技出入周籍之中、僕以爲戴盆何以望天、故絕賢客之知、忘室家之樂、日夜思竭其不肖之材力、務一心管職、以求親媚於主上、而事乃有大體不然者、夫僕與李陵俱居門下、素非能相善也、趣舍異路、未嘗銜杯酒接殷勤之餘歡、然僕觀其爲人、自守奇士、事親孝、與士信、臨財廉、取與義、分別有讓、恭儉下人、常思奮不顧身以殉國家之急、其素所蓄積也、僕以爲有國士之風、夫人臣出李萬死、不顧一生之計、赴公家之難、斯以奇矣、今舉事一不當、而全軀保妻子之臣、隨而謀擊其短、僕誠私心痛之、且李陵提步卒不滿五千、深踐戎馬之地、足歷王庭、垂餌虎口、橫挑疆胡、仰億萬之師、與單于連戰十有餘日、所殺過當、虜救死扶傷不給、旣喪之君長始驚怖、西悉徵其左右賢王、舉引弓之人、一國共攻而圍之、轉圍千里、矢盡道窮、救兵不至、士卒死傷如積、然陵一呼勞苦、士無不起、躬自流涕、沫血飲泣、更張空拳、冒白刃、北首爭死敵、陵未沒時、使有來報漢、公卿王侯、皆奉觴上壽、後數日陵敗、書聞、主上爲之食不甘味、聽朝不怡、大臣憂懼、不知所出、僕窃不自料其卑賤、見主上慘憤恒悼、誠欲効其款々之恩、以爲李陵報與士大夫絕甘分少、能得人之死力、雖古之名將不能過也、身雖陷敗、彼觀其意、且欲得其當而報於漢、事已無可奈何、其所擔收功亦足以暴於天下矣、僕懷欲陳之、而未有路、適會召問、即以此指、推言陵之功、欲以廣主上之意、亮曠職之辭、未能盡明、明主不曉、以爲僕沮貳師、而爲李陵游說、遂下於理、拳々之忠、終不能自列、因爲誦上、卒從吏議、家貧貨賂不足以自贖、交遊無救視、左右親近不爲一言、身非木石、獨與法吏爲伍、深幽圜牆之中、誰可告愬者、此誠少卿所親見、僕行事豈不然邪、李陵既生降、頹其家聲、而僕又自之蠶室、重爲天下觀笑、悲夫悲夫、事未易一二爲俗人言也、僕之先人、非有剖符丹書之功、文史星曆近乎卜祝之間、固主上所戲弄、倡優所畜、流俗之所輕也、假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛、與寒蟻何異、而世俗又不能與死節者比、特以爲智究即極、不能自免卒就死耳、何也、素所自樹

立、使然也、人固有一死、死或重於大山、或輕於鴻毛、用之所趨異也、木上不存先、其次不辱身、其次不辱理色、其次不辱辭命、其次黜體受辱、其次易服受辱、其次關木索、被箠楚受辱、其次剔毛髮、嬰金鐵受辱、其次毀肌膚、斷支體受辱、最下腐刑極矣、傳曰、刑不上大夫、此言士節不可不勉勵也、猛虎處深山、百獸震恐、及其在陷阱之中、搖尾而求食、積威約之漸也、故士有畫地爲牢、勢不可入、削木爲吏、議不可對、定計於鮮也、今交手足、受木索、暴肌膚、受榜箠、幽於圜牆之中、當此之時、見獄吏、則頭搶地、視徒隸、則正惕息、何者、積威約之勢也、及以至是、言不辱者、所謂強顏耳、曷足貴乎、且西伯、伯也、拘姜里、李斯相也、具五刑、淮陰、王也、受械於陳、彭越張敖、南面稱孤、繫獄抵罪、絳侯誅諸呂、權傾五伯、囚於請室、魏其大將也、衣赭衣、關三木、季布爲朱家館奴、灌夫受辱於居室、此人皆身至王侯將相、聲聞隣國、及罪至罔加、不能引決自裁、在塵埃之中、古今一轍、安在其不辱也、由是言之、男快勢也、強弱形也、審矣、何足怪乎、夫人不能蚤自裁繩墨之外、以稍陵遲、至於鞭箠之間、隨欲引節、斯不亦遠乎、古人所以重施刑於大夫者、殆爲此也、夫人情莫不貪生惡死、念父母、顧妻子、至激於義理者不然、遇有所不得已也、今僕不辜蚤失父母、無兄弟之親、獨身孤立、少卿視僕於妻子、何如哉、且勇者不必死節、怯夫葦蕩、何處不勉焉、僕雖怯懦欲苟活、亦頗識去就之分矣、何至自湛滯縲紲之辱哉、且夫賊殺婢妾、猶能引決、況若僕之不得已乎、所以隱忍苟活、幽於圜牆之中、而不辭者、恨私心有所不盡、鄙陋而文采不表於後世也、古者當貴而名爵減者、不可勝紀、唯獨儻非常之人稱焉、蓋文王拘、而演周易、仲尼厄而作春秋、屈原放逐乃賦離騷、左丘失明、厥有國語、孫子墮脚、兵法修列、不韋遷蜀、世傳呂覽、韓非囚秦、脫離孤憤、詩三百篇、大底聖賢發憤之所爲作也、此人皆意有所鬱結、不得通其道、故述往事、思來者、乃如左丘無目、孫子斷足、終不可用、而論書策、以舒其憤思、垂空文以自見、僕竊不遜、近自託於無能之辭、網羅天下放失遺聞、略考其行事、綜其終始、稽其成敗、與刑之經、上計軒輊、下至於茲、爲十表、本紀十二、書八章、世家三十、列傳七十、凡百三十篇、亦欲以究天地之際、通古今之變、成一家之言、草創未就、會遭此禍、惜其不成、是以就極刑、而無溫色、僕誠已著此書、藏諸名山、傳其人通邑大都、則僕償前辱之責、雖萬戮豈有悔哉、然此可爲智者道、雖累百世、垢彌甚耳、是以腸一日、而九迴、居則忽々若有所亡、出則不知其所往、每念斯耻、汗未嘗不發背濡衣也、身直爲圜牆之臣、寧得自引深藏於巖穴耶、故且從俗浮沉、與時俯仰、以通其狂惑、今少卿遇教以推賢進士、無適與僕之私心刺譎乎、今雖欲自彫琢曼辭、以自飾、無益於俗不信、祇足取辱耳、要之、死自然後是非適定、書不能悉悉、略陳固陋、謹再拜、(司馬遷報任安書)



臣亮百、先帝創業未半、而中道崩殂、今天下三分、益州疲敝、此誠危急存亡之秋也、然侍衛之臣不懈於內、忠志之士忘身於外者、蓋追先帝之殊遇、欲報之於陛下也、誠宜開張聖聽、以光先帝遺德、恢弘志士之氣、不宜妄自菲薄、引喻失義、以塞忠諫之路也、宮中府中俱爲一體、陟罰臧否、不宜異同、若有作姦犯科、及爲忠善者、宜付有司、論其刑賞、以昭陛下平明之治、不宜偏私使內外異法也、侍中侍郎郭攸之、費禕、董允等、此皆良實、志慮忠純、是以先帝簡拔以遺陛下、愚以爲宮中之事、事無大小、悉以咨之、然後施行、必能裨補闕遺、有所廣益、將軍向寵性行淑均、曉暢軍事、試用於昔日、先帝稱之曰能、是以衆議舉龍以爲督、愚以爲營中之事、事無大小、悉以咨之、必能使行陣和睦、優劣得所也、親賢臣、遠小人、此先漢所以興隆也、親小人、遠賢臣、此後漢所以傾頽也、先帝在時、每與臣論此事、未嘗不嘆息痛恨於桓靈也、侍中尚書長史參軍、此悉貞亮死節之士也、願陛下親之信之、則漢室之隆、可計日而待也、臣本布衣、躬耕南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯、先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事、繇是感激、遂許先帝、以驅馳、後值傾覆、受任於敗軍之際、奉命於危難之間、爾來二十有一年矣、先帝知臣謹慎、故臨崩寄臣以大事也、受命以來、夙夜憂慮、恐付託不效、以傷先帝之明、故五月渡瀘、深入不毛、今南方已定、甲兵已足、當獎帥三軍北定中原、庶竭駑鈍、攘除姦凶、興復漢室還于舊都、此臣所以報先帝而忠陛下之職分也、至於斟酌損益進退忠愚、則攸之禕允之任也、願陛下託臣、以討賊興復之效、不效則治臣之罪、以告先帝之靈、若無興德之責、則責攸之、禕允等之管、以彰其慢、陛下亦宜自諷以勵嚴善道、察納雅言、深追先帝遺詔、臣不勝受恩感激、今當遠離、臨表涕泣不知所云(諸葛亮出師表)

### 第五章 漢代の韻文

#### 第壹節 古詩、及び樂府

漢代の韻文を大別して、詩體、及び辭賦體の二と爲す、而して詩體中、又分れて古詩體、及び樂府體の二派と爲る、三者、俱に皆六義の旨に出つ、辭賦の事は後節に叙すへければ、爰に云はす、吾人は如何にして、古詩、及び樂府の二派か、漢代に發生せしか、今聊其消息を窺はさるゝからず。

蓋詩樂の源は三百篇に出つ、三百篇は上代の詩にして、兼て又上代の樂府たるなり、蓋上代に於て未だ樂府の名わらざりしと雖も、其三百篇の如きは、皆以て管絃に被らしめ得へき、古の樂章たるものなれば、其實、未だ曾て後世の所謂樂府たらずんばあらず、秦の古制を敗壞するに及び、樂亡ひ譜失して、呂律其調を得ず、漢、天下を得るに及び、天地宗廟の祭祀、奏樂なき能はず、群臣會同の饗應、亦呂律なかるゝからず、是に於て、武帝の時、始て樂府を立て、李延年と云ふ者を以て協律都尉と爲し、司馬相如等數十人を擧て詩賦を造爲し、略、律呂を論して八音の調に合せしむ、蓋是樂府の名、由て聳る所なり、是に於てか、詩、樂の名、始て分れて、一は節奏を主と爲し、一は諷咏を主とするに至れり、胡應麟云く『三百篇薦郊廟被絃歌、詩即樂府、樂府即詩、猶兵寓於農未嘗二也、詩亡樂廢、屈宋代興、九歌等篇以侑樂、九章等作以抒情、途轍漸兆、至漢郊祀十九章、古詩十九首不相爲用、詩與樂府門類始分、然厥味未甚遠也』と是より文士の篇咏、亦漸く繁く、其の古詩に在りては、五言を標準として多く意義を尙ひ、樂府は偏に節奏を主として句法も亦長短定らず、繁音促節、要は神理の完を得るに歸せり、沈德潛、其の源委を叙して『漢時詩樂始分、乃立樂府、安世房中歌、係唐山夫人所製、而清調、平調、瑟調、皆其遺音、此南與風之變也、朝會道路所用謂之鼓吹曲、軍中馬上所用謂之橫吹曲、此雅之變也、武帝以李延年、爲協律都尉、與司馬相如



諸人、略定律呂作十九章之歌、以正月上辛用事、此頌之變也」と云へり而して其題目に歌、行、吟、操、辭、曲と云ふか如き、本、皆樂府の體に係る、後世篇咏愈、多く唱酬亦益、繁きに及び、或は題を斷ち義を取り、以て篇に命し、詩樂の題目、混淆して明ならず、格調亦隨て變し、樂府の音節、遂に泯ふ、之を要するに樂府歌謠の作は、洵に漢魏の當行にして、六朝の制作、亦繁しと雖とも、遂に其末造たるを免れざるなり、今左に有名なる樂府の古題を略解し、併せて下段に於て數篇を例擧す。

江南曲 古詞に云ふ『江南可采蓮、蓮葉何田々』と、又云ふ『魚戲蓮葉東、魚戲蓮葉西、魚戲蓮葉南、魚戲蓮葉北』と、蓋其芳晨麗景、嬉遊の時を得るを美むるなり、梁の簡文の『桂枝晚應旋』と云ふは、唯遊戯を歌ふなり、又采菱曲等あるは、疑ふらくは皆此より出づるものならむ。

長歌行 古詞に『青青園中葵、朝露待日晞』と云ふもの、蓋榮華久しからず、當さに努力して樂を爲すへし、老大に至りて乃ち傷悲することなかれとの意なり。

薤露歌 喪歌なり、舊曲本、田横か門人に出づ、歌ふて横を葬れる者なり、一章には人命の奄忽として薤上の露の晞き易きか如きを云ひ、二章には人死して其精魄は蒿里に歸するを云ふ、漢の武帝の時に至りて、李延年分て二曲となし、薤露は王公貴人を送り、蒿里は士大夫庶人を送るの歌と爲

し、柩を挽く者をして之を歌はしめしか故に、亦呼て挽柩歌とも云へり。

平陵東 古詞なり『平陵東、松柏桐、不知何人劫義公』此れ漢の翟義の門人の作る所なり、義は丞相方進か少子にして、字を文中と云ふ、東郡太守と爲る、王莽か漢を篡するに及び、兵を起して之を誅せむとし克たずして害せらる、門人歌を作て之を怨むと云ふ。

陌上桑 古詞に云ふ『日出三商隅、照我秦氏樓』と舊説に邯鄲の女子羅敷と云ふ者、邑人王仁の妻と爲り、仁、後に趙王の家令と爲る、羅敷出で、桑を陌上に采る、趙王臺に登り、見て之を悦び、置酒して奪はむと欲す、羅敷善く箏を彈す、乃ち陌上桑を作りて以て自ら従はさざるを明かせりと、今其歌詞を案するに舊説と少しく同しからざるものあるに似たり。

秋胡行 舊説に魯に秋胡子と云ふ者あり、妻を納れて五日にして陳に官し五年にして乃ち歸る、未だ家に到らざるに、路傍に於て美婦人の桑を採る者あるを見て、之を悦び、車より下りて、之に謂て云く、力田は豊年に逢ふに加かす、力畊は公卿を見るに如かす、吾今金あり、願くは夫人に與へんと、婦の云く婦人當さに桑を採り、力作して、舅姑を養ふへし、人の金を願はずと、秋胡、歸りて家に至り、金を奉して母に還る、母、人をして婦を呼はしむ、婦至れば乃ち向きの桑を採る所の婦人なり、婦、其行を惡み困りて走りて河に投して死す、後人哀みて之を賦すと云ふ。



以上掲出の諸樂府の如きは、樂府の相和歌に屬するものなり、相和歌とは、蓋相和して歌ふものにて、漢の世、街陌謳謠の詞、絲竹更、相和し、節を執るもの之を歌へりと云ふ。

殿前生桂樹 古樂府の鞞舞歌なり、鞞舞歌は漢代燕享の際に用ひしものなれども、其の起る所を詳にせず。

淮南王篇 樂府の拂舞歌なり、舊説に淮南王安、服食して仙を求め、遍く方士を禮し、遂に八公と相讎へ、俱に去りて適く所を知らず、淮南小山の徒、思戀して已ます乃ち此歌を作ると云ふ、蓋其詞實に安か仙去せるを云ふなり。

白紵歌 白紵は吳の地より出つ、白紵舞は本、吳の舞なり、梁の武帝、沈約をして其詞を改めて四時の歌を爲らしむ『蘭葉參差桃半紅』と云ふか如きは即ち其春歌なり、蓋白紵歌は盛に舞者の美を稱するものなり。

上之回 戰城南 巫山高 將進酒 君馬黃 芳樹 有所思 雉子班 臨高臺

此等は樂府の鏡歌に屬するものなり、鏡は鈴の如くにして舌あり、柄を執りて之を鳴らす、漢の樂に黃門、鼓吹あり、天子の以て群臣を宴樂する所のものなり、而して短簫、鏡歌は、鼓吹の一章にして、軍樂なり、其曲數、上段掲出の「上之回」以下十八曲あり、其字、訛誤甚多し蓋樂人本、音

聲を以て相傳ふるが故に、其訓詁は復た解すへからざるに至れるもののみ。

右の外、清商、橫吹等の曲に屬するものあれども、今一一考ふへからず、又郊祀歌十九首あり、練時日、天馬徠等の如きは、其樂名なり、案するに武帝郊祀の禮を定めて太乙を甘泉に祠り、后土を汾陰に祭る、乃ち樂府を立て、李延年を以て協律都尉と爲し、司馬相如等數十人と詩賦を造爲し、律呂を論して八音の調に合せしめ、十九章の歌を作り、正月上辛を以て、童男童女七十人をして之を歌はしむと云ふもの、蓋即ち此にして、漢代に成れる樂章中にて、必らず最初の作に係るものならむ、今其辭を讀むに、曉り難きもの亦頗る多し。

五言古詩は、畢竟漢を以て創作と爲す、傳云ふ、蘇武、李陵の贈酬に始まると、蓋漢以前に在りても、三百篇中に於ける五言の如きもの、間、これなきにしもあらざるも之を樂觀するときは、三百篇の正昧とも稱すへきは、全く四言に在りしが如し、且つ漢初に於ても、亦其聲音を摸するの四言詩あり、韋孟の如き即ち是なりと雖とも、五言の一昧、更に開くるに及ひて、四言の作は、漸く少く、當時の正昧たるものは、自ら五言に在るか如きの觀を呈せり、而して其最も人口に膾炙して、模範を後世に貽こせしものは、實に蘇李の贈答、及び無名氏の十九首なりとす、十九首の作、必ずしも一人の辭にあらず、又一時の作にもあらず、或は逐臣棄妻の手に成るものもあるべく、或は朋



友潤絶、遊子他郷の感吟もあるへく、又或は離別遠征、死生新故の咏もあるへし、而して其寄托悠遠にして、神奇を濃厚に蓄へ、感愴を和平に寓するに至りては、洵に漢代の神品たるを知るなり、且つ作者の氏名は、逸して傳らざるも、其詩は口誦傳播して、永く後世に至るを見れば、其の當時に在りても、亦名作の例に在りしこと、復た決して疑ふべからず、然らば則ち吾人は敢て紙數を吝まらずして、之を掲出するの必ず讀者の意を満たすに足るを信するなり。

古詩十九首

行々重行々、與君生別離、相去萬餘里、各在天一涯、道路阻且長、會面安可知、胡馬依北風、越鳥巢南枝、相去日已遠、衣帶日已緩、浮雲蔽白日、遊子不顧返、思君令人老、歲月忽已晚、棄捐勿復道、努力加餐飯、  
青青河畔柳、鬱鬱園中柳、盈々樓上女、皎々當窗牖、娥々紅粉妝、纖々出素手、昔爲倡家女、今爲遊子婦、遊子行不歸、空牀誰獨守、  
青青陵上柏、磊々岡中石、人生天地間、忽如遶行客、斗酒相娛樂、聊厚不爲薄、驅車策駑馮、遊戲宛與洛、洛中何鬱々、冠帶自相索、長衢羅夾巷、王侯多第宅、兩宮遙相望、雙闕百餘尺、極宴娛心意、戚々何所迫、  
今日其宴會、歡樂難具陳、彈琴奮逸響、新聲妙入神、令德唱高言、識曲聽其真、齊心同所願、含意俱未伸、人生寄一世、奄忽若塵塵、何不旋高足、先據要路津、無爲守窮賤、曠爾長苦辛、  
西北有高樓、上與浮雲齊、交疏結綺牖、阿閣三重階、上有絃歌聲、音響一何悲、誰能爲此曲、無乃杞梁妻、清商隨風發、中曲正徘徊、一彈再三歎、慨慷有餘哀、不惜歌者苦、但傷知音稀、願爲雙鴻鶴、奮翅起高飛、  
涉江采芙蓉、蘭澤多芳草、采之欲遺誰、所思在遠道、還顧望舊鄉、長路漫浩浩、同心而離居、憂傷以終老、  
明月皎夜光、促織鳴東壁、玉衡指孟冬、衆星何歷々、白露沾野草、時節忽復易、秋蟬鳴樹間、玄鳥逝安適、昔我同門友、高舉振

六關、不念我手好、與我如遺跡、南箕北有斗、牽牛不負輓、其無盤石固、虛名復何益、  
冉冉孤生竹、結根泰山阿、與君爲新婚、兔絲附女蘿、兔絲生有時、夫婦會有宜、千里遠送婚、悠悠隔山阿、思君令人老、軒東來何遲、傷彼蕪蘭花、含英揚光輝、過時而不采、將隨秋草萎、君亮執高節、賤妾亦何爲、  
庭中有奇樹、綠葉發華滋、攀條折其榮、將以遺所思、馨香盈懷袖、路遠莫致之、此物何足貴、但感別離時、  
迢迢牽牛星、皎皎河漢女、織女擣素手、札々弄機杼、終日不成章、泣涕零如雨、河漢清且淺、相去復幾許、盈々一水間、脉々不得辭、  
迢迢牽牛星、悠悠涉長道、四顧何茫茫、東風搖百草、所遇無故物、焉不得速老、盛衰各有時、立身苦不早、人生非金石、豈能長壽考、奄忽隨物化、榮名以爲寶、  
東城高且長、逶迤自相屬、颯風動地起、秋草萋已綠、時更變化、歲暮亦何速、晨風懷苦心、蟋蟀傷局促、落澗放情志、何爲自結束、燕趙多佳人、美者顏如玉、被服羅裳衣、當戶理清曲、音響一何悲、絃急如柱促、踴情整巾帶、沉吟聊躑躅、思爲雙飛燕、銜泥巢君屋、  
驅車上東門、遙望郭北郭、白楊何蕭々、松柏夾廣路、下有陳死人、杳々即長暮、滄陵黃泉下、千載永不寤、滄々陰陽移、年命如朝露、人生忽如寄、壽無金石固、萬歲更相送、賢聖莫能度、服食求神仙、多爲藥所誤、不如飲美酒、被服綺與素、  
去者日以疎、來者日以親、出門望遠道、但見丘與墳、古墓犁爲田、松柏摧爲薪、白楊多悲風、蕭々愁殺人、思還故里闕、欲歸道無因、  
生年不滿百、常懷千歲憂、晷短苦夜長、何不秉燭遊、爲樂當及時、何能待來茲、愚者愛惜費、但爲後世嗤、仙人王子喬、難可與等期、  
涼風夕鳴悲、涼風率已厲、遊子無衣、錦衾遺洛浦、同袍與我違、獨宿累長夜、夢想見容輝、真人性古淡、枉駕惠前綬、願得常巧笑、携手同車歸、既來不須臾、又不處重闕、亮無晨風翼、焉能凌風飛、俯仰以適意、引領遙相歸、徒倚懷感傷、垂涕沾雙扉、  
孟冬寒氣至、北風何慘慄、愁多知夜長、仰觀衆星列、三五明月滿、四五蟾兔缺、客從違方來、遺我一書札、上言長相思、下言久離別、置書懷袖中、三歲字不滅、一心抱區々、懼君不識察、



客從遠方來、遺我一端綺、相去萬餘里、故人心尚爾、文彩雙鸞織、裁爲合歡被、著以長相思、緣以結不解、以膠投漆中、誰能別離此、

明月何皎々、照我羅牀幃、憂愁不能寐、攔衣起徘徊、客行雖云樂、不如早旋歸、出門獨彷徨、愁思當告誰、引領還入房、淚下沾襟衣、

古人此等の諸詩を評して、或は風餘と謂ひ或は詩母と稱す、蓋直に其の國風の遺意を承けて、後代の詩源を開きしを謂ふなり、然れども今其の何人の手に成りしを知るべからず、或は云ふ、枚乗の作る所に係ると、又或は云ふ、其孤竹篇の如きは、傅毅の手に成れりと、且つ其の十九首の目も、亦後人の撰する所にして、當時に於ける五言の古詩、豈又此十九首にのみ止らんや、蓋當時上に在りて、武帝の文詞を好尚するありしが故に、下に於ても、才士各、新を争ひ奇を闘はして、此新體詩を創作するに及びしこと、亦自然の傾向にして、氣運の至る所、竟に以て秘すること能はざるものあるなり、然らば則ち十九首、及び蘇李贈答の作の如き、亦其解化せし所と云ふも、決して過言にあらずるべし。

蘇李の篇什は、多く見えざるも、精金美玉は、其質の如何に在りて、其量之多寡に存せず、遺什の寡きは、却て益、其の愛重すべきを見るなり、後人或は蘇李の作にあらずるを疑ふ者おれども、其篇什の果して蘇李の手に成りしと否とを論せず、其詩の上乗なるに至りては、復た決して之を掩ふべからず、千金の璧は、其積に頼りて光を増さす、況んや作者の氏名、久しく定まるに於てをや、故に古來之を豈稱するもの一にして足らず、就中沈德潛の評して、蘇李の詩、言情款々として感悟具さに存し、急言竭論なくして、意自ら長く神自ら遠く、聴く者をして油々として善く入り、其の然るを知らずして然らしむ、是を五言の祖と爲すと云ふか如き、最も其肯綮に中るを信するなり。

蘇武 は字を子卿と云ふ武帝の時の人なり、天漢二年を以て匈奴に使し、拘留せらるること十九年に及びしも、漢節を持って屈せず、昭帝の時、匈奴と和親するに及び、漢に歸ることを得て、典屬國に拜せられたり、後宣帝の神爵二年に卒せり 李陵は字を少卿と云ふ武と同時の人なり、都騎尉と爲り、嘗て歩卒五千を將めて匈奴を撃ち、轉鬪すること千里、矢盡き刀折れて、遂に匈奴に降る、其王單于、女を以て之に妻せ、立て、右校王と爲す、匈奴に在ると二十餘年にして卒せり。蘇李贈答の作は蓋兩人匈奴に在る時の贈答に係るものなり、兩人同じく漢人を以て、天涯異域の地に留り、友誼互に至る、武の漢に歸るに及び、陵は留りて匈奴に在り、去る者は以て歡を爲し難く留まる者は以て愁傷に堪えず、千情萬恨、互に異域無限の思を裁して輒ち優に五言の詩中に入れ、以て生別天涯の贈酬を爲せり、今猶傳はるもの即ち是なりと云ふ、武の詩は纏綿にして、陵は簡摯なり、而して其神境自然、興象渾淪なるに至りては、共に千古に掩照する所なり、陸時雍之を評し



て蘇李の贈言は、唏嘘の語多くして蹶蹙の聲なしと云ふもの、寔に之を得たりと爲す、今下に於て二家の什を掲げて、其体制を窺ふに便ならしむ。

蘇武詩四首

骨肉維枝葉、結交亦相因、四海皆兄弟、誰爲行路人、况我運枝樹、與子同一身、昔爲常與焉、今爲參與辰、昔者常相近、勸若胡與秦、誰念常乖離、思情日以新、虬鳴思野帥、可以喻嘉賓、我有一樽酒、欲以贈遠人、願子留斟酌、叙此平生親、結髮爲夫妻、恩愛兩不疑、歡娛在今夕、燕婉及良時、征夫懷往路、起視夜何其、參辰皆已沒、去々從此辭、行役在關塞、相見未有期、握手一長歎、淚爲生別滋、努力愛春華、莫忘歡樂時、生當復來歸、死當長相思、黃鸝一遠別千、單願徘徊、胡馬共其群、思心常依依、何況雙飛龍、羽翼當當乖、幸有絃歌曲、可以喻中懷、謂爲遊子吟、冷々一何悲、絲竹厲清聲、慷慨有餘哀、長歌正激烈、中心憤以摧、欲展清商曲、念子不得歸、俯仰內傷心、淚下不可揮、願爲雙黃鶴、送子俱遠飛、烟々晨明月、飄々秋蘭芳、芬馨良夜發、隨風聞我裳、征夫懷遠路、遊子戀故鄉、寒冬十二月、晨起踐嚴霜、俯觀江漢流、仰視浮雲翔、瓦友遠別離、各在天一方、山海隔中州、相去悠且長、嘉會難再遇、歡樂殊未央、願言崇令德、隨時愛景光、

李陵與蘇武詩三首

良時不再至、離別在須臾、屏營衢路側、執手野踟躕、仰視浮雲馳、奄忽互相踰、風波一失所、各在天一隅、長當從此別、且復立斯須、欲因晨風發、送子以嗟嘯、携手上河梁、遊子暮何之、徘徊蹊路側、恨々不能辭、行人離久留、各言長相思、安知非日月、弦望自有時、努力崇明德、皓首以爲期、嘉會難再遇、三載爲千秋、臨河瀟長纒、念子恨悠悠、遠望悲風至、對酒不能酬、行人懷往路、何以慰我愁、獨有盈觴酒、與子結綢繆、

今試に上段掲出の十九首、及び蘇李の篇什を把て、三百篇中時代の最新なるものに比較しても必ず其其段の自ら異なる所ありて、轉々別調に屬するを見るへし、是畢竟其の原く所は三百篇に在るにもせよ、五言の一昧を成せるは、洵に漢を創始と爲さるへからざる所以なりとす、蓋語言は時に因りて變し、人心は奇を逐ふて趨る、而し世運の進歩、亦其間に起る、是に於てか簡質なる四言の詩も、竟に變し較、發達せる五言の昧に之かざるへからず、然れども、詩の本領は其語音の足るよりも、寧ろ言外の韻に存するものなるか故に、簡質なるもの、却て言外の意多く、而して其言句足るに及びて、諷詠深遠の旨、漸く微なるに至るは亦免るへからざる所なり、故に李太白嘗て云く、興寄深微なるは、五言は四言に及はずと、蓋亦豪傑闖世の語なりとす、然らば即ち五言昧の起りしことは、全く世運の進歩に應じて發生したる、漢代文學の新現象と云はざるへからず、此の如くにして五言の新昧詩は興れり、さなきたに奇を好むの人心なれば、豈に唯此にて止ること肯せむや、武帝の元封三年に、栢梁臺を落成して群臣を會し、席上聯句の遊を爲すに及び、七言の詩昧は遂に起れり、其詩、凡て二十六句より成る、即ち次の如し。

日月星辰和四時 (帝)

郡國司馬羽林材 (大司馬)

和撫四夷不易哉 (大將軍衛青)

瞻鸞駟馬從梁來 (梁王孝王武)

總領天下誠難治 (丞相石慶)

刀筆之吏臣執之 (御史大夫倪寬)



- 撞鐘伐鼓擊中詩 (太常周建德)
- 周衛交戟禁不時 (衛尉路博德)
- 平理清訟決嫌疑 (廷尉杜周)
- 郡國直功差次之 (大鴻臚董充國)
- 陳粟萬石揚以箕 (大司農張成)
- 三輔盛賦天下危 (左朝胡盛宣)
- 外家公主不可治 (京兆尹)
- 鑿夷胡賀當會其 (典屬國)
- 批把掃粟桃李梅 (大官令)
- 醫妃女辱甘如飴 (郭舍人)
- 宗室廣大日益滋 (宗正劉安國)
- 總領從宗柏葉蠶 (光祿勳徐自爲)
- 修飾與馬待駕來 (太僕公孫賀)
- 乘輿御物主治之 (少府王溫舒)
- 徵道官下隨時治 (執金吾中尉豹)
- 盜阻南山爲民災 (右扶風李成伯)
- 椒房聖更領其材 (膳部陳崇)
- 柱桁榑榘相支持 (大匠)
- 走狗逐兔張翠羅 (上林令)
- 迎客請風幾窮說 (東方朔)

是實に七言古詩の權輿たると同時に、又後世聯句の濫觴たるべきものなり、是より先き高祖の大風歌、項羽の垓下歌等の如き、間、七言の作を見ざるにあらざるも、其風神を案するときは全く楚風の變體に外ならずして、未だ全く七言古詩の軀裁を爲すに及はず、栢梁の聯句出るに及び、始て文園の開拓に又一步を進めて、詞才の爲めに大に武を用ふるの地を増さしめたるなり、然れども漢詩の本色は猶五言に存して、七言は未だ十分の發達を爲すに至らず、是氣運の未だ爛熟せざる、其七言の時代たるに於ては、更に時月の以て要すべきものあるに由れはなり、故に吾人は敢て五言を以て、漢魏の普通詩體と稱するに躊躇せざるなり。

西京蘇李諸人の作、首々俱に佳にして、漢代の神品たることは、略、上に述べたるか如し、其他古詩に在りては、無名氏の佳作、猶多く存するものなり、樂府體にては、卓文君の白頭吟、班婕妤の怨歌行の如き、俱に女流の手に成りて、神情苦怨、其妙言ふへからず、東京は氣格漸々下るも、張衡の四愁詩、蔡邕の飲馬長城窟行、其女の悲憤、胡笳、及び蔡嘉の贈婦詩等の如き、或は寄托悠深なるものあり、或は憂怫沈痛、荒涼悲蒼なるものありて、俱に皆漢代の妙品と稱すへし、又無名氏の焦仲卿妻詩一篇の如きは、凡一千七百四十五言より成れる一大叙事詩にして、篇中備さに數人の語を述へて其性情口聲を寫し、的々、眼に在るか如し、而して之を評するもの或は贊して化工の筆と稱する者あれば、又一方には或は譏て繁絮、要を擧る能はずと云ふ者あり、又其詩を以て漢詩と爲す者あり、梁詩と爲す者ありて、紛々たる聚訟、蝟の如くに繁し、然れども、其軀を案するとき、は、全く漢人の撰に出るに似たり、且つ其事實の漢末に係るを見れば、蓋亦時人の之を詩にして傳へたるものなるべき歟、唯、其脚色の甚、奇巧に涉り、言句の瞻麗に入るを以て、世に齊梁間の目ある所以歟、沈德潛は樂府の軀と爲して、其漢代の作たるを稱せり、要するに、漢代に在りては、或は別調に屬するも、同時代の作たるとは亦決して怪むに足らざるなり、讀者宜しく其原文に就て更に細玩する所あるへし。



以上列叙せし所、固より漢代詩樂の一斑に過ぎずと雖とも、大要亦略、此の如し、今其特色を略観するときは、蓋質の一字を以て之を掩ふことを得へし、然れとも、其質なるものは、後世の所謂質にあらず、後世の質は、多くは作爲に成るも、漢の質は自然に出つ、自然に出るものは、質中、自ら文ありて、大理石の光澤あるか如く、作爲に成るものは、伊乃木の生氣なきか如く、似るは則ち似るも、靈活入神の處を見ず、故に樸茂雄深の間に於て、一種の風韻を帯ひ、匠心靈巧、工を求めずして工自ら存し、佳句の摘むべきなくして首々皆佳ならざるなきは、漢詩の貴ふべしと爲す所以なり、胡應麟云く『兩漢之詩、所以冠絕古今、率以得之無意、不惟里巷歌謠匠心信口、即枚李張蔡未嘗鍛鍊求合、而神聖工巧、備出天造』と、蓋亦信なり、今左に漢代に於ける、樂府、古詩の著名なるもの數首を附載す。

白頭吟

卓文君

皚如山上雪、皎若雲間月、聞君有兩意、故來相決絕、今日斗酒會、明日溝水頭、躑躅御溝上、澗水東四流、澗水復澗々、嫁娶不須啼、願得一人心、白頭不相離、竹竿何嫋々、魚尾何嫋々、男兒重意氣、何用錢刀爲

怨歌行

班婕妤

新製齊紈素、皎潔如霜雪、裁成合歡扇、圓々似明月、出入君懷袖、動搖微風發、常恐秋節至、涼颯亦炎熱、弄杼隨箏中、恩情中道絕

四愁詩并序

張衡

張衡不樂、久處機密、陽嘉中出爲河間相、時國王臨著、不遵法度、又多豪右并兼之家、衡下車治、威嚴能內察、屬縣蒸鬱、

行巧却皆密知名、下吏收捕盡服膺、賭豪俠遊客、悉憤懼逃出境、郡中大治、爭訟息、獄無繫囚、時天下漸弊、辭々不得志、爲四愁詩、傲風原以美人爲君子、以珍寶爲仁義、以水深雲穿爲小人、思以道術爲報、貽於時君、而懼讒邪不得以通、其辭曰、一思曰、我所思兮在太山、欲往從之梁父艱、側身東望涕泗翰、美人贈我金錯刀、何以報之英瑋瑤、路遠莫致倚道邊、何爲懷憂心

二思曰、我所思兮在桂林、欲往從之湘水深、側身南望涕泗漣、美人贈我金珥珥、何以報之噉玉盤、路遠莫致倚側恨、何爲懷憂心

三思曰、我所思兮在漢陽、欲往從之隴阪長、側身四望涕泗滂、美人贈我錦綵段、何以報之青玉案、路遠莫致倚增歎、何爲懷憂心

四思曰、我所思兮在廣門、欲往從之雪雰雰、側身北望涕泗霏、美人贈我錦綵段、何以報之青玉案、路遠莫致倚增歎、何爲懷憂心

相掩、  
飲馬長城窟行  
昔々河邊柳、綿々思遠道、遠道不可思、宿昔夢見之、夢見在我傍、忽覺在他鄉、他鄉各異縣、展轉不可見、枯桑知天風、海水知天寒、入門各自媚、誰肯相爲言、客從遠方來、遺我雙鲤鱼、呼童烹鲤鱼、中有尺素書、長跪讀素書、書中竟何如、上有加餐客、下有長相憶、

悲憤詩  
嗟薄祐兮遭世患、宗族珍兮門戶單、身執略兮入四關、懸險阻兮之荒巖、山谷險兮路漫漫、谷東嶺兮俱悲嘆、冥冥夜兮不能安、饑當食兮不能餐、常流涕兮骨不乾、薄志節兮念死難、雖有活兮無形顏、惟彼方兮齒腸腸、陰氣凝兮露夏零、沙洲飄兮塵冥々、有草木兮春不榮、人似禽食兕脰、言兜離兮狀窮瘁、歲暮時過征、夜悠長兮禁門扃、不能寐兮起屏營、登胡殿兮臨廣庭、玄雲合兮野月星、北風厲兮霜冷々、胡笳動兮鴻馬鳴、孤雁啼兮聲嗚々、樂人與兮頻擊節、音相和兮悲且清、心吐思兮胸憤盈、欲舒氣兮恐彼

際、含哀咽兮涕沾頰、家既迎兮當歸寧、臨長路兮拍所生、兒呼母兮啼失聲、我掩耳兮不忍聽、追持我兮走蒼々、頓復起兮毀顏形、還顧兮兮破人情、心相絕兮死復生、

第二節 辭賦



漢代に於ける古詩樂府の事は、略、上節に述べたるか如し、然るに辭賦の流行は、遂に其上に出  
てたるもの、如く、隨て作者も亦多く輩出せり、蓋辭賦なる者は、本、楚騷の一變したるものにし  
て、其淵源に遡るときは、亦詩の苗裔に出つと雖も、六義に於ては、畢竟附庸たるを免る能はず、  
何となれば、六義の旨とする所は、雅頌風諭の意に在るも、漢代辭賦の傾く所は、偏に侈麗闕衍の  
辭に在り、隨て其の所謂風諭の義を失へり、故に當時に在りて、楊雄も亦嘗て感悔して云く「詩人  
之賦麗以則、辭人之賦麗以淫」と、是正に楚騷と漢賦とを區別するものなり、蓋屈原、宋玉以下諸子  
の作る所、亦同じく稱して賦と云ふは、本、賦の六義の一に居るを以てなり、然るに漢代司馬相如  
諸人の作る所は其名を襲て其意に違く、馳騁日にトて古意全く微にして、單に賦の義を以て敷陳鋪  
叙の意となし、隨て馳騁縱橫、遂に一派濁流の支分を開くに及へり、故に吾人け之を稱して辭賦と  
云ひ、以て楚騷の賦體と區別し、并せて古今の異同を標識せむと欲す。

漢代辭賦の端は陸賈先づ之を前に扣けり、然れとも時猶草創の際に屬して、著作、多からず、藝文  
志、纔かに其三篇を稱す、賈誼に及んで逸才を懷て屈子懷沙の憾を弔し、鵬鳥室に入りて死生を大  
觀す、是に於てか斯道一振し、枚乘、司馬相如、出てて、詞采、星の如くに馳せて、華藻、雲の如  
く騰かる、是に嗣ては、枚舉、東方朔、王褒、劉向の徒より、楊雄、班固の流に至るまで、皆能手

と稱せらる、其他大作小賦を以て一時に呼號せし者を擧れば、殊に一二を以て之を悉すべからず、  
孝成の世に論して之を録せしもの、蓋千有餘篇に上れりと云ふ、然れとも之か最たる者を擧れば、  
必ず指を司馬相如に屈せざるべからず、漢賦の相如あるは、猶楚騷の屈原に於けるか如く、其人を  
擧るときは、餘は以て之を蔽ふに足るべし、是餘子の詞藻の巧ならざるにあらずして、相如の才の  
覺に辭賦家の冠冕たる光譽を荷ふに足るものあればなり、然らば則ち吾人は先づ其平生を考へて、  
之か畧傳を立てざるべからず。

司馬相如 は字を長卿と云ふ、成都の人なり、少時讀書を好み、又擊劍を學ぶ、龐相如の人と爲  
りを慕ふて、名を相如と更む、質を入るべしを以て郎と爲り、孝景帝に事えて武騎常侍と爲る、蓋其  
の好む所にあらざるなり、是の時、梁の孝王來朝す、而して游説の士、鄒陽、枚乘の徒、相從ふ、  
相如見て之を説ひ、因て辭職して梁に客遊す、孝王、諸生と舍を同ふして居らしむ、是の時「子虛  
賦」を著す、孝王卒するに及ひ、家に歸る、貧にして自ら業とすることなし、臨功の令、王吉と云  
ふ者、素より相如と相善し、招て曰く長卿久しく官遊して其志を遂げず、且らく來て我に過されと  
是に於て相如往て都亭に舍す、吉繆て恭敬の狀を爲し、以て人目を聳動す、臨功の地、富人多く、  
卓王孫の家、最名あり、其の令に貴客あるを聞くや、具を設けて客と令とを招く、令既に至る、接



待の者、百を以て數ふ、而して長卿未だ至らず、遽かにして病ありて往くと能はずと謝す、令敢て食を嘗めず自ら往て相如を迎ふ、相如已むを得ず強て駕を狂く、車騎揚々として姿容甚、閑雅なり是に於て一坐盡く傾く、酒酣にして相如琴を鼓すること一再行、時に卓王孫の女、文君と云ふ者あり、新に寡居して音を好む、相如聞て乃ち琴心を以て之に挑む、文君竊に戸より窺ひ、心甚之を悦ひ、又其の當るを得ざるを恐る、宴既に罷む、相如人をして文君の侍者に賜て殷勤を通せしむ、文君夜亡けて相如に走る、相如與に馳せて成都に歸れば家徒、四壁のみ立てり、卓王孫大に怒て之を絶つ、之に久ふして文君樂ます、相俱に再び臨邛に抵り、盡く其車騎を賣り、一酒舍を買ふて酒を酤る、而して文君は罽に當り、相如は犢鼻褌を着けて器を市中に滌ふ、卓王孫聞て之を耻ぢ、爲に門を杜して出でず、昆弟諸人、交、王孫に謂て曰く一男兩女ありて足らざる所のものは財にあらす今文君己に身を司馬長卿に失す、長卿落魄して貧なりと雖、亦人材なり、奈何ぞ相辱むること此の如きに至ると、卓王孫已むを得ずして文君に衣服財物と錢百萬とを與ふ、文君乃ち相如と成都に歸り田宅を買ふて富人と爲る、居ること久ふして、蜀人楊得意と云ふ者、狗監と爲りて武帝に侍す、帝「子虛賦」を讀みて善しとして云く、朕此人と時を同くすることを得ざるかなと、得意云く、臣の邑人司馬相如自ら此賦を爲ると言へりと帝驚き召して相如に問へば相如曰く然り、然れども此諸

侯の事のみ、未だ觀るに足らず、請ふ天子游獵の賦を爲りて之を奉らむと、帝乃ち尙書をして筆札を給せしめしかは相如其脚色を案し、子虛、烏有、亡是の三人を設けて、問難の記を作る、其の子虛と云ふは「虚言」の義にして以て楚の爲めに稱し、烏有先生とは「烏有此事哉」の義にして以て齊の爲めに難詰す、亡是公とは「亡是人」の謂にして以て天子の義を明にす、此の三人を藉りて、巧に馳聘縦横の辭を屬して、以て天子諸侯の苑囿を推論す、而して其卒章に於て、之を節儉の旨に歸し、因て風諫して之を奏す、帝大に説ひ、拜して郎と爲す、是より屢、賦を獻して大に帝の意を得たり、後病を以て退て茂陵に家居す、帝其病甚しきを聞き、其書の竟に失はれんことを恐れ、人を遣して悉く之を取らしむ、至る時、相如既に死して家に書なし、其妻の云く長卿未だ嘗て稿を存せず、時時書を著はすも亦毎に人に取去らる、唯、其未だ死せざる時、一卷の書を爲りて云く、使者あり來て書を求わは之を奏せよと、乃ち遺札の書一卷を奏す、書中具さに封禪の事を言ひ、且つ附するに頌を以てせり、其頌は下の如し。

自我天親、雲之油油、甘露時雨、厥壤可遊、滋液滂澍、何生不育、嘉穀六穗、我穡曷嘗、非唯雨之、又潤澤之、非唯備之、我祀布陳、之、萬物靡々、仰而慕思、名山顯位、皇君之來、君乎君乎、侯不遵設、殷々之獻、樂我君圃、白質黑章、其儀可嘉、駉々穆々、君子之懸、嘉聞其聲、今觀其來、厥儉靡從、天瑞之臨、茲亦於舞、虞氏以興、混々之麟、游彼靈時、孟冬十月、君徂郊祀、隨我君典、帝用享祉、三代之前、蒸未嘗有、宛々黃龍、興德而升、采色炫爛、煥爛輝煌、正陽顯見、聲悟黎蒸、於傳載之、云受命所乘、厥之有



章、不必詳々、依類託諷、諷以封疆、

相如の行事は略、此の如し、其人物は言ふに足らざるも辭賦の才に至りては、實に漢代の翹楚と稱せざるへからず、上記の封禪頌の如き、其體大にして其思精なること、亦是駁々乎として雅頌の域に入るものと云ふへし、然れとも之を出すに諛言を以てし、之を文るに異典を以てするか故に識者多くは以て之を陋とす、又其辭賦の如き、筆端の采華馳聘、覺えず讀者をして其篇の終るを忘れしむるものありと雖も、多くは文に勝ちて質に乏し、故に之を評する者も、亦區々にして贊否相半せり、司馬遷は其虛辭濫説多きも、歸する所は節儉の旨に引くものなれば、詩の風諫と異ならずと云ひ、楊雄は靡麗の賦、百を勸めて一を風す、猶ほ鄒衛の聲を馳聘し、曲終て雅を奏するか如しと云へり、之を要するに其辭は洵に美なれとも、詩人風喻の意、甚衰えたるは、決して掩ふへからず、蓋是獨り相如に於てのみ谷むへきにあらす、當時に於ける大小の辭賦家、皆然りと爲す、今夫楚騷の能く變風變雅の意を得ると稱せらるゝ所以のものは、其の悵歎俳側の旨、中に熾にして、噫鬱悲愴の音、引喻點染の間に發すればなり、然るに辭賦家の主とする所は、獨り侈麗閎衍の辭に在りて感遇眞摯の處を見ず、一は以て其意を先とし、一は以て其文を主とせり、而して辭賦家の騷人と相異なる所、蓋亦此に在るなり。

相如と相前後して、枚乘、枚臯、東方朔等の諸人、最も名あり、乘は淮陰の人にて吳王濞の郎中と爲り、王の逆を謀る時、書を奏して之を諫めしも王之を用ゐずして、卒に禽滅せらるゝ、乘是に由て名を知らるゝ、後に梁に遊ひしか、梁の客、皆辭賦を善くせしも、乘の上に出る者あらす、武帝位に即くに及び、安車蒲輪を以て之を徵せしも、未だ至らずして道にて死せり、臯は乘の孽子なり、字を少孺と云ふ、經術に通せず、賦頌を作爲して戯戯を好み、故に其文諛笑にして閑靡ならず頗る俳倡に類せり、然れとも稿を屬すると甚、疾速なり、嘗て行に従て、甘泉、河東、泰山等に至る、帝感する所ありて之を賦せしむるに、詔を受けは賑ち成れりと、故に其の賦せし所も亦隨て多く、漢書藝文志に其の百二十篇を稱す、然れとも今猶存するものは僅々數篇に過ぎず、司馬相如は善く賦を爲りしも其成るとは甚、遲かりしとぞ、藝文志、纔かに其二十九篇を稱す、故に其篇數を以てすれば、相如は臯の四分の一に過ぎず、而して其巧拙に至りては、殆んど同日の論にあらず、是に由て之を觀れば拙速も亦甚、貴ふへきにあらざるなり、東方朔は齊人なり、其賦も亦俳調、枚臯と相似たり、嘗て上書しし高く自贊して『臣朔年二十二、長九尺三寸、目若懸珠、齒若編貝、勇若孟賁、捷若慶忌、廉若鮑叔、信若尾生、若此可以爲天子大臣矣、臣朔昧死再拜以聞』と云ふ、是其滑稽的性行の人たるを知るに足る、而して其滑稽的なるは、蓋深刻の世に處して身を保つの一方便と



爲せしものに似たり、其の嘗て俗に陸沈して世を金馬門に避く、宮殿の中、以て世を避け身を全ふすへし、何を必ずしも深山の中、嵩廬の下のみならんやと歌ひしか如き、尤も其意を見るに足る、然れとも其亡諫諸篇の作の如きは、低徊怨嘆、尤も其筆力を見るに足るものなり、意ふに朔の木色其れ或は此に存するか、朔の後には、劉向、楊雄の徒、前後に輩出して、皆辭賦を善くせり、是皆西漢に於ける辭賦家の錚々たる者なり、而して東京にて能く此等諸詞人の後を追ふに足る者を舉れば、班固、張衡、蔡邕等を以て屈指と爲さるへからず、張蔡、俱に東漢の末葉に出つ、衡は字を子平と云ひ邕は伯喈と云ふ、又皆詩賦を以て名あり、而して其音節詞調、亦皆骯髒無聊の氣多く、詞華更に張る所ありと雖、俯仰感憤、一として荒涼滿目、窮途の感ならざるはなし、故に古人多く東漢の詩賦に於て張蔡と述稱す。

今左に漢賦の例として、相如の子虛賦を附見す、賦中に上林の事を叙す、故に又上林賦と名づく、蓋其實一なるなり、文選には截て二篇と爲し、前半を子虛賦とし、後半「亡是公听然而笑」以下を上林賦と爲せども、恐らくは其旨を失ふものならむ。

楚使子虛使於齊、齊王悉發境内之士、備車騎之衆、與使者出田、田罷、子虛過諸島有先生、而無是公在焉、坐定、烏有先生曰、今日田、樂乎、子虛曰、樂、獲多乎、曰、少、然則何樂、曰、僕樂齊王之欲奪僕以車騎之衆、而僕對以靈夢之事也、曰、可得聞乎、子虛曰、可、王駕車千乘、選徒萬騎、田於海濱、列卒滿澤、架網彌山、揜兔罝虎、射鹿豕麋、務於鹽浦、割鮮染輪、射中獲多、矜而自功、

願謂僕曰、楚亦有平原廣澤、游獵之地、饒樂於此者乎、楚王之獵、何與寡人、僕下車對曰、臣楚國之鄙人也、幸得宿衛、十有餘年、時從出遊、游於後園、習於有無、然猶未能徧觀也、又選足以首其外游者乎、齊王曰、雖然、畧以子之所聞見、而首之、僕對曰、唯唯、臣聞楚有七澤、常見其一、未觀其餘也、臣之所見、蓋特其小小者耳、名曰雲夢、雲夢者、方九百里、其中有山焉、其山、則盤紆澗澗、隆崇嶺嶺、岑巖參差、日月蔽虧、交錯糾紛、上干霄雲、飛池陂陀、下屬江河、其土、則丹雘赭堊、雒黃白粉、錫堊金銀、衆色炫耀、照爛龍麟、其石、則赤玉玫瑰、珠璣珊瑚、璚琦玉厲、璞石武夫、其東、則有懸圃閼風、蒼若射干、鬱窮昌蒲、江離蘼蕪、諸蔗、稊且、其南、則有平原廣澤、登降陁陁、案衍曠曼、緣以大江、限以巫山、其高燥、則生茂蔭葱蒨、薛荔香蘋、其卑濕、則生藏菴菴、東醫彫胡、蘼蕪蘼蕪、葦蕭野苧、衆物居之、不可勝勝、其西則有湧泉清池、激水推移、外發芙蓉、內隱銀石白沙、其中、則有神龜蛟龍、黿黿黿、其北、則有陰林巨樹、樛柯豫章、桂椒木蘭、麋離朱楊、楸楠檉栗、楸楠岑芬、其上也、則有赤援蠶絲、鸚鵡孔鸞、騰遠射干、其下、則有白虎玄豹、蟻蜂羆豸、兕象野犀、窮奇獲豸、於是、乃使嘉賂之倫、手格此獸、楚王乃駕馴駟之駒、乘彫玉之輿、靡魚須之機旃、曳明月之珠旗、建干將之雄戟、在烏喙之雕弓、右夏服之勁箭、陽子騶乘、縱阿爲御、案節未舒、即陵狡獸、騁巧巧、蹶距虛、軼野馬而馳驟、乘遺風而射游騶、傾側漉漉、雷動漉漉、星流電擊、弓不虛發、中必決背、洞胃透腋、絕乎心繫、獲若雨獸、揜草蔽地、於是、楚王乃引節東向、翔翔容與、覽乎陰林、觀壯士之靈怒與猛獸之恐懼、微飢受飢、嚼嚼衆物之變態、於是、鄭女曼曼、服被阿錫、揜綺縠、垂露繁、翠翫發、紆徐委曲、辭機谿谷、粉粉排排、揚榭郵門、張羅垂罝、扶輿騎靡、嗚呼萃萃、下障蘭蕙、上拂羽蓋、錯翡翠之蔽葵、纒繞玉綬、縹乎忽忽、若神仙之彷彿、於是、乃相與察於懸圃、整珊珊、上金隄揜翠翠、射峻嶺、微燭出、纒縠縠、七白鶴、逆駕鵬、雙鶴下、玄鶴加、忘而後發、游於清池、浮文圃、揚桂棹、張翠帷、建羽蓋、罔璫瑁、鈞紫貝、樞金鼓、吹鳴嶺、榜人歌、聲流喝、水蟲戲、波瀾湧、涌泉起、奔揚合、礪石相擊、碾礪礪、若雲霓之聲聞乎數百里之外、將息者、擊鼙鼓、起烽燧、車案行、騎就隊、縹乎淫淫、班乎裔裔、於是、楚王乃登陽雲之臺、泊乎無爲、潛乎自持、勺藥之和具、而後御之、不若大王終日馳騁、而不下輿、將制輪蹄、自以爲娛、臣竊觀之、齊殆不如、於是、王默然無以應僕也、烏有先生曰、是何言之過也、足下不遠千里、來況齊國、王悉發境内之士、而備車騎之衆、以出田、乃欲觀力致獲以娛左右也、何名爲存哉、問楚地之有無者、願聞大國之風烈、先生之餘論也、今足下不稱楚王之無厚、而盛推雲夢、以爲高者、言淫樂、而顯侈靡、竊爲足下不取也、必若所言、固非楚國之美也、有而首之、是章君之惡、無而首之、是害足下之信、章君之惡、而傷私誼、二者無一可、而先生行之、必且輕於齊而重於楚矣、且齊、東有巨海、南有琅琊、觀乎成







郊、以賄諂諛、賤將瑣、使山澤之民得至焉、實破池而勿禁、虛宮觀而勿例、發倉廩以賑貧窮、補不足、恤饑寒、存孤獨、出德號、省刑罰、改制度、易服色、更正朔、興天下爲始、於是歷百日以警戒、製朝衣、乘法駕、建華旗、鳴玉鸞、游乎六藝之圃、騫乎仁義之塗、覽觀春秋之林、射狸首、兼騶虞、弋玄黿、建干戚、截雲罕、揜羣雅、馳伐檀、樂鸞音、修容乎禮園、踞翔于書園、述易道、放怪歌、登明堂、坐清廟、恣羣臣、奏得失、四海之內、靡不受獲、於斯之時、天下大說、嚮風而靡、隨流而化、喟然與道而遷義、刑錯而不用、德隆乎三皇、功業於五帝、若此、故獵乃可喜也、若夫終日華露馳騁、勞神苦形、罷車馬之用、抗士卒之精、費武庫之財、而無德厚之思、務在獨樂、不觀衆庶、忘國家之政、而貪羣兎之獲、則仁者不山也、從此觀之、齊楚之爭、豈不哀哉、地方不過千里、而開居九百、是草木不得頓辟、而民無所食也、夫以賂侯之細、而樂萬乘之所侈、僕恐百姓之被其尤也、於是、二千欣然改容、超若自失、遠避席曰、鄙人固陋、不知忌諱、乃今日見教、謹謝命矣。

## 第四編 六朝の文學

### 第壹章 總論

歷史上、通例六朝と稱するは、吳、晉、宋、齊、梁、陳の六朝間にして、文學上にも亦多くは漢魏六朝と運呼すれども今爰に稱する所の六朝文學とは、特に魏、晉、南北朝を通じて隋の終に至る、凡四百餘年間の文學を槩稱するものなり、蓋は一は便宜に出るものなれども、又一には鄴下の品藻、早く既に靡麗齊比の源を開けはなり、而して因襲、風を爲して其聲色を改めず、以て直に陳、隋の際に至る、故に吾人は、姑らく魏を以て六朝文學の首に冠して、隋を以て其終尾と爲す。

既に上編に於て叙述せしか如く、漢季の亂、既に極りしも、赤帝の子孫、猶能く起て大蛇を中斷せんと欲する者あり、巴蜀に偏安すと雖とも、正義の下、容易に能く忠亮の士を得て、天下三分の業を成せり、是の時に當り、吳主孫仲謀は、江東に割據して英畧自ら用ゐ、才俊雲の如くに集る、而して曹孟徳は、烏雄の姿を懷て中原に據有し、直に漢家の後を承けて天下に呼號し、士馬精強、其氣既に一世を吞めり、然れども讎蚌の相持するは、漁者の利とする所にして、其利を收めし者を司馬晋の武帝と爲す、此間大凡五十餘年、號して三國の世と云ふ。



然れども彬々たる文學の士を數ふるに至りては、蜀吳は幾んど其人を見ず、唯魏は大國に跨りて、奇才饒く、之に加ふるに、曹氏父子、文學を好みて、戎馬倥傯の際と雖とも、猶吟哦を廢せず、鄴下數子の徒、亦相和して齊しく驅り、一時其盛を稱せり、而して其風骨猶能く漢代の遺意ありて、復た純然たる南北間の靡漫に類せず、故に後世詞藻を稱して漢魏と連呼するは蓋此か爲めなり、然れとも當時割據攻伐の際に屬し、名教、頽廢して、儒風、日に瀆く、魏氏亦曾て泮宮を設け、大學の制を立てたりと雖とも、朝に譎詐篡弑の事を行ふて、夕に經試科擧の法を設くるものなれば、徳教惡んそ是よりして興らむや、蓋興學の典、固より區々たる其末節に存せざるなり、故に其儒學に於けるや、纔かに王肅、何晏、王弼の徒ありと雖とも、皆訓詁章句の流に過ぎず、殊に當時の學者と稱せらるる者、多くは漢季鸞鋼の慘に懲りて、復た名節を修めず、談笑無事を以て身を處するの術と爲し、以て務めて口を虛無幽玄に藉りて、一世を醉生夢死の間に了せんとせり、而して清談の風、實に此に開けり、故に魏の文學には、詞章ありて儒學なし、管、魏に儒學なきのみならず、兩晋南北朝を通して、其詩賦文章の流行せしにも似ず、儒風の振はさりしこと、亦實に驚くに堪えたり、蓋是天下亂離の際として、人々其生を聊せず、躬行百年の志を懷て、名節を研く者なかりしこと、亦是非もなき次第なりとす。

晋は三國鼎立の後を承けて、始めて天下を一統せしかば、舉廢續絶の業、漸く舉り武帝踐祚の初に於て、先づ大學を起し、學士三千餘人に及びしも、天下既に平かにして、國家方さに無事なるに乘し、輒ち宴樂を縱にして、復た心を文學に用ひず、後掖の美人、一萬人に近く、幸を望んで一顧を得ざる者、幾千人なるを知らず、帝常に羊車に乗りて宮人の家に入らせしかば宮人交、竹葉を以て羊を招き、羊の止る所、帝も亦止りて宴寢せり、其荒淫此の如きものあり、而して當時の士太夫たる者、多くは器宇褊狹にして、權威を挟みて互に猜疑構陷を事とし、甚しきに至りては、一言の失、一笑の讕、以て其身を滅せる者あり、是に於てか一方に於ては、縱酒酣飲して禮法を蔑視し、沈湎荒醉しては宏達と稱し、幽玄を談し虚誕を語りては清談と號するあり、滔々たる輕薄の風、蕩然として相摸倣して、其俗大に壞る、而して其甚しきに至りては、白晝人の家に入りて其酒を竊飲する者あり、衣帽を脱し裸躰を露はして廣布の犢鼻褌を晒す者あり、而して社會の秩序制裁、蕩然として地を掃へり、今夫此の如き風習の起る固より敗風頽俗と互ひに其原因を相爲すものなれども、猜疑苛察、愛憎常なく、法に任し術を弄して智巧權謀を事とし、以て奇偉傑傑の士を律して、其死命を制せんとする時代に於ては、必ず世波に遠かり、牽累を免れて、譎詐老猾の毒爪牙を避け、以て酒杯頽唐の間に其光を葆む者あるに至るは、自ら止むを得ざるの次第なりとす、邾家の將さに與



らむとする必ず休徵あり、而して其亡ひんとする亦必ず姑息多し、然らば清談の起る、禮法の壞る共に皆時勢先つ陵夷潰決して、復た收むへからざるものあればなり、而して獨り放酒高談の徒を責むるは、頗る酷に近しと云ふべし。

然れども、此の如きの状況なりしかは、禍亂は忽ち又踵を接して出て、内は外戚權を專にして骨肉相殘し、外は鮮卑羌胡の侵寇ありて海内分裂し、晋祚幾んど絶んとせしかは瑯琊王睿、位に江東に即て綱紀を振起し、舉用稍、其人を得て、復た大學を興し廢典を擧げしも、亂離の習として人各其生を聊せず、寧ろ放縱悠々として今日を送るの安逸たるを知るも、曾て名教を研き、讀書行義を立て、永遠の計を爲すことを思はず、隨て儒風、竟に振はず、老莊皮相の見のみ永く其嚮旨に入りて一代不治の痼疾となり、晋又隨て亡ふ、晋の世、東西併て百五拾餘年、此間に輩出せし文學の士は、重に詩賦清言の雄にして、阮籍、嵇康、傅玄、陸機、潘岳、左思、陶潛等尤も其翹楚たるものなり、而して其著書立言を以て有名なるは、傅玄の傅子、葛洪の抱朴子、陳壽の三國志等とす、然れとも其文筆、多くは整比にして、復た秦漢直氣一往の文を見ず、是魏文、陳思以下の競ふて整麗雄比の波を揚げしに歸せずんはあらず、而して其文、多く清言に富むも、規模篇章の美に至りては大に缺くる所あるに似たり、蓋是亦當時流行の清談の影響を受けたるもの少しとせざるなり。

晋末兵馬の擾亂は益々解けずして、篡弒爭奪の聲は日夜に聞ゆ、是に於てか劉裕は晋を篡して自立し、國を宋と號す、是より天下南北に分れて、南朝は、宋、齊、梁、陳を歴、北朝は魏、齊、周を歴て隋朝に一統せらる、此間の歲月を數ふれば凡百七十餘年に亘れり、而して隋の天下を有らしとは僅々二十餘年に過ぎずして、亦其命を草めたり、當時天下の形勢、南北四分五裂して、朝に戴く所の君主は、夕に弑虐桎梏の難に遭ひ、織符を握り効驗を設けて自立するの賊臣は、所在に多く、之に加ふるに中州の板蕩せるに乗して、戎狄繼種、交、内侵し、生民塗炭に苦み、學教亦隨て振はず、今其制を按するに、宋には嘗て玄史文儒の四學を置て諸生を教養し、齊には國學を立て生員を置きしことあるも開廢定りなく、皆十年に及はすして之を廢せり、蓋以て文具とせしに過ぎざるなり、梁に至り武帝儒術を好みて五館を開き國學を建立し、以て數百の生徒を給養し、射策、明經に通する者は、即ち叙して吏と爲せしかは、經を懷き笈を負ふ者、亦四方より雲會せり、而して其藏書の數も亦古今の圖籍十四萬卷に上り、文學の盛なると晋宋以下未だ嘗て其比を見すと稱す、陳も亦曾て學官を置て生徒を延きしも、寇賊未だ寧らざるの際なりしかは、獎勵の方、亦隨て未だ違わらざる所あり、故に生徒の能く其業を成せし者、亦甚々寡しと云ふ、北朝は魏齊周共に皆學校の制を設く、中に就て魏最も周備完成し、其文教の粲然たると亦以て觀るべきものあり、隋氏天下を一



統するに及び、奇傑を超擢して厚く諸儒を賞し、京邑より四方に達して皆養舍を啓きしかば、齊魯趙魏の學者尤も多く笈を負ひ師を追て千里を遠しとせすして至るあり、講誦の聲、道路に絶えず、其盛なること蓋漢魏以來の一時と稱す、既にして戎馬復た煙塵を起し、群盜横行するに及び、禮義は以て君子を防くに足らず、刑罰は以て小人を威すに足らず、學教陵夷して、其風、竟に墜ち、以て亡ふるに至る、是其大較なり。

然るに南北風氣の異なるや、其の爲むる所の章句も互に其好尚を異にし、江左に在りては王輔嗣の周易、孔安國の尙書、杜元凱の左傳等を用ひしも、河洛にては左傳は服子慎、尙書、周易は鄭康成を用ひたり、而して詩は竝に毛公を主とし、禮は同じく鄭氏に遵えり、蓋南人は約簡にして其英華を得、北學は深蕪にして其枝葉を窮めり、而して其文雅に於ける好尚も亦異りて、江左は宮商發越、清綺を貴ひ、河朔は詞義貞剛、氣質を重んせり、蓋氣質を重んずるものは理其詞に勝ち、清綺を貴ふものは、文、其意に過く、故に理深きものは時用に便にして、文華なるものは詠歌に宜し、此其南北詞人得失の大較なりとす、而して此際に輩出せし重なる詞人を舉れば、南朝にありては謝靈運、謝惠連、鮑照、謝朓等の宋齊間に於ける、武帝、簡文帝、沈約、庾肩吾、何遜の梁に於ける、後主張正見、江總の陳に於けるか如き、最眉指の文豪と稱す、而して北朝に在りては、獨り庾信の周に

於けるあり、附は其祚運の短きにも似す、上には煬帝の詞才に富めるあり、野には王通の儒を業とするありて風氣亦方さに李唐文運の先を開くものあるに似たり、其他彩筆を揮ひ芳聲を馳せ、以て一時に鳴りし者を舉れば特に一二を以て數ふべからず。

今此時代に於ける文學の特質を概觀せむに、其著作は重に華藻を事としたる詞賦の類にして、曾て理致を主としたる文學あることなく、時に或は佛教文學の如き達意を主とするの文これなきにあらざるも、其他は多くは彫繪を事とし整比に拘泥して、殆んど其意の在る所を知り難きものあり、劉勰の文心彫龍に於ける如き、蓋亦此類なり、獨り范曄の三國志に於けるは較、此の窠臼に落ちずして、史漢の後塵を望むことを得しは、所謂萬綠叢中の一紅と云はざるべからず、要するに六朝の文學は、其散文なると韻文なるとを論せず、靡麗を尙ひしかば、其弊や妖艶輕浮、紅女柔姬の嬌態の如く、其詞は輕險を競ひ其情は哀思多く、幾んど以て亡國の音を聴くに似たり、而して其詩は漸く對偶排律の基を爲し、其文は四六駢儷の極に達し、詩文の法、亦隨て相混して明ならず、此時代の人、誰か復た秦漢直往の文辭を解する者あらんや、蓋是魏晉以來、禍亂相踵き名教振はず、朝には人の國を亡し、人の婦女を掠め、人の財貨珍寶を移して、其宮室に充たしめ、夕には後庭に華宴を開き、姣兒の聲歌は煙月に凝り、寵を嫉むの佳人は、浮雲の掃ふべからざるを嘆し、情に耽るの



君主は半夜の更に短きを憾むの有様なりしかは、遊惰俗を爲し儉安これ事として、曾て重厚沈着、百年の大計を爲すものあるなく、風俗頹廢して性情日に鄙下に趨り、淫猥、習を成して其詩歌文章に顯はるゝもの、皆此の暗流中より流出せざるはなく、其淫靡纖巧の詩文は、適に當時社會の面目を照映し出せるものなり、隋の時に李悌と云ふ者あり、有識の士なり、其言に曰く『自魏之三祖更尙文詞、忽君人之大道、好彫蟲之小藝、下之從上有同影響、競勦浮華、遂成風俗、江左齊梁、其弊彌甚、貴賤賢愚、唯務吟咏、遂復遺理存異、尋虛逐微、競一韻之奇、爭一字之巧、連篇累牘、不出月露之形、積案盈箱、惟是風雪之狀、世俗以是相高、朝廷據茲擢士、祿利之路既開、愛尙之情愈篤、於是閭里童昏、貴遊總角、未覩六甲、先制五言、摺本逐末、流徧華壤、遞相師祖、澆漓愈扇』と、正に能く六朝の文學を評し盡せるものにして、當時の詞人才子、皆此範圍を脱する能はず、殊に齊梁間の文豪と稱せらるゝ者に在りては、尤も其痼疾に中るを見るなり、然れども其能く月露の形を描き、風雪の狀を寫して、一韻一字の奇巧をさへ競争せし位なりしか故に、假令ひ其文學なるものは果實に乏しきの憾なきにあらざるも、彩華の爛熳たる詞藻の妖豔なると、又將た音調の流麗悠揚なるとは、優に前代に聳て後紀に誇るに足るものあり、而して其鋪叙敷陳の千篇一律にして、絶て變化に乏しきに至りては、容易に人の厭嫌を來す所なり、蓋文章辭賦の事は、秦漢に至りて英

華精銳の氣、既に極り、詞源亦殆んど竭きたり、是に於てか特才異能の士、出つるあらんか、故輒に拘束し、循々として陳腐の迹を追ひ、前人の餘唾を拾ふを欲せず、必ずや自家の機軸を以て其新聲を出さんと欲するは、勢の當さに然るべき所なりとす、意に風雅既に遠く、離騷の遺音も亦漸く微にして、辭人の賦盛に起り、一變して駢儷齊比の文と爲り、詩文の法、相混して明ならず、一派濁流の文、汪洋として奔注し、末流益々清まず、之か遠因を尋れば司馬相如、東方朔の徒は固より論するを瑛たす、枚乘、鄒陽の流、亦早く靡儷の備を作りしに在り、是より後、東漢の文日に萎靡して力無く魏武父子の才を以て之を扇くに詞句の麗新を以てし、鄒下相唱て其波を揚げたりしかは、風氣全く此に成れり、而して六朝の文學は、直に之に沿ふて發達したるものなれば、時月の熟すると共に、流を酌むの才子も、亦隨て輩出し、形摸影索、竟に駢儷排比の極に達せるものなり、變遷の機、由て漸する所あること此の如し。

然るに又一方に於ては、漢の時、渡來せし印度の佛法も歲月を経るに隨ひ亦漸く南北に流布し、且又竺僧の來りて教を傳ふる者亦甚多く、其經論を翻譯し其教義を傳へしかは、佛氏不傳の妙道も漸く朝野の人心に浸潤して、其聲韻の學は適、當時發達の新詩と接觸して、影響を當年の聲詩に及ぼし、茲に四聲音韻の規則を爲すに及へり、而して沈約の撰せし四聲譜は、自ら之を入神の作と信せ



し位なれば、其影響を當年の詩學に及ぼせしこと、甚少きにあらす、然れとも約も亦自ら其説を創成せしものにあらすして、直に當時流傳の印度聲韻の學に據り、其反切音韻の書を參酌して之を成せるなり、蓋約以前に在りても、三百篇を初として歷代の古詩、皆音韻を叶えざるにあらざるも、此に至りて更に狹隘なる範圍に於て、其規則を嚴にせしか如くならず、此の如くにして音韻の學は既に開け、新詩の面目愈々其奇を極むるに及び、早晚又更に善く其字句を修齊し、其音調を整へたる一定の新體を生せざるへからず、是に於てか五言八句、七言八句等の詩、漸く興りて、竟に隋唐律詩の源を爲すに至れり、蓋音韻の嚴否は、古今の詩變に於て最も至大の關係を有するものなるか故に、後世音韻を云ふ者、必ず沈約を稱するは蓋之か爲めなり。

以上叙述せし所のもの、未だ以て六朝文學の全豹を悉すに足らずと雖も、大要亦略、此の如し、吾人は更に下に於て左の三章に隨て聊か之を叙述せんと欲す。

第一、六朝の韻文、即ち詩賦

第二、六朝の散文、即ち著書、及び雜文

第三、六朝詞人傳

右の第一は韻文にして詩賦を并稱するものなれとも、吾人は便宜の爲め、唯單に詩のみを標舉して

其の賦を畧せんとす、何となれば辭賦の事は洵に漢代の當行にして、既に前編に於て樂叙せし所の如し、而して六朝の辭賦は直に其の餘流に沿ひしものに過ぎず、且つ第二の散文に於て叙する駢儷文は直に一種辭賦の變體とも稱すべきものなるか故に、彼是參索せば思ひ更に其半に過ぐるものあらむ、第三は六朝間に於ける詞人才流の小傳を擧るものなれとも、幾百の作者、本より僅々數紙の間に收め盡すべきにあらす、是吾人の毎に略に過ぐる所以なり。

第貳章 六朝の韻文

六朝の文學は、詩を以て中堅と爲す、漢詩既に文苑に新紀元を開て、雅騷の面容を一變し、風骨格力を以て、一代に修飾せしと雖ども、彩華未だ絢爛の域に達せず、其藻葩巧麗の處に至りては、猶後人を待ちしもの、如し、而して六朝の詩は、適、此の希望の中に發達して其爛熳を極めたるものなり、然れとも此の發達爛熳は、支那の詩道に於て、果して好影響を及ぼせしものなるや否やは、更に之を考へざるへからず、且此の時代間に在りても、時に盛衰なき能はず、隨て詩風の異同、聲色の高下顯晦も、亦其間に存せざるを得ず、而して其機軸を斡旋せし者、毎に當時の才俊異調の士に在れば、吾人は下段に於て其文士を羅列し、聊、繋て其詩を樂叙せんと欲す。



吾人は既に前章總論に於て、魏を以て六朝の首に置く所以を叙せり、蓋其首に繋ぐるは其詩の已に華靡を尙て六朝の聲氣を開きしか爲めなりと雖も、其時代の漢を去ると猶未だ遠からず、淳朴の餘風隱約として尙存せばなり、然れとも其の勝つ所は高華にして其乏しき所は沉摯に在り、隨て物色益々繁くして性情愈減せり、蓋是魏詩の變なり、而して其作家を擧れば、必らず先づ孟德を以て唱首と爲さるへからず、孟德雄才饒力、卓然として特立し、其老氣雜蒼たると同時に又犢牛の脱兎を撲つ能はさるか如きものあり、故に古人も亦孟德を評して、鋒を摧くの斧の如しと云へるは、蓋之か爲めなり、而して其雄篇たる短歌行にの如きは赤壁の役に槩を横えて吟哦せしものにて恍髣老卓、眞に奇氣、人を撲つの槩あるを見る、

對酒當歌、人生幾何、譬如朝露、去日苦多、慨當以慷、憂思難忘、何以解憂、唯有杜康、青青子衿、悠悠我心、但爲君故、沈吟至今、呦呦鹿鳴、食野之苹、我有嘉賓、鼓瑟吹笙、明明如月、何時可掇、憂從中來、不可斷絕、越陌度阡、枉用相存、契濶談讌、心念舊恩、月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依、山不厭高、海不厭深、周公吐哺、天下歸心、

子桓の詩は優柔和美にして顧盼姿を生ず、古人云ふ其質美媛の如しと、信に然りと爲す、樂府は善哉行、燕歌行、陌上桑諸篇の如き、最も完璧と稱す、詩は從行諸作、一吟一咏、皆其の風味氣韻の美を見る、下段に擧る所は、其の明津に於て作りしものなり。

遙々山上亭、皎々雲間星、遠望使心悵、遊子戀所生、驅車出北門、遙望河陽城、凱風吹長簾、天々枝葉傾、黃鳥飛相追、咬々弄

音聲、時立望四河、泣下沾羅纈、

上記の孟德、子桓に加ふるに、陳思王植を以てして、之を三曹と稱す、三曹中に在りて、子建の材氣最も高く、恣意揮霍、可ならざる所なく、音節毎に琳瑯の聲あり、古人毎に評して蘇李以後の第一人と爲す、沈德潛云ふ『蘇李以後、陳思繼起、父兄多才、渠尤獨步、使才而不矜才、用博而不逞博、鄴下諸子、文翰鱗集、未許執金鼓、而抗顏行也、故應爲一大宗』と、蓋其才藻宏富にして骨氣雄高なると、六朝詩人の第一人と稱すへし、其樂府中に在りては、名都、美女、白馬詩篇の如き、辭を措くこと極て富贍にして、意を用ること亦甚工なり、然れとも天然の古質、復た漢代の遺音にわらずして、自ら子建の調なり、陸時雍云ふ、子建の樂府は豐贍餘りありて、精彩足らず、陳藻宿飯の咄嗟立ちに辨するか如きも、其の新味を求むれば有るとなきのみと、下評稍、妥當ならざる所あるも、亦似る所なしとせず、其の雜詩に『高臺多悲風、朝日照北林』と云ひ、『時俗薄朱顏、誰爲發皓齒』と云ふ如き、寄托悠深にして意況更に遠きを覺ゆ、七哀詩、語致高雅、洵に子建の心聲なり、之を要するに子建の詩は尤も高華を以て勝つ、之を子桓の和厚に比すれば、一は王孫の銀鞍を花前に驅るか如く、一は名姝の蘭麝に椒房に對するに似たり、而して其貴賓紳士として爵祿冠帶の場に輝くに當りては、名姝豈之に與らむや、是二子の優劣なり、今下に其の七哀詩を出す。



明月照高樓、流光正徘徊、上有愁思婦、悲歎有餘哀、借問歎者誰、曾是寄子妻、君行踰十年、孤妾常獨棲、君若薄路塵、妾若濁水泥、浮沈各異勢、會合何時歸、願爲西南風、長逝入君懷、君懷良不開、嗟妾當何依。

三曹の下に於て劉楨、王粲最も名を知らる、世に曹劉と稱するは直に公幹を以て陳思に配するものなり、然れども曹劉は偶にあらず、王劉却て匹なり、而して子桓に比すれば俱に猶下風に在るを免れず、仲宣は才弱にして、肉骨に勝つ、公幹は才偏にして、氣詞に過く、故に其の饒かなる所は骨幹にして、乏しき所は風華に在り、仲宣は温厚玉の如き處あると同時に又稍、綺麗を帯へり、是れ二人の長短なり、應、徐、陳、阮は間、佳作なきにあらざるも、曾て子建の門牆を出る能はず、鄴下の材、大略此の如し、世諸子の詩を目して建安の體と云ふ。

異々飛鷲、載飛載東、我友云徂、言戾蕭邦、舫舟翩翩、以泝大江、蔚矣荒塗、時行靡通、慨我懷慕、君子所同、悠々世路、亂離多阻、濟岱江行、遊焉異處、風流雲散、一別如雨、人生實難、願其弗與、瞻望遺路、允企伊恃、烈々冬日、蕭々凄風、游鱗在淵、歸鷹載軒、荷非鴻鵠、孰能飛騰、雖則道遠、予思罔寤、瞻望東路、慘愴增歎、率彼江流、爰逝靡期、君子信誓、不遷于時、及子同僚、生死固之、何以贈行、言授斯詩、中心孔悼、涕淚漣漣、嗟爾君子、如何勿思、(王粲贈蔡子篤詩)  
永日行遊戲、歡樂猶未央、遺思在玄夜、相與復翱翔、羣車飛紫霧、從者盈路傍、月出照閣中、珍木鬱蒼蒼、清川過石渠、流波爲魚防、芙蓉散其華、蘭若溢金塘、鸞鳥宿水裔、仁獸遊飛梁、華館寄流波、營壘來風涼、生平未始聞、歌之安能詳、投翰長歎息、綺麗不可忘、(劉楨公幹詩)

晋は、清言の士多きと同時に、其詩は却て佳ならず、是詩は本ト言ふへきの物にあらされはなり、陸時雍晋詩を評して云く、詩は晋より敝るはなく、色、闌にして詔かならず、韻、沉んで發せず、

氣塞りて暢ひず、詞、重くして流れず、前に傅玄あり後に陶潛あるにあらさらしめは、晋に詩を云ふへからすと、又云く晋人は惟、華言を是れ務め、巧言を是れ標す、其の衷の存する所、能く幾くそやと、頗る晋人を評殺するに過くると雖も、詩格の下る、寔に此際を著るしと爲す、晋初の詩は先づ阮籍を唱首と爲す、其詩曠懷盡るなく、亦詩中の清言たり、咏懷八十二首、反覆零亂、興寄端なく、深憂危慮、和愉哀怨、殆んと其歸趣を求め難し、然れとも一髮の世を忿り俗を嫉むの語あるとなくして纏綿の情自ら文字着色の外に在り、是阮公の特色にして、後世陳子昂の感遇三十八首、李青蓮の古風五十九首の如き、皆此に原本するものなり、嵇康は清言家なり、籍と並稱せらるると雖とも、其詩卒に籍に及はず、古人云ふ稽辭は清峻、阮旨は遙深と、蓋其辭章を稱するものなり、若し其詩に於けるの地位を云は、曾て幾くも存するを見ざるなり、傅玄張華は同じく壯武の世に在り、茂先は華整を以て勝ち、清緒濯々たれとも風格未だ老ひず、昔人評して兒女の情多くして風雲の氣少しと云ふもの蓋之を得たりと爲す、休奕は古樸の處多く、微情遠境、頼りて亦存す、而して樂府最も淋漓排蕩を極む、之に私淑する者は輒ち云ふ、古樸綺心、漢後未だ其の儔を見すと、又云ふ晋の傅玄、梁の瘦肩吾、陳の張正見は、聲色臭味俱に全きものなりと、之を要するに、玄は晋初に在りて當さに雄を一時に稱するに足るへし、之を漢後の第一人と稱するは亦過きたるもののみ、



陸士衡潘安仁出るに及び、晋の詩風一變して、排偶の源、已に開け、又一變して宋に至り、顔謝其盛を揚げて淳樸愈々散し、漢道全く盡く、然らば則ち潘陸の晋に於ける其地位才情、最も記せざるべからず、士衡の詩、通贖自ら足りて絢綵、力なく、安仁は敷布具さに饒くして蒞藉絶て少し、安仁は氣に雄に士衡は材に富む、若し單に其才を比較せば、士衡は海の如く安仁は江の如し、故に古人二家を評して云く、陸は深くして蕪なり、潘は淺くして淨しと、要するに二家の爲す所決して綺靡の二字を免る能はず、蓋俱に詞を以て勝つ者なり、今夫此の如く二家を以て並稱せしと雖とも、陸の才は安仁の匹敵すべき所にあらず、其邊幅軀具、亦遠く餘子の上に出つ、是遂に晋代の大家と推稱せざるを得ざる所以なり、故に梁の鍾嶸嘗て之を品して云く、士衡は晋室の英にして、安仁、景陽を輔と爲すと、安仁、景陽の果して士衡の左右と爲り得べきや否やは更に疑なき能はざるも、士衡の大家たるとは亦此に於て參見するを得べし、士衡弟あり、士龍と云ふ、所謂二陸の目、即ち是なり、然れども士龍の詩は甚佳ならず、古人稱して云ふ、兄を以て傳はると、蓋亦當たるに似たり、是の時に當り、左太冲と云ふ者あり、嘗て三都賦を作りて、洛陽の紙價を高からしめたる者なり、其詩抗辭厲聲、氣を以て勝つ、之を愛する者は云ふ、太冲は衆流の中に拔出して、胸次高曠、筆力以て之を達するに足ると、而して惡む者は云ふ其氣粗にして材氣の人を撲つを覺ゆと、蓋其の

愛せらるゝ所は、又其の惡まるゝ所なり、今其の咏史諸篇を誦するに、造語奇偉にして逸氣雲を干すの聲あり、其の所謂『振衣千仞岡、濯足萬里流』とは以て移して其詩を品すべし、意ふにそれ士衡と雁行して晋代の英たる者、此人に在るか、張孟陽、張景陽を二張と稱す、兄弟俱に詩名あり、而して弟の名最も著はる、江を過きりてより以て還には、越石の悲壯、景純の超逸あり以て後勁を稱するに足る、最後更に一人あり、衆人嚮々たれとも吾獨り寂寞を守り、衆人炎を逐ひ名に走れども我獨り閑窓の鳥聲を娛む、是を隱士陶潛と爲す、其詩は清遠を以て勝てり、後世韋應物、柳子厚等の詩の原本する所なり、其詩憂動の語あり、自任の語あり、足るを知るの語あり、樂天安命の語あり、物我無間の語ありて、靈襟瀟氣、物情を陶冶すること遠し、殊に其飲酒諸篇の如き、尤も此老悠然の致を見るに足る、蓋淵明名臣の後を以て易代の時に際し、感興萬端、言はむと欲して言ひ難きものあり、則ち身を田園に藏して、桑麻耕植の人と爲り、以て天地自然の化を娛めり、是其人と爲りに於て既に六朝の第一流たれば、其詩の曠世獨立、時調と異なるものある、豈亦異むに足らむや、然らば則ち淵明の人と爲りを知りて、而して後に其詩、得て悉すべし。

以上列擧する所の諸人は、晋代の錚々たる者にして、之を始むるに阮公の恬曠を以てし、之を終ふるに陶家の自然を以てす、中間、士衡の才藻、太冲の縱横を得て、晋詩の首尾殆んど見はる、其他



此の時代に在りて尤も記せざるべからざるは、古辭樂府の更定せられたることはなり、蓋魏は漢の後を承けたれども、草創の餘、猶ほ漢の古樂を襲用せしもの多く、晋に至りて宗廟朝廷の樂、多く古樂に據りて、更に其曲調を定めたり、其の然らざるものは、更に詞臣に命じて創作せしめたりければ、樂府の面目、多く此時代に變せりと云ふべし、且又當時の流行歌の如きもの、後世に至りて一種の詩體を爲せるあり、之を例するに五言絶句の唐に起りしか如き全く此際の歌謠に出てたるに似たり、試に左の數首を誦せば、思半に過ぎむ。

芳是香所爲、冶容不敢當、天不奪人願、故使假其郎、(子夜歌)  
御路漸不行、窈窕决橫塘、團扇障白日、面作芙蓉光、(團扇歌)

右の子夜は女子の名にして嘗て此聲を造せしが聲哀苦に過ぎたり、後人此聲に據りて更に四時行樂の詞を作る、之を子夜四時歌と云ふ、春歌、冬歌の如き即ち是なり、又子夜警歌、子夜吳歌、變歌等の如きものあり、皆曲の變なり、團扇の本事は、晋の中書令王珣と云ふ者、白團扇を捉りて嫂の婢に與へて、情好甚篤かりしに、嫂之を知りて婢を捶撻す、婢素ト善く歌ふ、嫂逼りて一曲を歌はしむ、婢聲に應じて歌ふて云く『白團扇、辛苦五流連、是郎眼所見』と、珣聞て更に之に問ふ汝か歌何くにか遺ると、婢即ち改めて云く『白團扇、願領非昔容、羞與郎相見』と、後人因て之を歌ふ團扇郎即ち是なり、此の如きの類甚多く、詞皆豔冶なり、而して齊梁間の艶靡は直に之に沿ふて、

殊に其の甚しきに至れるものなり、變遷の機、亦以て知らざるべからず、今南北間の詩を叙するに前ち、晋代諸家の作例を示すこと次の如し。

獨坐空堂上、誰可與歡者、出門臨永路、不見行車馬、登高望九州、悠悠分曠野、孤鳥西北飛、離歌東南下、日暮思親友、晤言用自寫、(阮籍咏懷)  
背々河邊草、悠々萬里道、草生在春時、遠道還石期、春至草不生、期盡歡無聲、感物懷思心、夢想發中情、夢君如鸞鶴、比翼雙間翔、既覺寂無見、曠如參與商、夢君結同心、比翼游北林、既覺寂無見、曠如商與參、河洛自用開、不如中岳安、同流不及返、浮雲徂自還、悲風動思心、悠々誰知者、懸景無停居、忽如馳驅馬、傾耳懷音響、輒目淚墜隨、生存無會期、要君黃泉下、(傅玄飲馬長城窟行)  
滿不飲盜泉水、熱不思惡木陰、惡木豈無枝、志士多苦心、整翫肅時命、杖策將違尋、饑食猛虎窟、寒棲野雀林、日歸功未建、時往歲載陰、崇雲臨岸驫、鳴條隨風吟、靜言幽谷底、長嘯高山岑、急絃無儲響、亮節難爲音、人生誠未易、曷云開此衿、眷我耿介懷、俯仰愧古今、(陸機猛虎行)  
皓天舒白日、靈景耀神州、列宅紫宮裏、飛宇若雲浮、峨々高門內、臨々皆王侯、自非攀龍客、何爲欲來游、被褐出闔閭、高步追許由、振衣千仞岡、濯足萬里流、(左思詠史)  
結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、採菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此中有真意、欲辨已忘言、(陶潛飲酒)

魏晋の詩は、既に上に述べたる如し、而して宋に至りて性情漸く隠れて、聲色大に開けたり、蓋是を六朝詩運の第二轉關と爲す、古人亦云ふ詩は宋より一大變し、氣變して韶かに、色變して麗しく、體變して整ひ、句變して琢けり、蓋古に於て漸く遠くして、律に於て漸く開けたるなりと、此評尤も之を悉くせり、蓋人巧日に勝て性靈漸く遠く、詩運の代降する、豈亦已を得んや、宋詩の冠



冕たる者を謝康樂と爲す、之に次く者を鮑明遠と爲す、當時康樂と其名を齊ふして顔延之あり、世之を顔謝と云ふ、然れとも其聲價の高きに似ず、其詩は遠く康樂の下に在り、謝宣遠、謝惠連亦當時に名あり、意ふに延之と對壘して吳越を稱すへし、康樂は神工默運、清貴の氣、塵表に出つ、明遠は塵備前なく、時に麗藻を見る、殊に康樂の佳なる處は、字句の見るへきに在り、『白雲抱幽石、綠條媚清漣』と云ふか如き、着語何ぞ悠曠なる、『猿鳴誠知曙、谷幽光未顯、巖下雲方合、花上露猶滋』何等の清芬、其他『池塘生春草、園柳變鳴禽』と云ひ、『林樾歛暝色、雲霞收夕霽』と云ふか如き、皆以て好句と稱すへし、明遠の好き處は、其材力標舉、一世を凌厲するに在り、其樂府諸篇の如き何等の稜厲ぞ、意ふに宋朝の大家は當さに此二家を推すへし、延之の詩は才藻美ならざるにあらざるも其具らざる所は天趣のみ、故に古人延之を評して云く、雕緝腸に滿ち荆棘手に滿つ、故を以て意致密なりと雖も神韻生せずと、湯惠休は亦宋末の佛家なり、嘗て顔謝の二家を評して云く、謝は芙蓉の水を出るに似たり、顔は彩を錯へ金を鏤むに似たりと、俱に顔家丰神の乏しきを云ふなり、宣遠、惠連亦好詩あり、宣遠の答靈運詩、惠連の秋懷の如き亦佳作と稱す、而して惠連の厭ふへき所は雜穢に在り、宣遠の喜むへき所は清麗にあり、是を二家の長短と爲す、其他の作家に至りては悉く之を畧す。

齊詩は艶を以て勝つ、而して其歸する所、纖巧の二字に在り、蓋詩は宋に麗にして、齊に艶なり、故に色澤益、絢にして性質愈、隠る、之を宋に視れば更に甚しと爲す、其大家と稱すへきは、唯一の謝玄暉あるのみ、其の靈心妙悟、筆墨の中、筆墨の外、別に一段の深情名理あるを覺ふとは、沈確士の玄暉を評せしものあり、李青蓮は唐朝第一の大家なり、而して『一生低首謝宣城』是其清綺絶倫なる、尤も青蓮の心醉せし所なるを知る、殊に其の佳なる處に至りては、秀色天成、紅葉青苔の芳姿を春雨に濯ふに似たり、之を玄暉の詩と爲す、玄暉の外には王融あり、好んで艶句を爲り、刻飾塗澤にして、聲色を以て人に勝んと欲すれとも、神色既に隠れたり、其の涿水曲、和何徵君點詩の如き最も佳篇と稱す。

梁詩は妖艶の音多く、春女の靚妝を凝らし、嬌媚巧笑して、人に向て致を賣らんとするに似たり、蓋其艶情の工にして、琢句を尙ひしと同時に、其の風格の日に卑きに就きしを知らざるなり、梁初に當り君臣同しく詞章を好み、上に武帝、簡文帝あり、下に沈約江淹范雲任昉の徒ありて、其贈答の作、亦見るに足るものあり、武帝は風華を以て勝ち、其好き處は寧ろ鉛粉を施さるるに在り、西湖曲、青々河畔草の如き其完璧たるものなり、簡文は好て艶詩を作る、江左之に化して宮體詩と云ふ、其篇一面の紅妝人を惱殺して、輕靡已に甚し、其所謂『朱顏半已醉、微笑隱香屏』とは正さに



以て自ら評するものなり、江、沈、范、任の徒、辭藻斐然たりと雖とも、未だ以て出羣の雄と稱すへからず、古人云ふ沈江は舛料に饒かにして性情に乏しく、范任は性情に足りて舛料に短しと、其要を悉せりと云ふへし、庾肩吾は梁の大家なり、其詩聲名臭味の俱に備はるを以て長を見はす、陸時雍之を評して云く『椎鍊精工、氣韻香美、當是聲律絕技』と、蓋其風神の秀朗なる洵に唐律の原本する所なり、是の時に當り、又柳惲、何遜等あり、俱に艶靡の習を去りて、其本素を摠寫せんとせり、然れとも世道の陵夷する詩運亦之に伴ひ、二子の古に志す亦猶隻手の大厦を支ふるか如く、其傾覆を見ざるもの幾んと希なり、況んや兩家亦時に燭然の致あるに於てをや、梁朝の詩、此の如し、其他詞人甚、多しと雖も、皆是艶靡に溺れて、其波を揚ぐる者のみ、今姑らく省略に従ふ。

陳の作家を陰鏗、徐陵、張正見、江總と爲す、總は梁より陳に入る、其詩猶梁人の餘氣あり、正見は高韻空を凌ぎ奇情湧くか如し、庚肩吾已に巧思を開てより風氣又之に化して、江張更に其波を揚けたり、後世詩律の模範たるべき者、已に此三人に在り、除鏗は前朝何遜の流なり、蓋其相隣るものは氣韻なり、故に世之を並稱して陰何と云ふ、徐陵は玉臺新詠の編者なり、其詩、文采組練、愛すべき處ありと雖とも、氣韻亦既に晩なり、後主は亡國の主なり、其詩綺羅粉黛『愁多月下、淚盡鴈行前』と云ひ『妖姬險似花含露』と云ふか如き輕靡言ふへからず、九五の終をさる豈偶然なら

むや、之を要するに、陳詩は殊に氣骨なく、飛絮落片の風に隨て飄颻するか如し、聲歌從來世運と關す、即ち艶冶淫麗、其俗を爲し、輕靡薄弱其風を爲すの日に當りて、詩歌文章の此の暗流中より流出して、其聲色を帯ひ來ること、豈亦異とすへきに足らむや、北朝詞人の作、時に清響に流る、且つ其地朔漠に近きが故に其詩殆んと胡語に似るものあり、假令ひ全く胡語ならさるも、胡景を以て詩に裁するものあり、齊の高昂の征行詩の如き殆んと是なり。

魏種千口牛、泉連百董酒、初々關山嶽、夜々迎新婦、

然れども又甚、綺羅脂粉の聲を爲すものあり、誰か云ふ北方、情悟を解せずと、魏の王徳の春詞の如き直に以て江南遊蕩兒の腸を斷つに足る、

春花綺縵色、春鳥絃歌聲、春風復蕩漾、春女亦多情、愛將鸞作友、憐傍錦爲屏、回頭語犬婿、莫負鸞陽程、

上の如きもの間、これあるも未だ以て北朝の詩を弊するに足らず、蓋北方は詞氣貞剛にして永言諷嘆に適せず、隨て其詩人亦甚多しと爲さす、其大家と稱すへきは獨り庾子山一人あるのみ、子山は本、南人なり其詩、才華富麗、俊句に乏しからず、然れとも之を乃父に比すれば其清練に及はず、李太白の謝宣城に於けるか如く、杜子美も亦嘗て心を子山に傾けたり、胡應麟云く『供奉之癖宣城也、以明艷合也、工部之癖開府也、以沈實合也』と、蓋亦似たり、特に詠畫屏風諸篇の如き豈に杜



詩の木く所にあらずや、楊柳歌、亦豈に初唐諸子の調にあらずや、子山の詩、陳隋淫靡の間に在りて稍、蒼勁と稱すへきも、竟に氣運代降の關鎖を出る能はず、子山と同時に王褒と云ふ者あり、才名一時に高し、然れとも其詩本、子山の匹にあらず、送劉中書葬詩に『書生空託夢、久客每思郷』と云ふか如き、最も其の感愴の句に屬す。

隋は煬帝先づ自ら嚆起して雅道に志せり、帝、初め藝文を習ふて、亦梁陳の餘瀝を嘗めしも、位に即くに及び、其軀を一變して、雅軀を存せんとせり、然れとも復古未だ深からずして、怠廢之に隨ひ、風格初めて成るも精華未だ備らざりき、隋詩多くは之に因れり、其の飲馬長城窟行の如き、蓋當時の依て模範を取りし所なり、然れとも其七言諸篇の如きは、全く唐律と問なきものあり、七律必ずしも唐初に擬まらず、是亦以て知らざるへからず、煬帝の外には、盧思道、薛道衡等最も名あり、其他詞才なきにあらずも、亦多くは前朝の遺才に屬す、然るに爰に一奇とすへきは、女流の詞才多かりしこと是なり、是畢竟煬帝の詞華を愛せしか爲めなりと雖とも、其の驕奢荒淫なる、嘗て迷樓を造りて宮女數千を充たしたるか如きの類なれば、寵を嫉み、幸を望むの餘、竟に發して詞句となるもの少しとせず、今左に數首を附出して其一斑を洩らす。

春陰正無際、獨步意如何、不及問花草、飄零兩鬢多、(侯夫人)  
關塞點聲切、椒庭月影斜、可憐秦館女、不及洛陽花、(秦玉璽)

楚宮孤月夜、遙望七香車、羅帶因腰緩、金釵逐髮斜、(羅愛々)

其他闕閑の昨、最も淫靡を極むるものあり、若し之に參するに煬帝の憶韓俊娥詩、

を以てせば、當時宮中宮外の事に於て、思更に其半に過るものあらむ、而して煬帝復古の實、何くにか在る、隋朝一統の業、遂けざりしこと、豈亦因る所なしとせむや、今下に南北間の詩例を掲げて此章を結ぶべし。

采菱調易急、江南歌不緩、楚人心昔絕、越客腸今斷、斷絕雖殊念、俱爲歸慮歎、存鄉爾思積、憶山我憤懣、追尋憩息時、假臥任縱隨、得性非外來、自己爲羅葉、不怨秋夕長、常苦夏日短、流流激滄淵、息陰倚密竿、懷故匪新歡、含悲忘春暖、悽々明月吹、惻々廣陵散、殷勤旣危柱、惟恨命促管、(謝靈運道經憶山中)  
傷禽惡跋鷲、倦客惡離聲、離聲斷客情、賓御皆涕零、涕零心斷絕、將去復還缺、一息不相知、何況異鄉別、遙々征雁遠、杳々白日晚、居人掩關臥、行子夜中飯、野風吹草木、行子心腸斷、念梅常苦酸、衣著常苦寒、絲竹徒滿座、憂人不解顏、長歌欲自慰、猶起長恨端、(鮑照代東門行)  
戚々苦無悰、携手共行樂、翠雲障累樹、隨山望南閣、遠樹隱隱々、生煙紛紛々、魚戲新荷動、鳥散餘花落、不對芳春酒、還望青山郭、(謝朓遊東田)  
東飛伯勞西飛燕、黃姑織女時相見、誰家兒女對門居、開顏發照照里閨、南窓北牖挂明光、羅幃綺帳脂粉香、女兒年幾十五六、窈窕無雙顏如玉、三春已暮花從風、空留可惜誰與同、(梁武帝東飛伯勞歌)  
春鴈對芳洲、珠簾新上鉤、燒香知夜漏、刻燭曉更籌、天鷄下北闕、織女入西樓、月皎疑非夜、林疎似更秋、水光懸落壁、山翠下添流、(鮑照西園賦、無勞飛燕遊、(庾肩吾春夜應令))  
送別臨曲池、征人幕前信、離尊雖欲繁、離思終無緒、憫々分手舉、蕭々行帆舉、舉帆越中流、望別上高樓、予起南枝怨、子結北風怒、灑々山澗日、洶々浪濤舟、隱舟適已遠、徘徊落日晚、歸雷並翠華、別館空蘊卷、想子歛眉去、知予御淚返、御淚心依々、



薄暮行人稀、曉々入塘港、蓬門已掩扉、塵中看月影、竹裏見螢飛、螢飛々不息、獨愁空轉側、北窓倒長鏡、南鄰夜開織、寒置勿復陳。重陳長歎息。(何遜送韋司馬別)

白雲蒸浦水、流彩入瀨川、疎葉臨荷竹、輕鱗入錦船、菊泛金枝下、蜂斷玉山前、一朝開五色、飄々映十千、(張正見賦得白雲臨酒)

春夜勞時晚、幽庭野氣深、山疑刻削意、樹接縱橫陰、月對忘憂卿、池驚旅浴禽、樽中真得性、物外知余心、(江總春夜山庭)

昨夜烏啼春、鷓鴣動四隣、今朝梅樹下、定有詠花人、流星漫酒泛、粟蕪繞杯唇、何勞一片雨、喚作陽臺神、(庾信詠蕪)

### 第三章 六朝の散文

#### 第壹節 著書の文

六朝の散文を分て、著書の文及び雑文の二種と爲す、著書の文又分て子類、歴史類、地理類、及び詩文類の四と爲す、而して今此に叙せんと欲するものは、此四類の文、即ち是なり。

子類の重なるものを人物志、傳子、抱朴子、金樓子、及び宏明集等とす、歴史の書には後漢書、三國志、宋書、南齊書、及び魏書等の正史あり、地理類の文には水經注あり、詩文類にて、總集に屬すべきものには文選、及び玉臺新詠あり、評騭に係るものには、文心彫龍、詩品、及び文章緣起等あり、是皆六朝の著書にて尤も著名なるものなり、尙此外に於て尤も記憶に存せざるべからざるは二乘三藏の佛典の過半は、此時代の著譯に係ることは是なり、而して譯者の最も重なる者を月支の沙門竺法護、常山の沙門衛道安、天竺の沙門鳩摩羅什等とす、唐僧智昇の撰する開元釋教錄具に其著

譯を轉す、然れとも今皆之に及ばず、唯單に上記四類の書を列舉して、餘は皆省略に従はむとす。

#### (一) 子類

人物志 魏の劉邵の撰する所にして名家者流に屬するものなり、邵は字を孔才と云ふ、邯鄲の人なり、黃初中に散騎常侍に官す、書凡十三篇にして首尾完具す、大要人才を論辯するに外見の符を以て内藏の器を驗し、因て品流を分別し疑似を研析するに在り、故に隋志以下皆之を名家に録す、蓋尹文の説に原本して黃老申韓諸家の説を兼るものなり、然れとも其の言ふ所、物情を究悉して精覈なり、之を徒に堅白同異の詭辯を馳するものに較すれば、迥かに同じからざるものあり、要するに其學は名家に出るも其理は即ち甚、儒者に乖かざるものなり、而して其文も亦能く暢達にして精到の處あり、奸豪德賊の徒、試に一掃讀せば、亦以て大に警惧する所あるべし、然らば則ち此書亦時に用あり、以て珍重すべきに足るのみ。

傳子 晉の傅玄の撰する所なり、晉書本傳に云く玄經國九流及び三史の故事を論撰し、得失を評斷して各、區別を爲し名けて傳子と爲すと、其の初め内篇を爲るや、以て司空王沈に示せしに、沈書を玄に與て云く、足下著す所の書を省るに、儒教を重して政跡を經論す、以て楊墨の流を塞くに足ると、其の當代に重せられたること此の如し、然れとも現存の篇章は、散逸の餘に采掇裏次せら



れたるものなり、而して其文義の完具するものは、正心、仁論以下十二篇にして、文義未だ全からざるもの亦十二篇あり、問政、治體以下の篇章即ち是なり、四庫全書總目に云く、玄の書、論する所、皆治道に關切にして、儒風を闡啓し、精意名言、往々にして在り、以て論衡、昌言に視れば、皆當きに之に遜るへし、殘編斷簡、缺佚の餘に收拾せらるゝもの尙以て其什一を考見するを得、是亦寶貴と爲すへしと、魏晉の書猶存するもの甚多しと爲さず、後人誰か之を寶愛せざる、今其文を讀むに精采雄麗の處少しと雖とも、亦能く優に其意を疏するとを得て、自ら條理の見るべきものあり、然れとも總目の所謂昌言の文當きに遜色あるへしとは、過贊却て前人を害するものたるに近し、文章の變、漢魏既に代を以て下る、玄篤學なりと雖とも、文筆の一道に至りては、洵に仲長統に及ふへからざるなり、若夫論衡の文は較、昌言の下に落つるものなれば、玄にして更に筆路一日の造詣あらむには王充には或は企及するを得たるなるへし、是三家の長短なり、然れとも好悪は人に存して品第は其自由に從へば、吾人の見る所も略、此の如しと云ふに過ぎざるのみ。

**抱朴子** 晉の葛洪の撰する所なり、洪字は稚川、句容の人なり、羅浮山に退居して丹を煉り書を著す、博聞深洽、紆餘蔚茂、洵に一代の奇士たるなり、抱朴子とは洪の自ら號する所にして、因て以て書に名けたるものなり、其書分て内外篇と爲す、内篇には神仙符籙の事を論し、外篇には時政

の得失、人事の臧否を論す、詞旨辨博にし、名理の言多し、蓋其大旨を究れば、黃老を以て宗と爲す者なり、故に古人亦嘗て云ふ、抱朴子は道家龍誕の説多く、悉く正に軌すること能はずと、洪の自序に『余家遭難、典藉蕩盡、力不能更得、故抄撮衆書、撮其精要、用工少而所收多、思不煩而所見博、或曰流無源則乾、條離枝則悴、恐玉屑盈車、不如尺璧、余答曰、泳源流者、採珠而捐蚌、登荆嶺者、拾玉而棄石、余之抄略譬猶摘翡翠之藻羽、脫犀象之牙也』と云へり、是其原く所は黃老百家の精言に在りて、之を出ずるに自家の着色を以てせしを見るに足る、其文蔚茂淳徐、旁引曲證して能く其意を達せり、嘉遁、崇學、勗教諸篇の如き、筆路翻騰、徹上徹下、羣情神に入る、殊に嘉遁の筆意の如きは、全く東方朔の客難、楊雄の解嘲等を逐ふものにして精華亦豈に遠く二文の下に在らひや、之を要するに六朝子類の文必らず先づ抱朴を以て其第一と稱せざるへからず。

**金樓子** 梁の孝元帝の撰する所なり、帝博く群書を總へて、詞章を著述す、其の藩に在る時、嘗て自ら金樓子と號す、因て其書に名く、四庫全書總目に云く、其書古今の聞見せる事迹に於て、治忽貞邪、咸く之を載せて附するに議論を以てし、勸戒兼資く、蓋亦雜家の流なりと、而して其文格の綺靡なるは、當時艶語流行の風氣を出る能はざるものたること、古人亦既に之を説けり。

**宏明集** 梁の釋僧祐の編する所にして、釋家に屬するものなり、僧祐の姓は兪氏、彭城下邳の人



なり、四庫全書總目に曰く『所輯皆東漢以下、至於梁代、闡明佛法之文、其學主於戒律、其說主於因果、其大旨則主於抑周孔排黃老、而獨伸釋氏之法……然六代遺編流傳最古、梁以前名流著作、今無專集行世者、頗賴以存、終勝庸俗繙流所撰述、就釋言釋、猶彼教中、雅馴之言也』と、總目既に宏明集を解して復た餘蘊を見ず、當時釋教、支那に入りてより歲月既に久遠なりしと雖とも、佛心達摩の教旨は未だ弘まらず、隨て其說亦因果法數の間に在りて、妙悟冥會を主とせず、故に其文學に於けるも亦唐宋の佛教文學に鏡花水月、言外の致多きに似すして、理致核實の傾向あり、四庫全書總目に因果の佛を以て漢儒の訓詁に比し、禪宗を以て宋儒の義理に擬するは蓋之か爲めなり、然れとも二乘三藏の經典、八萬四千の法門、若し之を究悉せんとせば、終年兀々として、白首に至るまで因果法數の理法を講ずるも、無常迅速、幾時にか彼岸の樂土に到達することを得じや、且夫佛祖心印の禪、固より釋尊血肉直傳の禪にして、宋儒の恣に憑虛の說を立て、強て孔子の門牆に倚らむと欲するか如きの類にあらず、蓋宋儒の學は、畢竟仲尼の旁系に外ならざるなり、然るを其本を掃らすして、其末を比擬せば、天下豈何物か又相似ざる、意ふに總目の比喻の如き、似るは則ち似ると雖、未だ其粗を免るへからざるものあるに似たり、吾人故に姑く此に附見す。

以上列舉せし所の外に於て、劉子及び中說等の書あり、劉子は或は梁の劉勰の撰する所と云ひ、又或は北齊の劉晝撰すと云ふ、總目には斷して勰の著にあらずと爲せとも、其の果して晝たるや否も亦疑似の間に在り、中說は舊說に據れば隋の王通の撰する所と爲せとも、總目には亦通の自著にあらざることを考證し、且之を斷して云く『所謂文中子者、實有其人、所謂中說者、其子福郊福時等纂述遺言、虛相夸飾、亦實有其書策、常有唐開國之初、明君碩輔、不可以虛名動、又陸德明、孔穎達、賈公彥諸人、老師宿儒布列館閣、亦不可以空談惑、故其人其書皆不著於當時、而當時亦無斥其妄者、至中唐以後漸遠無徵、乃稍々得售其說耳……然大旨要不甚悖於理、且摹擬聖人之語言、自楊雄始、猶未敢冒其名、摹擬聖人之事迹、則自通始、乃併其名而僭之』と蓋通は隋末の大儒にして嘗て徒を聚めて河汾の間に教授し、古に擬して經を作る、意ふに中說、亦其作に係るへし、而して其書の事實に抵牾する所多きは散逸佚亡の餘に於て兒孫門生の竄入せしものあるに由るならむ、今姑く俱に疑を存す。

### (二) 歴史類

後漢書 宋の范曄の撰する所にして、十紀八十列傳を立つ、載する所、頗る溢辭多きも、其類次の齊整にして、用律の精深なるは、亦以て稱するに足る、然れとも見識限ありて、體政の局弱なるは、特に恨むへしと爲すのみ、且其文筆は華を増し靡を積みて、縷貼綺繡に流れ、其贊辭は佻巧に



過ぎて、俱に史體を失すと云はざるべからず、然れども宋齊の文字、毎に此の如ければ、特に瞞の  
みを咎むべからず、吾人は是に於てか益、當時の文病を見る。

**三國志** 晋の陳壽の撰する所にして、魏は四紀、二十六列傳、蜀は十五列傳、吳は二十列傳より  
成る、宋の文帝、其略なるを嫌ふて、裴松之に命じて、注を補はしめ、博く群書を探りて書中に分  
入せしかば、其多きと本書に過きたり、王通數、壽の書を稱して、高簡にして法ありと云ふ、然れ  
ども魏を以て紀と爲し漢吳を傳と爲すか如き、常に人意に満たざる所なり、且つ諸葛亮か其父を髡  
せしを銜みて、貶辭と爲し、丁氏の米を求めて獲さりしに因て、儀展の傳を立てさりしの類、世以  
て之を陋とす、然れども其文筆の高き處は、正に馬遷の門を望むに足るものあり、之を班固に比す  
れば、多く下に在らず、要するに六朝の史筆、當さに此書を以て第一と爲すべし。

**宋書** 梁の沈約の撰する所にして、十紀、三十志、六十列傳を立つ、齊の永明中より約詔を奉し  
て是の書を作る、何承天の書を以て本と爲し、旁ら徐爰の説を採る其史跡未だ疵なしとせざるも、  
亦頗る精詳なりとす、特に其創する所の符瑞志の如きは、荒誕不經、喜んで奇説を造り、以て前代  
を誣るものなり、然れども漢季以來陰陽五行の説、漸く民心に染み、圖讖應符の事常に亂臣僭竊の  
徒の好んで口を藉く所と爲り、隱語符瑞を以て九鼎の輕重を問ふ者、續々踵出するに及び、符瑞志

の一篇を添ふるに至りしこと、豈亦由なしと云はむや、亦以て當時の世俗を見るに足るべし、若夫  
其文筆は緩弱にして、多く稱するに足らず、唯其序論の文、該詳富贍、往々觀るべきは是約書の長  
を見はせる所なり。

**南齊書及び後魏書** 南齊書は梁の蕭子顯の撰する所にして、八紀、十一志、四十列傳を立つ、  
初め江淹、沈約已に成文あり、子顯自ら表して別に書を修す、南齊書則ち是なり、曾鞏嘗て云ふ子  
顯の斯文に於けるや、喜んで自ら馳騁す、其の更改破析、刻雕藻緝の處、尤多くして、其文益、下  
る、豈才、固に強て有すべからざるかと、後魏書は北齊の魏收の撰する所にして、十二紀、十志、  
九十列傳を立つ、蓋材料を諸家の舊文に採り以て後事を綴屬するなり、然れども收、齊氏に諂ふて  
魏室に平かならざる所多きを言ひ、又人の金を受けて、故らに其惡を滅し、又夙に怨む所の者あり  
しかば、多く其善を沒せりと云ふ、故に當時衆口沸騰して號して穢史と稱せり、齊魏二書の策略は  
此の如し、他は必ずしも論せずして可なり。

(三) 地理類

**水經注** 後魏の酈道元の注する所なり、水經の作者は詳ならず、舊説には漢の桑欽と爲せども、  
四庫全書總目には、文字を推尋するに大抵三國の時の人ならむと云ひて、其の疑を闕けり、道元、



字は善長、范陽の人なり、官御史中尉に至る、事迹は魏書酷吏傳に在り、晉より以來、水經を注する者凡二家あり、郭璞と道元となり、而して璞の注、今傳はらず、且つ道元の注も亦佚するもの已に多く、脱簡錯簡、交、其舊を亂る、清儒又隨て其の闕漏を補ひ其の妄増を削りて、其舊觀に還せりと稱すれども、年代既に悠遠にして、舛謬亦相仍りしことなれば、其の果して道元の舊に復したるや否やは、亦一考に附せざるへからず、道元の注、文字流暢にして明媚愛すへく、曲折自在、亦猶水道縱横、入らざる所なきに似たり、蓋其の足迹、既に廣く、山川の起伏、城邑の位置散布等より、方士の記載傳聞に至るまで、身親しく之を得て筆に托せしものなるか故に、其の光芒、更に見るべきものあるなり、後世數多の旅行者の紀行文、必らず其筆意を摸するは、蓋之が爲めなり、范石湖の吳船錄、陸放翁の入蜀記の如き、亦其の一なり、然らば即ち道元の文字、亦豈に最も珍とすべきものにあらずや。

(四) 詩文評類

**文心彫龍** 梁の劉勰の撰する所なり、勰字は彦和、東莞の人なり、天監中に東宮通事舍人と爲り、步兵校尉に遷りて舍人を兼ね、後出家して沙門と爲り、名を慧地と改む、事迹は南史の本傳に具す、其書凡五十篇、原道以下二十五篇は、文章の體製を論し、神思以下二十四篇は文章の工拙を

論す、序志一篇は書を著す所以を言ふ、蓋文章詩賦の事、漢魏以來、既に盛んにして渾々瀟々、文成りて法立つ、建安、黃初に至りて轉裁漸く備る、是に於てか文を論するの說出つ、典論即ち其首なり、而して其の勅して一書を爲し、以て文體の源流を究めて、其の巧拙を評せしものは、實に勰の書を最古と爲す、而して其行文は當時流行の齊比を以てし、且つ每篇の終に於て贊語を加ふる所、此書の特風と爲す。

**詩品** 梁の鍾嶸の撰する所なり、嶸字は仲偉、潁川長社の人なり、兄嘏、弟嶼と並に學を好みて名あり、詞藻兼ね長す、品する所の古今五言古詩、漢魏より以下百三人、其の優劣を論し、分て上中下の三品と爲す、毎品の首に各、冠するに序を以てす、文理皆妙遠なり、其の品第の當否は、世に異論なきにあらざるも、其の評隲の爽快なるに至りては、尤も之を稱せざるへからず、蓋詩を品評するの書、嶸の書を以て最古と爲す、而して其文筆の俊健なるは、遠く勰の彫龍の上に出つ、要するに當時に於けるの好著たることは、復た決して之を疑ふへからざるなり。

**文選及び玉臺新詠** 文選は梁の昭明太子蕭統の撰する所にして、姬周以來、梁に至るまでの詩文を編次せるものなり、玉臺新詠は陳の徐陵の撰する所にして、梁以前の詩を録するなり、二書評隲に係らずと雖とも、詩文の總集に在りて、最古のものなるか故に、姑らく此に附載す。



## 第貳節 雜文

吾人は既に前節に於て、六朝間に於ける重なる著書の文を叙したり、今又此節に於ては爾餘の雜文を叙せざるへからず、雜文とは序記、表章、論贊類等の雜著を總稱するものなり。

既に前章總論に於て陳述せしか如く、漢季の文最も靡弱に陥り、一派濁流の駢儷文。漸く其源委を長し、魏に至りて曹氏父子の雄才文雅に逢ひ、以て大に其勢力を加ふるに及へり、特に陳思の巧力は遠く父兄の上に出て、筆下千言を爲し、口沫珠玉を飛はして、全く六朝文壇の始祖と爲れり、此の時に當りて王粲、劉楨の徒、之に羽翼して彩華を揚げ、文才の士、一時競ふて鄴下に集れり、然れとも其文筆を稱するときは、陳思一人を擧げて、爾餘の諸人を略することを得へし、何となれば陳思の才は、以て上は馬班の門を窺ひ、下は六朝の室を築きしも、王劉諸人に在りては直に其藩籬に傍ふて、門牆を望みしに過ぎされはなり、陳思の文、求自試表、求通親親表、與楊德祖書、及び與吳質書等を以て其散文中の傑作と稱すへし、求自試表の慷慨激昂、何等の風神何等の識力、吾人其文を讀む毎に、未だ嘗て其抱負を想見せずむはあらず、丈夫利器を懷抱して、鬱勃抑屈、以て一試を得ず、風雲の志、空しく白首と興に老んとするに至りては、誰か其れ感慨潄々として脾肉を噴せさらむや、意ふに陳思久しく嫌疑の地に在りて、天地山川、其哀情を察せず、恩愛骨肉に絶んと

し、狂風塵、棠棣の枝を鳴らす、其情に於ける果して如何そや、然らば則ち何ぞ怪むに足らむ、其の竟に自試、親親の二表あるに至ると、吾人は毎に陳思の才を懷ひて其の遂けさりしを惜む、殊に與楊德祖の如きは自ら地歩を占むること甚高く、眼中に鄴下諸子を存せざるの槩あり、而して其の『吾雖游徳、位爲蕃侯、猶庶幾戮力土國、流惠下民、建永世之業、流金石之功、豈徒以翰墨爲勳績辭賦爲君子哉、若吾志未果、吾道不行、則將采庶官之實錄辨時俗之得失、定仁義之衷成一家之言、雖未能藏之於名山、將以傳之於同好』と云ふか如き何等の雄渾何等の正大ぞ、嗚呼陳思は洵に鄴都の第一人と云ふべし。

晋初の文は阮藉稽康を以て唱首と爲す、藉の文は通易、達莊諸論を最上乘と稱す、又大人先生傳一篇、朗誦するに堪えたり、其文凡一萬二千四百餘言にして、其放縱雄奇なること、直に藉の胸懷曠趣の本面目を想見するに足る、其意、以爲らく大人先生は、法度の外に脱逸して、世局の内に醒醒せずして幽玄と俯仰すと、而して其世上禮容の士を罵倒するの痛快なるや『天下之貴莫貴於君子、言有常度、行有常式、唯法是脩、唯禮是克、行欲爲目前檢、言欲爲無窮則、少稱鄉閭、長聞邦國、上欲圖三公、下不失九州牧……獨不見羣蟲之處窟中、逃乎深縫、匿乎壞絮、自以爲吉宅也、行不敢離縫際、動不敢出繡襦、自以爲得繩墨也、然炎丘火流、焦邑滅都、群蟲死於窟中、而不能出



也、君子之處域内、何異夫論之處中乎」と云へり、是清言放談の徒の獨得として一世に高ふる所にして、其の稱して君子と目する者は、即ち進退揖讓ある禮容の徒を稱する者なり、而して特り其文章言句の上に於て、奇思放逸を洩せしのみならず、其行爲に於ても亦力めて奇異の行を爲して、常俗の上に脱出するを極致と爲せしことは、其小傳に於て見はせし所の如し、故に常に其愛好する所も亦老莊の虛無幽玄の旨に在り、其曠懷放恣の處、能く南華恣睢の意と契合するありて、其大言小言一として法度の外に逍遙するに便ならざるなればなり、則ち其の達莊通易諸論の如きは、全く此種の思想の凝結して成れるものなり、故に易を解しては『昔之玄真、往古之變經也』と云ひ達莊に於ては『氣分者一身之疾也、二心者萬物之患也』と論ずるか如き、恍惚の間に於て老莊の皮膚を想見せしものに似たり、嵇康亦善く理を談し、又能く文を屬す、高情遠趣、灑然として塵俗の上に出づ、以爲らく神仙は之を自然に稟くるものにして學を積んで至る所にあらず、唯導養の其理を得るに至りては、安期彭祖の倫にも及ふへしとて、養生論を著す、論中に『夫氣靜神靈者、心不存於矜尙、體亮心達者、情不繫於所欲、矜尙不存乎心、故能越名教、而任自然、情不繫於所欲故能審貴賤、通物情、物情順通、故大道無違、越名任心、故是非無措也、是故君子則以無措爲主、以通物爲美』と云ふもの一篇の歸着する所なるに似たり、康の文、清峻を以て勝つと、亦恰も其人と爲り

に類す、故に古人嵇阮二家を評して云く、嵇辭清峻阮旨遙深と、兩家詩文の定論は、略、此一語に盡くと云ふへし、要するに皆晉初に於ける能文の士と稱するに漏れざる者なり。

二家の後には潘岳、左思、陸機の徒、皆能文の稱を得て一時に鳴れり、中に就て機の名最も著る、然れども皆之を散文の能手と云はむよりは、寧ろ詩賦の雄と稱すること甚適當なり、蓋詩賦の流行は當時に於ける一般の風潮にして、當時の所謂文學と稱するものは、重に詩賦の異名なるか如きの觀ありしこと、猶近時の文壇に、小説の流行あるを見て、直に小説を以て唯一の文學と誤認するか如きの類なり、故に若し散文の上より、陸機、潘岳、左思諸人の文を論せば、驟かに之に被らしむるに能手の目を以てし難きものあり、其集中適、二三の散文なきにしもあらず、多くは辭賦を以て母と爲し、韻語を父として孕出したる一種の駢儷文に過ぎざるなり、是固より特に陸機諸人に在りてのみ然りと爲すにあらず、六朝の文風多く此病に罹らざるもの少なし、而して晋代に於て、最も其甚しき者を上記の諸人と爲す、鄒下既に華麗を競ふてより、晉人亦其風を扇き、而して六朝の文病漸く成る、此の時に當り李密の陳情表、王羲之の蘭亭序の如きものありと雖とも、偏師未だ勝を當年の文壇に奏すると能はず、殊に李密の文の如きは、古人評して其文を讀て泣かざる者は、必らず不孝の人なりと云ひし位の名文なれとも、身既に蜀漢の遺臣たるに『臣少事僞朝』と陳する



か如き何等の陋態ぞ、此の如きの文を推して一代の名文と云は、恐くは天下後世に亂臣賊子の種子を植て、以て口實を之に藉むとを、是尤も識者の取らざる所なり、然りと雖も薰蕕時を全ふべり、吾人は於てか益、陶潛の高きを知る。

淵明の文、其最も人口に膾炙するものを、歸去來辭、桃花源記、五柳先生傳、及び自祭文等とす、歸去來辭は其官を去る時の感遇に係る、其意、以爲らく家貧にして耕植の入は以て自ら給するに足らず、生を資するの道を尋て小官に就きしも官情は自ら吾性と違へは如かず田園に歸去して其志に従はむには、彼の無心の雲を觀れば蓬々として山岫を出て、飛ふに倦めるの鳥は棲林に還れり、浮雲遊鳥、猶其自然を得ると此の如ければ、吾亦冠を挂て家に歸らむ、富貴は吾願にあらず、東臯に登り清流に臨みて嘯傲し、以て性を盡し化に乗せんと、其意既に高く其筆亦能く達して、隱棲歸來の情を悉せり、蘇東坡云ふ兩晉に文章なし、唯歸去來一篇ありと、蓋其虛偽修飾に出でざるを以てなり、而して文体は猶ほ彼の漢武の秋風辭の如く、賦にあらず詩にあらず、又純然たる散文にもあらず、文中韻を押す處ありて其調を整ふ、是自ら辭の體なり、桃花源記は武陵の漁人を假りて、淵明自家の理想たる亂離以外の別世界を記するものなり、五柳先生傳は、名姓居處を知らざる人を假りて傳を立てしものなれども、後世の徒に筆を弄して奇を衒ふの類にあらず、韓愈の毛穎傳の如き

は、全く此種の作に屬すれども、淵明のは之に異りて自ら況ふるものなれば、稱して五柳先生傳と云ふも其實は畢竟其自傳たるものなり、而して其の贊して葛天氏の民と云ふに至りては、益々亂離荒涼の苦を厭ひ、物我自然の太古渾沌を好愛する至情を見るに足る自祭文に至りては、奇更に甚しきか如くなれども、亦淵明安貧樂天の意其中に在り『匪貴前譽、孰重後歌、人生實難、死如之何』と云ふに至りては、哀泣か喜樂か、噴達か憂憤か、抑生死事大、浮雲無常の際に於て、更に引て放たざるものあるか、之を要するに、淵明の文、晋に在りては自ら別調に屬するものなり、是其文の別調に屬するにあらずして、人を爲りの自ら時流に異なるものあればなり、蓋淵明の文は、其意を以て高きも、其筆としては猶軟弱の稱を免るべからず、是亦以て知らざるべからず。

以上兩晋の文章は略、此の如し、之を大觀するに晋は能言の士多きと同時に、文章字句の清新なるもの甚多く、其間亦名理の言に乏しからず、嵇康諸人最も然りと爲す、然れども一往疎宕の氣直に篇幅の間を貫くに至りては、最も其乏しとする所なり、是を晋文の弊とや云はむ。

南朝の文は、宋に於ては謝康樂、顏延之あり、康樂の文は其詩賦に及ばず、辨宗論、及び佛經諸贊銘の類を集中の金玉と爲す、特に其の『閉其累學、而開其一極、夷人易於受教、難於見理、故閉其頓了、而開其慚悟、慚悟雖可至、味頓了之實、一極雖知寄、絕累學之冀、良由華人悟理無漸、而誣



道無學、夷人悟理有學、而誣道有漸、是故權實雖同、其用各異』と云ふか如き、尤其理を得たるを覺ゆ、當時佛教漸く南北に行はれて人々各、其教化に薰し、田夫野人は功德に迷ひ、賢士大夫は理道を考へて、其文學上に發現するもの、亦佛理の影響を被ること此の如し、殊に竟陵王蕭子良の淨住子の如き、最も此思想の發達を見るに足る、然れども支那在來の文章としては、全く其步驟を改めたるを見る、蓋其使用語の重なるものは、直ちに一種の術語にして當時の譯語に係るものなり、而して此譯語を文章中に運用すると愈多きに及びて、其文益々解し難く、隨て語勢、句法等の混亂を來たし、覺に全く一種の佛教文學を爲すに及へり、是亦六朝文學の一現象と云ふへし、延之の文は、庭語を以て厭卷とす、庭語とは閨庭の内に誦くるの意なり、文凡三千三百四十餘字、一往反覆して條理の言を爲せり、蓋亦宋朝有數の文字なりとす。

齊に於ては王融の曲水詩序、巧麗の稱あり、固より靡麗清新の極にあるものなれども、徒に鋪叙陳を縱にする辭賦の体とは、自ら異なる所あり、後世王勃の滕王閣序の如きは、全く此種の筆意を摸するものなり、今左に篇中精采の處を節録して、其一斑を窺ふに便ならしむ、

芳林園者、福地輿區之濠、丹陵若水之菑、股々均乎眺澤、脈々尚於周原、狹豐邑之未宏、陋臨居之猶褊、求中和而輒處、撰景緯以裁基、飛觀神行、虛構雲梯、離屏乍設、層樓間起、負朝陽而抗殿、踰雲沼而浮榮、鏡文虹於綺疏、浸蘭泉於玉砌、幽々蓋薄、秩々斯干、曲拂還迴、源深徑復、新津泛沚、節桐發曲、雜天采於柔翠、亂鸞聲於綽羽、禁軒承宇、清宮俟宴、傑離宿置、崇臺宵

臨、既而誠宿澄霞、登光辨色、戒道執爨、展輪效駕、徐鑿警節、明鐘暢音、七萃連鑿、九族齊軌、建旗擣鼓、揚置振木、魚甲煙繁、貝貝星羅、重奕曲播之節、絕景道風之廟、昭灼駭龍、騁馳前列、虎視龍趨、雷駭電逝、轟々隱々、紛々軫々、羌難得而稱計、仰乃題輿駐蹕、鐵鎖淵停、瞻容有穆、寶儀式序、投几肆遊、因流波而成次、燕肴芳醴、任激水而推移、葆侍陳階、金匱在席、翹股奏舞、翳動邪詩、鳴於介州、追俗倫於陶谷、發參差於王子、傳妙際於帝江、清歌有闕、羽觴無算、上陳景福之賜、下獻南山之壽、俯凱謠之在藻、知和樂於食華、桑榆之陰不屆、草露之滋方滋、有節曰今日燕會、咸可賦詩、

孔稚珪の北山移文は、筆華清麗、亦出塵の想あり、風調の高きことは、林嶺の晨に響くか如く、詞句の修潔なることは、秋水の潭に凝るか如く、當さに以て齊代第一の文章と稱すへし、意ふに德璋山靈の英を假りて此文を草す、滿腔滿身、即ち是鍾山精靈の氣なり、然らずんば德璋多才なりと雖も、豈能く此文あることを得んや、然れども讀者は忘るへからず、移文美なりと雖も、亦當時流行の駢儷の調なることを。

鍾山之英、草堂之靈、馳烟驟路、勒移山庭、夫以耿介拔俗之標、瀟灑出塵之想、度白雪以方潔、干霄雲而直上、吾方知之矣、若乃亭々物表、皎皎霞外、芥子金而不時、履萬乘其如脫、聞風吹於洛浦、值巖歇於延瀨、固亦有焉、豈期始終參差、背黃反覆、淚墮子之悲、慟宋公之哭、乍回途以心染、或先貞而後驗、何其謬哉、嗚呼尚生不存、仲氏既往、山阿寂寞、千載誰覓、世有周子、倘俗之士、既文既博、亦支亦史、然而學遊東魯、習隱南郭、竊吹草堂、流巾北岳、誘我松桂、欺我雲壑、雖假容於江皋、乃纏情於好爵、其始至也、將欲排棄交拉許由、傲百世蔑王侯、風清張日、霜氣橫秋、或歎幽人長往、或怨王孫不游、談空々於釋部、厥玄玄於道流、務光何足比、涓子不能儔、及其鳴鶴入谷、鶴書赴隴、形跡醜傲、志趣神助、爾乃扞扉席次、秋聲鑿上、袂斐製、而裂荷裘、抗塵容、而走俗狀、風雲凄其帶憤、泉石咽而下憤、望林樹而面有尖、顧草木而如哀、至其粗金章綰墨綬、騎屬城之雄、冠日星之首、張英風於海甸、馳妙譽於浙右、道映長嶺、法鑑久埋、敲朴韻驚、犯其虛、牒訴愷德、裝其覆、擊歌既斷、酒賦無極、常綱關於結綬、每紛、綸於折獄、籠張趙於往圖、架卓魯於前錄、希蹤三輔、馳聲九州、使其高霞孤映、明月獨舉、清松落陰、



白雲誰侶、種戶推絕、無與師、石運荒涼、徒延時、至於還陽入蔭、寫勝山楹、憑欄空吟夜鶴怨、山人去兮曉猿驚、昔聞投轄逸海岸、今見解蘭縛塵纒、於是南嶽嘯嘲北隴騰笑、列壑爭鳴、撥峯城前、慨游子之我欺、悲無人以赴甲、故其林樾無靈、洞壑不吹、秋桂遺風、春蘿擢月、聘四山之逸韻、馳東阜之繁韻、今乃促裝下邑、汎棧上京、雖暫投於魏闕、或假步於山房、豈可徒芳杜原顏、薛荔深曉、碧嶺再尋、丹崖重澤、際游瀾於蕙路、汚淥池以洗耳、宜屬離嶼、掩雲關、飲醴露、藏鳴淵、截來標於谷口、杜安譽於郊端、於是登條曉晴、懸壺懸嶼、或飛柯以折輪、乍低枝而掃迹、請迴俗士驚、爲君附遺客(北山移文)

梁の文は沈約、任昉を以て第一と爲す、約の文、史筆及び釋教文に善し、史筆の事は、既に前節に出つ、釋教文の最も述へざるへからざるは懺悔文なり、其起頭に於て已に哀泣の聲を爲して云く、

弟子沈約稽首上白諸佛衆聖、約自今生已前、至於無始、罪業繁差、固非陶象所算、識味徒緣、爰由證學、爰始成策、有心嗜慾、不識慈悲、交辨罪報、

と、身は是一代の詞宗として、又朝冠の高きを戴き、而して其言の村婆野婦の佛前に稽首頂禮して罪業の消滅を祈願するか如きは、如何に當時釋教流布の時節なりしといへ、轉、一笑に堪へざるもあり、而して下段に於て、懺悔の理由を叙して云く、

今於十方三世諸佛前、見在衆僧大衆前誓心懺已、追自悔責……尋七尺所木、八微是攝折、而離之、莫知其主、雖遊業者身、身隨念滅、而念々相生、離離無已、徃所行惡、遊既由心、行惡之時、其心既染、既染之心、雖與念滅、徃之所染、即成後緣、若不本諸冥諦、以空滅有、則染心之累、不幸可磨、今者與此懺悔、磨昔所染、所染得除、即空成性、其性既空、庶罪無所託、布髮頂禮、幽顯證成、此念一成、相續不斷、日磨歲磨、生々不休、迄至道場、無復退轉、

と、其言に於ては得る所なきにあらざるか如きも、懺悔の心、中に存して、行業の實、外に誠ならは、此文復た將た何の用かある、殊に其の十方三世の諸佛大衆の前に於て、發願悔責すと云ふに至

りては、儀式方法を以て悔責を表せんと欲するものたるを免れず、若其れ形式を以て、三界の火宅を解脱し、無上涅槃の至境に至るとせば、雪山の難苦、誰か其恐を笑はざる、九年の面壁も、亦唯編眉男兒の狡猾に過ぎざるのみ、然りと雖も末俗從來虛偽多く、其内を捨て、其外を先とする者、比々皆是なり、是に於てか、四顧方袍、天下に遍くして、高德善智、世に出てず、洗禮灌頂の徒、相屬して、教會の風儀、愈々衰ふ、吾人はに於てか、又世の所謂宗教家なる者に感なき能はず、然らば約の如きは責めずして亦可なり、唯讀者は梁の文に沈約ありしを遣れすんは、則ち足れり、然ら任昉の文は、爲齊明帝讓宣城郡公表、最も當時に名あり、而して一篇の精采と稱すへき處は、親則東平、任惟博陸、從懷子孟社稷之對、何救昌邑爭臣之讒、四海之瞻、於何逃責、陵土未乾、則誓在耳、家國之事、一至於斯、非臣之尤、誰任其咎、將何以肅拜高殿、虔奉武園、悼心失圖、泣血待旦、寧容復徵榮於蒙耻、宴安於國危、の邊に在り、之に次ては、王文憲集序を以て佳作と稱す、他は弔劉文範文、短篇と雖も、亦以て誦するに足る、梁の詞壇に於ては、沈約は詩文並ひ長し、王僧孺は詩に、任昉は文に長せりと稱す、然れとも約は詩文に偏長なきと同時に、又王任の長所を壓して上ると能はず、故に梁の文章は、任昉を以て巨擘と稱せざるへからず、之を要するに梁は齊に比して其時代の接近するにも拘らず、文氣の靡弱に陥りしこと、更に甚しきを見る、是畢竟前人の形質し盡して、後記の未だ接せざるか爲めなるへし、然れとも詩人は、文家の僅少なるに似ず、詞采を馳せし者多し、是亦以て記憶に存せ



なるべからず。

陳は徐陵の擅場なり、其文九錫を以て最雄篇と稱す、文字凡二千八百八十餘言、整比、雄麗、六朝九錫の第一に居る、玉臺新咏序、及び與李那書、亦集中の完璧と稱するに足る、玉臺は絢爛を以て勝ち、李那は清俊を以て勝つ、蓋亦駢儷中、有數の文字に屬す、殊に與李那書の如きは、短簡なれとも、能く尺幅萬里の想あり、陵の文は緝裁巧密、多く新意あり、故に當時一文出る毎に、相傳寫して坊間に播せりと云ふ、亦以て能く當時の好尚に適せしを知るに足る。

南朝の文は、略、此の如し、而して共に皆靡麗の範圍を出づる能はず、殊に齊梁間を其極と爲す、唯普文較、古文の消息に近きものあり、故に若し古文辭の流を酌むるものとしては晉人を以て六朝間の第一に置かざるべからず、若し更に六朝特有の文字たる駢儷の發達としては、齊梁の間を以て其極盛と稱すべし、是其大較なり、北朝の文は多くは詞氣貞剛を以て勝てとも、其能く暢達幽麗なるに至りては多く之を見ず、庾信の文は駢儷を以て一時に鳴りしも、文名は竟に詩名に及はず、當時信の名甚、隆々たりしか故に、王公の貴紳の墓碑文の如き、必ず信に請托せりと云ふ、然れとも信の文は多く贅銘小品の文を上乘と爲して、表章序論の類の如きは、較、下れるに似たり、蓋詩人の文は、孤幹峭立して枝葉多く繁らず、詞句清新にして拗すべきもの幾々たるも、篇幅結構の美

を以て其長を爲すもの少きは概ね其通有なるか如し、而して信の文も亦此の範圍を出づる能はず、是其贅銘小品に善き所以なるか。

隋の文は煬帝の詔書、最も雅深にして且美なり、其の再伐高麗詔の如きは雄偉宏麗、自ら其味を得たりと爲す。

朕轟成寶業、君臨天下、日月所照、風雨所沾、孰非我臣、獨爾叛教、蕞爾高麗、僻居荒表、咆張狼曠、侮慢不恭、抄竊我邊陲、侵軼我城鎮、是以去歲出軍、問罪懲禍、瘳長蛇於玄菟、戮封豕於遼平、扶餘衆軍、風馳電逝、追奔逐北、徑踰沮水、沿海舟楫、衝賊腹心、焚其城郭、汗其宮室、高元伏贖泥首、送款軍門、

其正大雄偉、此の如き者あり、然れとも王者の夷狄を治むる、自ら撫育控御、其宜き所あり、而して前師未た久しからず、後軍又起る、詔勅嚴なりと雖とも、詞句壯なりと雖とも、事既に第二に落つ、煬帝の外には、慮思道の北齊後周興亡論等の如き、亦當時の佳作と稱すべし、殊に其の勞生論の如き、憂愁の寄する所、文翰頗る飛動の勢あり、論意、蓋莊周の『大地勞我以生』と云ふに取るものなり、而して其の

余則滯官、屏息窮居、甚耻驅馳、深畏乾沒、心若死灰、不營勢利、家無儋石、不費囊錢、偶影聯官、將數十歲、羈拙致笑、羸生所以告勞也、

と云ふは寧ろ其窮愁の切なるを見る、然れとも其の巧に問答の語を爲して、世途の峻嶮と人情の榮



辱とを掀騰し來り、田家野人の快樂を寫す處、頗る誦するに堪へたり。

一葉從風、無損節林之撥植、鸞鳥退飛、不虧渤海之游泳、荆田擊非、喚息及興、候南山之朝霞、瞻北堂之明月、記勝九穀之膏、觀其節制、崔寔四時之令、奉以周旋、晨荷饒籃、自屋黃冠之伍、夕談穀稼、需體檢足之倫、濁酒盈樽、高歌滿市、恍兮惚兮、天地一指、是野人之樂也。

何等の清韻、何等の間適ぞ、恍たり惚たり、天地一指の境界、天下復た何物か之に加えん、百年の生命、脆促己に甚しく、電光石火の間に於て、猶寵辱利名の念に纏はれ、輕險躁薄、無耻無羞の行をなして自ら悟らず、竟に田家山林の至樂を解せざる者、滔々皆是なり、嗚呼人欲、熾んにして治化起らず、遊民徒談の徒、日に多くして、誼獄紛糾の争、益、已ます、吾人は於てか、今世の遊民的志士なる者に感なき能はず。

以上粟叙せし所、固より六朝雜文の消息一斑を舉示せしに過ぎず、然れとも大要は亦此に在るを信ず、若夫れ好文の士は、必ず自ら魏晉南北間の藝苑を涉獵して、其遺翰を訪ひ、其遺翰を尋ねて、觸氷知寒の消息に達せざるへからず、是吾人の併せて讀者に望む所なり。

## 第四章 六朝詞人傳

### 第壹節 鄴都の諸人

魏は鄴に都す、孟德父子文學を好みて詞人鄴下に集まる、陳思王植嘗て典論を著し孔融、徐幹、王粲、陳琳、阮瑀、劉楨、及び應瑒等を七子の徒と稱せり、世之を鄴下の七子と云ふ、然れとも融は自ら漢臣にして、嘗て孟德の爲めに殺されし者なり、且其年輩も亦王劉諸人と迥かに違へは、之を鄴下に列するは頗る其義を得ず、今省略に従ひ、六子を以て三曹に繫て、其小傳を立つ、六子の外に楊德祖、應璩、繁欽、丁儀等の諸文士ありと雖も、今皆之に及はず。

**武帝** 姓は曹、諱は操、字は孟德、沛國譙の人なり、漢末に孝廉に擧げられて郎と爲り、歷進して丞相に至り、魏王に封せらる、雄才大畧あり、天下の方さに多事なるに乗して、讎詐權略を以て人才を收用し、非望を遂行して其志を壯にせり、其子丕に至り、遂に漢に代て立ち、追證して武帝と云ひ廟を太祖と號す、其事業は青史既に明文われは今復た之に及はず、孟德は饒雄にして、其才特り軍陣譎詐の事に於て長せるのみにならず、亦能く文才風流、戎馬倥傯の間に於て餘を横へて詩を賦し文を屬せり、而して其音節、強健跌宕、老氣秋に横はるの弊あり、古來姦雄固に多才、吾人孟德に於て之を見る。

**文帝** 諱は丕、字は子桓、武帝の長子なり、建安二十二年に立て魏の太子と爲り、太祖崩して位を嗣ぎ丞相魏主と爲り、後に漢の禪を受ると稱して、遂に帝位に即く、崩する時、年四十、帝天資



文藻に富み、又篤く文學を好みて、平居著述を以て務と爲せり、故に其勅成せし所の文詩、亦甚多し、蓋其才藝、亦孟德の子たるに背かざるなり。

陳思王植 字は子建、文帝の同母弟なり、幼にして善く文を屬す、武帝嘗て其文を視て、植に謂て云く、汝人を備ふかど、植跪て云く、言出て、論を爲し、筆下りて章を成す、願りて當さに而試せらるへしと、時に銅雀臺、新に成る、帝悉く諸子に臺に登りて各、賦を爲らしむ、植乃ち筆を援て立るに文を成す、帝甚之を異とせり、性簡易にして威儀を修めず、輿馬服飾、華麗を尙ひず、武帝幾んと立て、太子と爲さんとせしと數、なりき、帝既に崩して文帝之を御するに術を以てし、頗る情を矯めて自ら飾りしかば、宮人左右も亦數、植を劾せしとあり、而して植も亦性に任して、自ら其行を彫勵せず、飲酒節なく、困りて累りに徙封に遭ひ、最後に陳王に封せられて、邑三千五百石を食めり、是に於て常に快々として樂ます、遂に疾を發して薨す、時に年四十一、諡して思と云ふ、子建高材絶足、筆下縦横、恣に其才を揮霍して、前に父兄なし、傳へ云ふ、文帝嘗て子建に命して、七步の中に詩を爲らしめ、若し成らざれば大法を行はむと、子建聲に應じて、煮豆の詩を作る、悲愴幽憤、尤其才調を見るに足る、曹氏何の宿徳ありてか、文才一門に集ること此の如く其れ盛なるや。

王粲 字は仲宣、山陽高平の人なり、漢季に當り、左中郎將蔡邕、才學顯著、朝廷に貴重せられしが粲を見て、奇として云く、吾は之に如かず、吾家の書藉文章、盡く當さに之に與ふへしと、後に魏の侍中と爲る、容貌短小にして陋寝なり、性本ト算を善くす、其の文を屬するや、筆を擧れば便ち成る、而して竟に一字を改定せず、時人常に以て宿構と爲せりと云ふ、建安二十二年に卒す、年四十一。

陳琳 字は孔璋、廣陵の人にて難を冀州に避けしが、袁紹、琳に文章を典らしめたり、嘗て紹の爲めに檄を作りて曹操を酷詆す、紹敗れて後に魏に歸す、操其才を愛して敢て舊罪を咎めず、軍國の書檄、多く其手に成る、文帝嘗て評して云く、陳琳、阮瑀の章表書記は今世の俊なりと。

阮瑀 字は元瑜、廣陵の人なり、少ふして學を蔡邕に受く、武帝雅より瑀の名を聞く、乃ち辟せども應せず、連りに逼促せらるゝに及び、逃て山中に入る、帝人をして山を焚かしめて之を獲、陳琳と同じく軍國の書檄を典らしむ、後に倉曹掾屬に徙り、建安十七年に卒す。

劉楨 字は公幹、東平の人なり、武帝辟して丞相掾屬と爲す、文帝嘗て太子たりし時、諸文學を宴せしに酒酣なる時、夫人甄氏に命し出て拜せしめしかば坐中皆伏せしも楨獨り平視せり、武帝之を聞き楨を收めて吏に署し、死を減して輸作せしめたり、建安二十二年に卒す。



應瑒 字は德璉、汝南の人なり、武帝辟して丞相掾と爲す、後に五官中郎將文學と爲り、建安二十二年に卒す。

徐幹 字は偉長、北海の人にて五官中郎將文學と爲る、陳思嘗て徐幹を贊して云く、偉長は文を抱き質を抱き、恬淡寡欲、箕山の志あり、彬々たる君子と云ふべしと、王弼の子を戒る書に云く、北海の徐偉長は名高を治めず、苟得るとを求めず、澹然として自ら守り、惟、道を是れ務めて是非する所あれば、古人に託して以て其意を見せり、吾之を敬し之を重す、願くは兒子の之を師とせんことをと、以て其人品を知るべし、著す所の中論最も名あり、事は前編に出つ。

第貳節 晋代の諸人

阮籍 籍は字を嗣宗と云ふ、陳留尉氏の人なり、容面瓌傑にして、志氣宏放、性に任して羈せられず、或は戸を閉ちて書を讀み、累月出でず、或は山水に登臨し、日を経て歸るを忘る、性酒を嗜みて能く嘯き又善く琴を彈す、其得意の時に當りては、忽ち形骸を忘る、時人多く之を癡と云ふ、唯族兄文業、毎に之に嘆服し、以て己に勝ると爲す、籍本、濟世の志あり、魏晋の際に當り、天下多故にして、名士の全きを得るもの少きを見て、遂に世事に與らず、常に酣飲を以て事と爲せり、當時の公卿に鍾會と云ふ者あり素より籍を惡む、數、時事を以て籍に問ひ、其可否に因りて之を罪

に致さんと欲せしも、皆酣醉を以て免るゝとを獲たり、又嘗て歩兵の厨營人に、善く酒を醸して、三百斛を貯ふる者ありと聞き、乃ち求めて歩兵校尉と爲り、職を去ると雖も、恒に府内に遊ひて、必ず朝宴に與かれりと云ふ、蓋其本趣は禮教法度の外に脱出して、放縱任性の行を爲すを以て快と爲せし者にして、狂態百出、或は風前に犢鼻褌を懸して上巳の彩旗に代へ、或は酣醉六十日、人言を聴かさりしが如きの類、最も其頹唐の趣を見る、殊に其の青白眼を爲して、禮俗の士に對するに白眼を以てし、同氣の人に逢ふては青眼を見せしか如き、之を兒戲と云はむか喪心と稱せむか、洵に常俗の爲す所にあらざるを見る、然れども、性至孝にして、母没せし時に吐血數升、毀瘠骨立して、其性を滅せんとせしか如き、其外坦蕩にして、内の至淳なるを察するに足れり、意ふに放曠恣唯は其天性にあらして矯激背世の意に出でしものか、世の矯激家と稱せらる者、常に俗を憤り邪を疾むの念に堪えず、寧ろ自ら世に背き俗に遠かるの人と爲るも、陰毒姦譎の行を爲し、人を賣り人を殺すの徒と、類波横蕩の間に並ひ立つを欲せざるに出づるもの多しと爲す、之を窮極するに、背世拔俗の士は必らず君子の人にして、其反對に立て、順境得意の地に在るの徒は、未だ嘗て必らず奸邪譎佞欺負の小人たらずんばあらざるなり、然らば籍の胸臆間の本趣、豈亦氷潔高節、嫉俗脫世の餘に出るにあらすして何ぞ、嗚呼以て其人を知るべし、籍卒する時、年五十四、其知心の友を稽



康と爲す、亦清淡同流の人なり。

**嵇康** 康は字を叔夜と云ふ、譙國鍾の人なり、幼にして孤なり、身の長け七尺八寸、風儀あり、形骸を土木にして、自から藻飾せず、人以て龍章鳳姿の天質自然なるか如しと爲す、資性恬靜にして欲寡く、寬簡にして大量あり、學に師受なけれども、博覽にして該通せざる所なし、長して老莊を好み大に得る所あり、魏の宗室と婚して中散大夫に拜せらる、與に神交する所の者は、陳留の阮籍、河内の山濤等にして、清談脱俗、林泉の間に徜徉す、其流を酌む者には、河内の向秀、沛國の劉伶等其他數子の徒あり、世に謂ふ所の竹林の七賢なるもの即ち是なり、康性絶巧にして鍛を好む、宅中に一柳樹ありて枝葉甚茂れり、乃ち水を激して之を圍らし、夏月毎に其上に居て鍛す、潁川の鍾會は貴公子なり精練にして才辯あり、嘗て康に造たりしに康之に禮せず、鍛して愠めず、其、久ふして會去る、康之に謂て曰く何の聞く所あり來り何の見る所ありて去るやと、會か曰く聞く所を聞て來り見る所を見て去ると、竟に此を以て康を憾み、回りて康を譖して獄に繋ぐ、康將に東市に刑せられんとするや、大學生三千人、請ふて師と爲さんとせしも許されず、康顧みて日影を見、琴を索めて之を彈して云く、廣陵散、今に於て絶ゆと、時に年四十、海内の士、之を聞て痛悼せざる者なし、初め康嘗て洛西に遊び、暮に華陽亭に宿し、琴を引て且つ彈す、夜分忽ち客あり

詣る、乃ち康と共に音律を談す、理致清辨、因て琴を索めて之を彈し、遂に以て康に授けて、復た其姓字を言はざりき、廣陵散は蓋是なりと云ふ。

**傅玄** 字は休奕、北地泥陽の人なり、少ふして孤貧、博學にして善く文を屬す、性剛勁亮直、人の短を容るゝこと能はず、晋に事へて侍中と爲る、奏効ある毎に、或は日暮に値へば、白簡を捧げて簪帶を整へ、竦踊して寐せず、坐して旦を待つ、其峻急なること此の如し、是を以て貴游諸人、無伏して、羣開風を生せりと云ふ、卒する時、年六十二、謚して剛と曰ふ、玄少き時、難を河内に避けて、心を詞學に専らにす、後顯貴なるに及ふと雖とも、著述を廢せず、嘗て傅子數十萬言を著す、其文散文の章に出つ、玄又能く樂府歌章を作る、晋代宗廟朝廷の樂章、多くは玄の手を経て成るものに係る、郊祀歌、宗廟歌、鼓吹曲以下諸作の如き、概ね皆是なり、蓋亦晋初に於ける著名の作家なりとす。

**張華** 字は茂先、范陽方城の人なり、少き時孤貧なりければ自ら羊を牧せり、同郡の庶欽、見て之を器とす、郷人劉放も亦其才を奇として、女を以て之に妻はす、學業優博にして、辭藻溫麗、其自行ふや、造次必ず禮度を以てす、未だ名を知られざる時、嘗て鶴鶴賦を著す、陳留の阮籍、之を見て嘆して云く王佐の才なりと、是に由りて聲名始めて著る、後に庶進して尙書廣武縣侯と爲



り、名聲一世に重く、晉朝の儀禮憲章、多く其の増損する所に係る、而して當時の詔誥は、皆其の  
 帥定する所なり、荀勗、自ら大族なるを以て、帝の恩を恃み、深く之を憎疾し、遂に華を出して持  
 節都督幽州諸軍事と爲す、後遂に害に遭ふ、時に六十九、性人物を好み、後進を誘進して倦まず、  
 人の一善ある者は便ち咨嗟監稱して措かず、性雅より書籍を愛す、身死するの日、家に餘財なく、  
 惟文史ありて機篋に溢れしと云ふ、著す所の詩文、竝に世に行はる。

左思 字は太冲、貌寝口訥にして辭藻壯麗なり、性交遊を好まず、惟閑居を以て事と爲す、嘗て  
 齊都賦を作り、一年にして乃ち成る、復た三都を賦せんと欲し、思を構ふること十年、門庭藩溷、  
 皆筆紙を著けて、一句を得は、即ち之を疏す、賦成るに及び、豪貴の家、競ふて相傳寫し、洛陽の  
 紙價、之か爲に貴きに至る、初め陸機、洛に入りて此賦を作らむと欲せしに、思か方さに之を作る  
 と聞き、掌を撫して笑ひ、書を弟雲に與て云く、此間倫父ありて三都賦を作らむと欲すと聞く、其  
 成るを須て、當さに以て酒麪を覆ふべきのみと、思の賦出づるに及びて、機歎服して以爲らく加ふ  
 る能はざるなりと、遂に筆を擱めたりと云ふ。

潘岳 字は安仁、滎陽中牟の人なり、少ふして才穎を以て稱せらる、後に其才名世に冠たるに及  
 ひ、衆の爲めに疾まれて遂に栖遲すると十年、出て、河陽の令と爲る、奇才優寔、鬱々として志を

得ず、後給事黃門侍郎に遷る、性輕躁なれとも、其姿貌は甚美なり、少き時、嘗て彈を挾て洛陽の  
 道に出づ、婦人の之に遇ふ者、皆手を連て縈繞して、之に投するに果を以てし、果積て車に滿つ、  
 岳又辭藻に富む、其絶麗、人と爲りに類す、而して尤善く哀詠の文を作る、然れとも其行會て立た  
 す、賈謐に諂事して、其出る毎に塵を望んで之を拜せしか如き、尤も識者の以て醜とする所なり、  
 岳亦末路、人の爲めに誣告せられて、市に誅せらる。

劉琨 字は越石、中山魏昌の人にして、漢の中山靜王勝の後なり、年二十六にして司隸從事と爲  
 る、時に征虜將軍石崇か別廬、河南の金谷洞中に在り、日に賓客を引致して、詩を賦す、琨其間に  
 預りて、文詠、頗る當時に許さる、秘書監賈謐、朝政に參管し、京師の人、心を傾けざるなし、潘  
 岳、陸機以下並に文章を以て節を降して謐に事ふ、琨亦其間に在り、號して二十四友と云ふ、官は  
 侍中太尉并幽薊三州諸軍都督と爲り、志常に晉室を獎興して、戎狄國家の耻を雪くに在り、而して  
 竟に王敦の爲めに殺さる、時に年四十八、琨詩を善くし、託意雄深、直に胸憤を擲て幽感を暢し、  
 慷慨亦人と爲りに類す、嘗て晉陽に在りて胡騎に圍まる、城中窘迫、計の出る所を知らず、琨月に  
 乘し樓に上りて清嘯せしかば賊之を聞きて皆凄然として長歎し、中夜胡笳を奏せば賊又流涕歔歔し  
 て懷土の情あり、曉に向て更に復た之を吹けば、胡賊並に圍を棄て走れりと云ふ。



陸機 字は士衡、吳郡の人にて、家は世々吳の名族たり、身の長七尺、其聲雷の如し、年二十の時、吳滅ぶ、乃ち舊里に退居して、學を積むこと十年、太康の末に至り、弟雲と俱に洛に入る、成都王穎、機を表して平原内史と爲す、太安の初、穎河間王暉と兵を起して長沙王を討す、機に後將軍河北大都督を假して諸軍二十餘萬人を率ひしむ、機以爲らく三世將と爲るは道家の忌む所、且羈旅の人を以て、入りて驟かに群士の右に居るは怨心の歸する所とて、固辭せしも許されず、我に臨むに及んで牙旗偶々折る、機意甚く之を惡む、列軍朝歌より河橋に至る、鼓聲數百里に聞ゆ、長沙王天子を奉して機と鹿苑に戰ふ、機か軍大敗す、群少交々機を頽に踏して、其異志あるを誣ゆ、穎大に怒りて秀密をして機を收めしむ、其夕機黑幟車を繞り、手を以て決せんと欲すれども開けずと夢む、天明兵至る、機戎服を釋て、白帟を著し、秀と相見る、神色自若として、秀に謂て云く、吳朝の傾覆せしより、吾兄弟宗族、國の重恩を蒙り、入りては帷幄に侍し、出ては符竹を剖く、成都吾に命するに重任を以てす、辭すれとも得ず、今日誅を受く、豈に命にあらずやと、因りて頽に踐す、詞甚く凄惻なり、既にして救して云く華亭の鶴唳、豈復た聞くへけむやと、遂に害に軍中に遇ふ、時に年四十三、機既に其罪に非らずして死す、士卒之を痛て涕流せざるはなし、是の日、昏霧盡合ひ、大風木を折る、讖者以て陸氏の寃と爲す。

機天才秀逸にして、辭藻宏麗なり、張華嘗て之に謂て云く人の文を爲くる、常に才なきを恨むも、子は更に其多きを思ふと、葛洪も亦嘗て機の文を稱して、猶ほ玄圃の積玉の夜光にあらざるはなきか如く、其弘麗研贖、英銳漂逸、亦一代の絶なるかと、其の人に推服せらるること此の如し、作る所の詩文甚多く、小篇大作、皆珠流玉走る、盖文才雄筆、亦陳思以來の第一人と云ふべし、惜ひ哉、奇才毎に群小の排擠に遭ふて、其驕足を展すことを得ず、白璧瑕無ふして蒼蠅之を穢かす、千載何の時に此腐蝨を掃ふことをむ、嗚呼平原、洵に惜むべきかな。

陸雲 字は士龍、才理あり、少ふして兄機と名を齊ふす、文章機に及はずと雖とも、持論は之に過く、世號して二陸と云ふ、嘗て機と共に張華に詣る、華機に雲の何くに在るかを問ふ、機云く雲笑疾あり、未だ敢て自ら見えすと、俄にして雲至る、華、人と爲り姿勢多く、又好んで帛繩を綴に纏ふ、雲見て大に笑ふて自ら已む能はず、是より先き嘗て縊經を著て船に上り、水中に於て顧みて其形を見、因て大笑して水に落ち傍人に救はれて免るゝことを獲たり、官清河内史に至り、屢々正言を以て旨に忤ふ、機敗るゝに及び、并に穎に害せらる、年四十二、門生故吏、喪を迎へて清河に葬り、墓を修め碑を立て、四時に祀祭す、著す所の詩文亦甚多し、初め雲嘗て故人の家に逗留し、夜暗ふして路に迷ひ、適く所を知らず、忽ち草中に火光あるを望む、是に於て、之に趣て一家に至



り、便ち投宿す、一少年の風姿、甚、美なる者を見、共に老子を談す、辭致深遠、曉に向て辭し去る、行くこと十里許り、故人の家に至る、云ふ此數十里中、人居なしと、雲意始めて悟る所あり、却て昨宿の處を尋れば乃ち王弼の家なり、雲本、玄學なし、此より老を談する、殊に進むと云ふ、雲、兄機と友愛甚至る、詩文風流、兄に寄するもの一にして足らず、士衡も亦文成れば輒ち弟をして之を定めしめて他人を假らざりしと云ふ、棠棣の華華々として俱に盛んなり、唯此一事あるも以て世に傳ふるに足る、况んや其連珠の樹たるに於てをや、嗚呼以て珍とすへきかな。

**張載** 字は孟陽、安平の人なり、性閑雅、博學にして文章あり、太康の初、蜀に至り、道に劍閣を經、蜀人の險を恃みて亂を好むに感し、因て銘を作る、益州刺史張敏見て之を奇とし、乃ち表して、其文を上る、武帝使を遣はして、之を劍閣山に鑿せしむ、又滌泥賦を作る、傅玄見て嗟嘆し、車を以て之を迎へ、言談盡日、竟に以て名を知らる、官して弘農太守と爲る、長沙王義請ふて中書郎に拜せしも世の方さに亂るゝを見て復た仕進の意なく、遂に病と稱して家に歸る。

**張協** 字は景陽、少にして備才あり、兄載と名を齊ふし河間内史と爲る、郡に在りて清簡寡欲、治績あり、時に天下已に亂れ、所在盜起る、協遂に人事を棄絶して、草澤に屏居し、道を守て競はず、屬詠を以て自ら娛みとす、永嘉の初復た黃門侍郎に徵されたれとも疾に託して就かず、協詩を

善くし、風流調達、文牀華淨、尤も鍛鍊を以て稱せらる、然れとも景陽の文は以て兄に及はず、孟陽の詩は更に弟に譲らざるを得ず、是二張の詩文、互に長短ある所なり、而して二子、共に世途の多難なるを觀て、早く身を草萊に退けて其毒に罹らざりしは、亦當時の高士と云ふへし、晋代の文人、棣華の美、世に張陸を併稱す。

**陶潛** 字は淵明、又元亮、尋陽柴桑の人なり、少ふして高趣あり、嘗て五柳先生の傳を著し、以て自ら況ふ、親老ひ家貧なりければ、躬耕して自ら資け、遂に羸疾を抱く、後彭澤の令と爲る、郡督郵を遣して縣に至らしむ、吏白す、應さは東帶して之を見るへしと、淵明嘆して云く我五斗米の爲めに腰を折りて郷里の小人に向ふ能はずと、即日印綬を解て其職を去り、歸去來辭を賦す、性酒を嗜む、嘗て九月九日に酒無く、宅邊の菊叢中に出て、坐すると久し、江州刺史王弘と云ふ著、酒を送り至る、即ち酌み且つ酔ふて後歸る、淵明音聲を解せざるも無絃琴一張を畜へ、酒ある毎に、輒ち撫して以て其意を寄す、其詩恬淡、人と爲りに類す、嘗て桃花源記を著す、文情瀟散、轉、人をして其光景を想望せしむ、然れとも桃源本、淵明の寓言に出つ、後世風塵の外を云ふもの、必ず桃源を稱す、蓋淵明晋祚既に覆へるの時に在り、禾黍漸々として目を舉れば山河の異あり、則ち其身江湖に遊んで隱逸釣漁の人と爲るも、其先は亦嘗て晋の右族たりしかば、感興萬端、其間自ら言



ふに忍ひざるものありて、鷄犬竹籬、煙火太平の世を想望せしものならむ、抑譎詐相高り、狡獪俗を爲して會て怪ます、人を排擠し、人を究殺して、己の志を達し、己の私欲を逞ふせんと欲するの世に處し、清風高舉、氷雪の資を懷て、目を世道に蓄め、亂離荒涼、復た人心の回すへからざるを知る者、幾くか亦隱逸傳中の人とならざらむ、然らば淵明をして獨り叢菊香處に葛巾漉酒の人とならしめたるもの、亦奈何そ之を當時の罪と云はざるへけんや。

第三節 南北朝の詞人

(一) 宋

謝靈運 陳郡陽嘉の人なり、少ふして學を好み、群書を博覽す、文章の美、江左に冠たり、康樂公に封せられ、邑二千戸を食む、性豪華にして、車服鮮麗、衣裳器物、多く舊制を改む、世共に、之を宗として威な謝康樂と稱す、太子左衛率と爲り、褊激にして多く禮度を愆つ、朝廷唯、文義を以て之に處し、實用を以て相許さず、自ら謂ふ才能宜しく權要に參すへしと、既に知られずして常に憤々を懷く、廬陵王義真文辭を好み、靈運と情款常に異り、而して靈運常に執政を非毀す、司徒徐羨之等之を思ひ、出して永嘉の太守と爲す、郡に名山水あり、靈運素より山水を愛す、乃ち遂に意を傲遊に肆にして、偏く諸縣を涉歴し、動もすれば旬月を踰へて歸らず、民間の聽訟、復た

懷に關せず、到る所、輒ち詩を爲りて其意を致す、郡に在ると一年、病と稱して職を去る、靈運の父祖、並に始寧縣に葬る、縣に故宅及び別墅あり、遂に籍を會稽に移し山に傍ひ江を帶ひて別業を修營し、諸隱士等と縱放して娛を爲す、一詩出る毎に、都門の貴賤、競ふて傳寫せざるはなく、遠近欽慕して、名、京都を動かせり、族弟惠連、東海の何長瑜等と文章を以て賞會し、共に山澤の遊を爲す、時人之を四友と云ふ、靈運父祖の資に困り、生業甚厚く、奴僮門生數百人、山を尋ね嶺を陟り必らず幽峻に造る、巖障千重、備さに盡さざるはなく、常に一種の木履を著けて山に上るときは前齒を去り、下るときは後齒を去れり、嘗て始寧の南山より木を伐り逕を開て直に臨海に至る、從者數百人、臨海の太守、駭き以て山賊と爲せりと云ふ、後亦人に誣られて其終を令くせず、死する時、年四十九。

顏延之 字は延年、瑯琊臨沂の人なり、性酒を好みて細行を護せず、歩兵校尉と爲り、劉湛、殷景仁等の専ら要任に當るを見て意常に不平あり、云く天下の務は當さに天下と之を共にすへし、豈一人の智の能くする所ならむやと、以て毎に權要を犯す、後に秘書監光祿勳太常と爲る、孝建三年卒す年七十三、延之性既に褊激にして又酒過あり、肆意直言す、身を居くと清約、財利を營せず、布衣蔬食、郊野に獨酌す、其適意に當りては傍に人無きが如し、陳郡の謝靈運と俱に詞采を以て名



を齊ふす、潘岳、陸機の後、文士能く及ぶ者なく、江左に顔謝と稱す、著す所の庭詒文尤も名あり。

**鮑照** 字は明遠、東海の人なり、文辭曠逸、嘗て古樂府を爲る、文甚遒麗なり、元嘉中に河濟俱に清みしかば河清頌を爲る其叙甚工なり、嘗て義慶に謁し未だ知られず、詩を獻して志を言はむと欲す、人之を止めて云く、即位尙早し、輕しく大王に忤ふへからずと、照勃然として云く、千載の上、英才異士あり、沉没して聞えざる者、安んぞ數ふへけむや、大丈夫豈遂に智能を蘊みて蘭艾辨せず、終日碌々として燕雀と相隨はしむへけむやと、竟に詩を奏す、義慶之を奇として帛二十四を賜ふ、後文帝以て中書舍人と爲す、帝文章を好み、自ら謂ふ能く及ぶ者なしと、照其旨を悟り、文章を爲るに鄙言累句を多くすと云ふ、然れとも今其集を閲するに多く鄙言累句を見ず、後亂兵の爲めに殺されて死す、其文最名あるものを蕪城賦、河清頌、及び登大雷岸與妹書等とす、而して其詩殊に高妙なりと稱す。

(二) 齊

**王儉** 字は仲寶、瑯琊臨沂の人なり、年二十八にして右僕射と爲り、吏部を領す、明帝嘗て群臣を宴し各伎藝を効たさしむ、褚淵琵琶を彈し、王僧虔、柳世隆琴を彈し、沈文季、子夜來を歌ふ、儉云ふ臣解する所なし、唯書を誦することを知ると、因て帝の前に跪て相如か封禪書を誦す、帝崩

す、遺詔して儉を侍中尚書左鎮軍將軍と爲さしむ、後國子祭酒を領す、乃ち儉の宅に於て學士館を開き、悉く四部の書を以て儉の家に充てしむ、儉嘗て人に謂て云ふ、江左の風流宰相は、唯謝安あのみと、蓋自ら比するなり、年三十八にして薨す、文憲公と謚し、又贈官あり、儉嗜慾寡く、唯經國を以て務と爲し、車服塵素家に遺財なし、最も禮儀に長す、著はす所の詩文、亦世に行はる。

**王融** 字は元長、琅琊臨沂の人なり、世祖嘗て芳林園に幸して朝臣を饗宴し融に曲水詩を序を爲らしむ、文藻富麗、當世に稱せらる、後主客と爲りて外賓に接す、北使房景高宋辨等、融か年少きを見て交、問ふて曰く主客の年幾くぞと、融云く五十の年久しく其半を踰ふと、又問ふて云く、北に在りて聞く、主客曲水詩序を作りて、其製顔延年に勝ると、願くは一見するを得むと、融乃ち之を示す、後日宋辨瑤池堂に於て、融に謂て云く、昔相如の封禪を觀て漢武の徳を知る、今王生か詩の序を見て齊主の盛を見ると、其推稱せらるること此の如し、後事を以て獄に死す、年二十七、融文辭辨健、尤善く倉卒に屬綴す、其造作する所あるときは、筆を授りて乃ち成る、古人以て賈誼終軍の流亞と爲すと云ふ。

**謝朓** 字は玄暉、陳郡陽夏の人なり、少ふして學を好み美名あり、文章清麗なり、尤も五言詩を善くす、梁の沈約常に云ふ、二百年來此詩なしと、嘗て出て、宣城太守と爲る、世之を謝宣城と稱



す、李青蓮は唐朝第一流の詩人にて其詩を論するや目に往古なきも唯獨り玄暉に於ては三四稱服漢美して置かず、梁の武帝も亦謝詩を重んじて云く、三日讀まざれば即ち口の臭きを覺ゆと、簡文も亦以て文章の冠冕と推稱せり、其の世に貴重せられたると此の如きも時の厄運に遭ひ、構擠排陷、荆榛に坐するが如く、竟に獄に下りて死す、年三十六。

**孔稚珪** 字は德璋、會稽山陰の人なり、少ふして美譽あり、風韻清疎、文詠を好み、酒を飲むこと七八斗、外兄張融と情趣相得、又瑯琊王思遠、廬江の何點等と款交して、世務を樂まず、居室幽雅盛に山水の間に營み、凡に憑りて獨酌し、傍に雜事なく、門庭の内、草萊剪らず、中に蛙鳴あり或人之に問ふて云く、陳蕃たらむと欲するかと、稚珪笑て云ふ、我此を以て兩部の鼓吹に當つるのみと、官太子詹事散騎常侍に至る、卒する時年五十五、金紫光祿大夫を贈らる、嘗て汝南の周顒が舍を鐘嶺に結ひて棲隱の志ありしも後復た出て、山陰令と爲りて此山を經るに及び稚珪山靈に代り移文を作りて之を絶つ、辭甚高し、北山移文即ち是なり。

(三) 梁

**武帝** 姓は蕭、諱は衍、字は叔達、初め齊に仕ふ、後自立して國を梁と號す、帝少ふして學に篤く、儒玄に洞達し、萬幾多端の時と雖も、猶ほ手に卷を握めず、筆述甚勤めたり、又篤く正法を信して梵典に耽り、亦造詣あり、天資睿敏にして筆を下せば章を成し、千賦百詩、皆彬々として其美掬すべし、古來人君の恭儉莊敬にして能く藝能博學なる、帝の如き者蓋亦希なり、梁の君臣に文學の才多かりしは蓋亦其德風に由る、然れども六朝の靡麗、既に此時を甚しとす、若し上の好む所、下之に従ふと云ふを得ば、梁武亦其責を免るべからず。

**簡文帝** 諱は綱、字は世瓊、武帝の第三子なり、六歳にて文を屬す、高祖信せず、御前に於て之を試みしに辭彩甚美なりしかば高祖嘉嘆す、長して器宇寬弘、未だ會て愠喜を見せず、方頗にして豐下、鬚鬢鬍けるが如し、居常常に文學の士を引き納れて賞接倦まず、詩文の富、古來帝の如きもの希なりと稱す、蓋昭明を兄とし湘東を弟として、文辭の美を競ひ華を争ひしかば、梁朝の文風一時に騰り、秋竹春柳、亦其色を増せり、當時號して宮昧と云ふ、然れとも其體輕豔に傷る、故に梁史之を裁して云く、輕華累を爲す、君子の取らざる所なりと、蓋亦中れり矣。

**昭明太子統** 字は德施、高祖の長子なり、天監元年立て皇太子と爲る、性仁孝にして寬和、能く衆を容る、常に才學の士を引と納れて賞愛倦むことなく、籍籍を討論し、古今を商榷して、繼くに文章著述を以てす、東宮の藏書、幾んと三萬卷、名才並び集る、文學の盛なること、晋宋以來、未だこれあらざるなり、大通三年疾に寢して薨す、年三十一、諡して昭明と曰ふ、嘗て遠く周秦以



來の雜文を編次して文選と云ふ、大に時に行はる、其詩文亦甚美なり、薨後に簡文帝躬ら其遺集を編次し、且序を作りて、其十四徳を頌す、友于の情、或は溢美なきにしもあらずと雖も、大要其本昧なくして、安んそ其影貌あらむや、蓋亦博雅好文の公子と云ふへし。

**元帝** 諱は釋、字は世誠、武帝の第七子なり、天性英發、音響鐘の如く、幼にして眼を患ひ、遂に一目を失ふ、簡文帝侯景の亂に崩するに及び、群臣帝に勸進して位に即かしむ、性書籍を愛す、既に目を患ひて多く自ら卷を執らす、左右に命じて、番次上直して書を讀ましむ、嘗て眠熟して大軒す、左右睡讀して次第を失す、帝驚き覺めて更に追讀せしめしことありと云ふ、常に云ふ我文士に頼れて武夫に愧つと、論者以て言を得たりと爲す、魏の師至りて城陷る、詩四絶を製して、竟に歿す年四十七、著はす所孝徳傳、忠臣傳等あり、其他詩文雜著甚多し。

**江淹** 字は文通、濟陽考城の人なり、少ふして孤貧、沈靜、學を好みて交遊少し、梁に事て文功あり、天監元年散騎常侍左衛將軍と爲り、臨沮縣開國伯に封せられ、邑四百石を食む、淹乃ち子弟に謂て云く、吾本、素官、富貴を求めず、今遂に此に至る、人生行樂のみ、吾功名既に立つ、正に身を草萊に歸せんと欲するのみと、後金紫光祿太夫に遷り、改めて醴陵侯に封せらる、卒する時、年六十二、高祖素服して哀を擧げ、賻贈あり、謚して憲伯と云ふ、淹少ふして文章を以て顯はれ、

晚節才思微しく退く、時人之を才盡きたりと云ふ。

**沈約** 字は休文、吳興武康の人なり、幼にして孤貧、篤志學を好み、晝夜倦まず、母其の勞を以て疾を生せんを恐れ、常に油を減して火を減す、梁に事へて官は左光祿大夫侍中少傅に至る、性酒を飲まず、嗜欲亦甚少し、居處儉素、宅を東田に立て郊阜を囑望し、嘗て郊居賦を爲りて其懷を述ふ、卒する時年七十三、謚して隱と云ふ、約左目に重瞳子あり、腰に紫痣あり、聰明人に過く、墳藉を好み、書を聚ること二萬卷に至る、少ふして貧き時、米を宗黨に丐ふて數十斛を得、宗人に侮られて米を覆し去る、貴きに及び、以て憾と爲さずして之を擧用せりと云ふ。

**任昉** 字は彦升、樂安博昌の人なり、身の長け七尺五寸、性至孝なり、其父檣柳を嗜みて常餌と爲す、臨終の際に亦之を求む、而して多く口に適せず、昉深く以て恨と爲して終身檣柳を嘗めず、梁に事へて驃騎記室參軍と爲り、専ら文翰を主とる、初め武帝の未だ志を得ざる時、從容として昉に謂て云く我三府に登らは當さに卿を以て記室と爲すへしと、昉も亦帝の騎馬を善くするを以て戯て云く、我若し三事に登らは當さに卿を以て騎兵と爲すへしと、是に至りて昉を引て昔日の言を踐めり、後新安太守と爲りて官に卒す、太常を追贈し、謚して敬子と曰ふ、昉少時、常に五十に滿たざるを恐れしが果して四十九にて卒せり、性交遊を好みて士友を獎進し、其の推譽を得し者は多く



當時に昇擢せられたりと云ふ。

庾肩吾 字は子慎、八歳にて詩を賦す、特に兄於陵に友愛せらる、太宗藩に在る時、厚く文學の士を好み、肩吾等を賞接す、東宮に居り、文德省を開て學士を置くに及び、肩吾等先づ其選に充てられたり、官は度支尙書に登りて卒す。

何遜 字は仲言、東海剡の人なり、弱冠にして秀才に擧げらる、范雲其文を見て、輒ち嗟賞し、因りて忘年の交を結ぶ、沈約も亦其文を愛して、遜に謂て云く、吾卿の詩を讀む毎に、一日三復猶ほ已む能はずと、其名流の爲めに稱せられしこと此の如し、遜文章を以て劉孝綽と並ひに同時に重せらる、世之を何劉と稱す。

(四) 陳

後主 諱は叔賢、字は元秀、小字を漢奴と云ふ、高宗の嫡長子なり、高宗崩して位に即き酒色に荒淫して政事を恤へず、隋師至るに及び遂に執へられて長安に入り、宥せられて且つ厚く給賜せられたり、隋の仁壽四年に洛陽に歿す年五十二。

徐陵 字は孝穆、東海剡の人なり、官は左光祿大夫太子少傅に至る、至徳元年に卒せり、年七十七、少ふして釋教を崇信し、經論多く精解あり、目に青睛あり、時人以て聰慧の相と爲す、陳の業

を創めしより、文檄軍書詔策の類、皆其製する所に係る、然れとも未だ嘗て此を以て物に矜らす、又曾て作者を詆訶せず、其後進の徒に於けるや、接引倦むなく、薦として一代の文宗と爲れり、故に陳の文學を云ふ者、必らず徐庾を稱す。

江總 字は總持、濟南考城の人なり、官は尙書令に至る、卒する時年七十六、性寬和溫裕、善く文を屬す、最も詩を屬くす、後主特に之を愛幸す、總、權宰に當り事務を持せず、但日に後主と後庭に遊宴す、陳暄孔範等十餘人と共に之を狎客と云ふ、是に縶りて國政日に傾き、竟に以て滅ぶるに至る、故に識者多くは總に滿たすと云ふ。

張正見 字は見頤、清河東武城の人なり、幼にして學を好みて清才あり、梁に仕へて彭澤の令と爲る、亂に遭ふて地を匡俗山に避く、陳、禪を受くるに及び、又仕へて、尙書度支郎に至り、太建中に卒す、年四十九。

(五) 北朝

北朝の詞人は、周に於て獨り庾信、王褒を擧ぐ、庾王の外に詞人なきにあらず、魏に於ては溫子昇、高允、齊に於ては魏收の徒ありと雖とも、千卒の力は一將の勇に如かず、今姑らへ闕略に従ふ、隋は一統の號を成せしも、年祚久しからず、詞人も又甚、彬々たりと云ふへからず、今亦便宜



の爲め李延壽が北史の例に倣ふて、北朝の後に附す。

○庾信(周) 字は子山、南陽新野の人なり、幼にして俊邁、群書を博覽し尤も春秋左氏傳に善し身の長け八尺、腰帶十圍、容止頽然として人に過ぐるものあり、父肩吾、梁の太子中庶子と爲り、東海の徐摛、左衛率と爲る、摛か子陵、信と並ひに學士と爲り、父子東宮に出入し、詩文並ひに綺豔なり、故に世號して徐庾の體と爲す、周に仕て官、開府儀同三司に至る、大象の初、疾を以て職を去り、尋て卒す。

王褒(周) 字は子淵、瑯琊臨沂の人なり、志懷沉靜にして風儀あり、善く談笑す、文學を以て庾信と名を一時に齊ふす、宣州刺史を以て官に卒す、年六十四。

煬帝(隋) 諱は廣、小字は阿展、隋の文皇帝の第二子なり、學を好みて文を善くす、性沈深嚴重なり、晩年に及び驕奢荒淫、東西に遊幸して定居あるなく、後遂に弒に遭ふ、作る所の詩文甚多し。

盧思道(隋) 字は子行、范陽の人なり、年十六の時、中山の劉松と云ふ者、碑銘を作り、之を思道に示せしが讀みて解せざる所多かりき、是に於て感激して、戸を閉ち書を読み、數年の間に才學兼著はれ、官は散騎侍郎と爲り、年五十二にて卒せり。

右六朝詞人凡四十五人、皆當時の妙選なり、蓋之を品するに三等の別を以てすへし、其才高く氣純なる者を上と爲し、偏才偏氣相稱はざる者之に次く、若し其才劣り氣弱きに至りては最も下なり、之を以て諸家を律せば、其詩歌文章に於て、亦必ず刃を迎へて之を解くの快あらむ。



## 第五編 唐朝の文學

## 第壹章 總論

唐天下を有つと三百年、文華蔚然として與り、隨て各種の文學燦然として大に觀るべきものあり、中に就て儒學の崇尚せられたると、詩歌文章の流行せしと、及び佛教の延蔓したること等は、最も着目すべきの要點なりとす、殊に詩歌の發達の如きは、古今獨歩とも稱すべく、名流才士彬々として踵を接して輩出し、或は錦心繡腸、風雲月露の眞美を掬する者あり、或は一氣貫通、川流山高の秀色を描く者あり、或は怪龍隱僻を尙ふあり、或は雄渾正大を宗とするありて、一代の文運、直に其盛を周末に比するに足る、然れども彼にありては、唯之を諸子進家の雜出時代と云ふべく、學派異說の競進期と稱すべきのみ、修辭吐屬、天地人文の幽麗を彩色し、鬼工化成の筆を弄して、自然の聲韻を描出し、聲色香味兼完く、所謂美文學的の發達に至ては、蓋當代の獨り前古に超越して、永く來邇を開きし所なり、何となれば、周秦の文學、美文なきにあらざりしも、主とする所は意想にあり、唐の文學、意想に乏しとせざるも、秀つる所は美文にあればなり、然らば則ち唐三百年の文學は、上、周漢を承けて、下、宋明を開きしものと云ふも、亦過言にあらざるべし。

初め太宗武功を以て、隋末の亂を平定し、銳意文學を奨勵し、其の秦王たりし時、既に文學館を開て學術の士を延き、盛に前朝凋殘の遺老碩儒を致し、以て治化を助け、一代の基礎を立てんとしたること、猶ほ我徳川家康の親府を定むるに當り、五山の僧徒を召して、大に學術を興せしか如し、凡一代の猷謀を盡して、後世子孫守るべきの業をなさむには、馬上天下を取り、馬上天下を守るべからず、必ず學術徳業の士を待て、其典章制度を成さるべからず、太宗早く此に見る所あり、是に於て杜如晦、房玄齡、虞世南、褚亮、姚志廉、李玄道、蔡允恭、薛元敬、顏相時、蘇勗、于志寧、蘇世長、薛收、李守素、陸德明、孔穎達、蓋文達、許敬宗等十八人を學士と爲して、十八學士と號し、諷誦洋々として、經術に沈潜せしめ、以て大に雅儒の風を起せり、位に即くに及んで、更に弘文館を置て、古今を討論し、又其身も好んで親ら詩を賦し、文を屬せり、傳云ふ、嘗て宮體詩を作り、虞世南をして廢和せしめしに、世南答て曰く、聖作誠に工なり、然れども其體雅正にあらす、上の好む所、下必ず之より甚しきものあり、恐くは此詩一傳して、天下風靡せむとを、敢て詔を奉せず、後帝又詩一篇を作りて古の興亡を述ぶ、既にして嘆して曰く、鍾子期死して伯牙復た琴を鼓せずと、朕か此詩、將た何の示す所そとて、緒遂良に命して、世南の靈坐に即き、之を焚かしめたりと、夫太宗不世出の英資を以て撥亂反正の功を成し、六朝以來の頽敎を振作し、聽政の餘、



猶能く意を文事に注ぎ、述作する所あれば、名流才士相展和して、一韻一詩、猶且つ之を荷もせざると此の如く、在廷の大臣に於ても、杜如晦、房玄齡、魏徵等の如き、德業勳名、既に一世を蓋ふのみならず、尙又文事の見るべきものあり、寄托興賦して交、献替する所あり、風雲魚水、正に其君臣逢遇の際を想見するに足るへし、貞觀の治、空しからず、李唐三百年の文學、寔に此時に胚胎するにめらすして何ぞや。

然れども、當時大難始めて夷らき、文學の淵源、猶未だ遠からず、文章は猶江左の餘風に沿ひ、絳句繪章、美麗を尚ひ、王勃、楊炯、盧照隣、駱賓王の徒、其文術を握り、稱して四傑と云ふ、中宗の時に至り、天下既に無事にして朝野歡樂多く、宴安の風、隨て起る、其侍臣に敎して卿等詞人と時に詩を賦し宴樂すへければ須らく醉を惜むへからすと云ふに及んで、酒杯益々流行して、詩賦献酬愈盛んに、廻波艶辭、又文字の臣に作くる、是に於て、李嶠、宗楚客、趙彦昭、韋嗣立を大學士と爲して、天の四時に象り、李適、劉憲、崔湜、鄭暗、盧藏用、李义、岑義、劉子玄を學士と爲し薛稷、馬懷素、宋之問、武平一、杜審言、沈佺期、閻朝隱等を直學士と爲し、又徐堅、韋元且等を召して員に満たしめ、八節、十二月に象れり、此輩皆文華を以て幸を取り、當時に欽慕せられたるも、其性情氣質は、直に當時の文學に照映して、頗る輕浮文學の逕路を開けり、且つ此時よりして

脩文館の學士を採るに、重に詩文に堪能なるものを以てせしかば、詩文は益々流行發達して是足の進歩をなしたるにも拘らず、太宗獎勵の經術は、之に壓せられて、漸く衰頹の有様となり、終に後來唐朝文學の特色は、獨り盛詩にのみ存するか如きの觀を呈するに及へり、玄宗亦文學を好み、頗る浮華を厭ひしかば、群臣も亦稍々彫琢を去り、浮氣を馴けて、雄渾に向はむとし、是に於てか張蘇の二家先づ其宗を擅にし、稱して燕許の文章と云ふ、是の時唐興て既に百年、長安の富實、財貨日に幅濶し、四方の交通、月に盛んに、上は王侯の邸宅、池館園囿の壯麗より、下は閭巷戚里、花柳遊冶の態に至る迄、皆一として太平駘蕩の風を見さるはなかりき、凡此の如き時代こそ恰も文學興隆の好機に適合すれ、大小の百家、蔚然として輩出し、皆争ふて家に名あらんと欲し、美才林の如く、風氣の化する所、網蘊醜育、玉振り金鳴る、是に於てか李杜の二家、天放の才を馳せて、分道連蹕、直に騷雅の菁華を發揚せんとし、王維王昌齡、高適岑參の徒、之に羽翼して淋漓傾瀉、其盛を極めたり、折しも天寶の變、大平倉卒の際に起り、都門の焚掠は、現世未だ終らざるに何の地獄ぞ、臺榭池苑の荒廢は、絲竹未だ冷えざるに何の殺風ぞ、是に於てか經籍は馬蹄の塵に没し、文簡は兵士の炊煙と消えて、四庫の典籍、尺簡藏めず、さばかり昌運の文學も、是に一頓挫の觀を呈せしか如きも人心に潜幽せるものは争かでか頓挫を受くへき、興廢盛衰の感、榮枯消長の思は、



却て沈鬱悲壯の韻を出し、憂憤抗壯の辭となりて、亂離の刺衝は、文學上、不用意の好結果を現出せり、恰も是平波萬里の鏡面に向て、錦帆、風を孕み、遠山の眉色、來りて窓に入るもの、忽にして疾颯驟に起り雲海毒を流して魚鼈出沒し、奇險驚怪、交々至れるか如く、其變化跌宕、愈々出て愈奇なるは、蓋前者にあらざして、後者にあるなり、試に諸家の集を把て、之を檢せば、邊愁亂離の慘は寧ろ幾何の好詩料を興へたりしかを見るに難からざるべし、是文學の能く其境を寫すにあらざして、境、能く文學を作ればなり、然らば子美の所謂『感時花濺淚』もの、文學上、千斛の甘露に價すと云ふも、亦何の不可かこれあらんや。

降て太曆元和の際に至り、韓愈主として精鍊勁直の辭を屬して、秦漢の古文を唱道し、柳宗元、之に和して相上下し、八代の衰、勃然として起る、是に於て李翱、孫可之、皇甫湜の徒、其風を聞て起り努めて驥尾に附せんと欲せしも、才氣、其志に稱はず、終に韓柳の堂奥に入ると能はず、唐朝詩人の輩出せし割合には、文家の寥々たりしと、亦驚くに堪へたり、然れども畢竟是韓柳二家の起りしと、中葉以後にありて、沈浸潤化、其人を待ちしもの未だ出でず、而して唐祚亦久しからず、首唱其人ありと雖、遂に殿後の傑を得る能はざりし所以なるへし、之を要するに六朝以來、駢駢綺縟、因襲風を爲し、陸贄の如き、識見、當時に卓越し、學問淵博、一代の名士たりし者と雖、其姿

議論諫の辭、皆時文を以てせしを見れば、如何に其流行の勢力の強大なりしかを知るに足らむ、然るに韓柳二家起るに及て、始めて五百年の荆棘を披て、秦漢の一路に復歸し、因て直に孟荀賈馬の藩籬を攀ぢしもの、洵に命世の傑と云はざるべからず、唐書の所謂『唐之文完全爲一王法』もの、洵に此時にあるなり。

唐朝の儒學、詩歌、文章の概要に略し、此の如し、而して猶ほ此他に最も叙せざるへからざるものあるは、佛教是なり、蓋其傳來は既に之を記せしが如く、遠く漢の時にありて、六朝以來、沙門の來往、經論の翻譯等もこれあり、頗る其盛を極めたるも、李唐一統の後に至りて更に其氣焰を長せしに似たり、何となれば、太宗は儒學を獎勵せしと同時に、佛教をも排斥せざりしのみならず、却て之を助成せり、其三藏玄奘に詔して、經論數百部を新譯せしめたるが如き、大に其流布を促し、且又大に文學上にも影響を及したるものなり、當時一般文學の普及と共に、佛理を談するもの日に多く、其高妙深遠なる玄理は、上流人士の間に愛玩せられて、時月の熟するに隨ひ、其真如實相の理は、胸臆肺腑の間に満ちて、遂に其性情と混融し、或は詩句となり、或は文章と爲りて發露せり、今夫諸家の集中、毎に佛語佛意に富むを見ても、當時の佛教が文學に影響を及ぼせしとの、決して小少ならざるを知るに足るへし、且又沙門に於ても亦偈頌語録の類を作爲し、水花鏡月の文は能く



自然の聲韻を描出して、其言筌、猶且つ以て珍とするに足るものあり、故に吾人は姑く之を稱して唐朝の佛教文學と云はんと欲す、然れども讀者は忘るへからず、其の道とする所は、教理にありて文字は適、以て其影響を考證に求るものなるか故に、若し仔細に之を點檢して、完全なる批評的穿鑿を加へんには、偏師未だ以て勝を當年に制するに足らざるものも、姑らく其趣味姿態の特長を取らば、亦是自ら別派旁流の文學たるを失はざるとを、而して吾人は唐朝か斯く異様の文學を有するを以て、更に其文學を大なりとするなり。

以上列叙せし所のもの、皆是氣運の推移、時世の變遷に應したる結果にして、其原因も亦應さるゝにして足らざるへきも、要するに亦太宗興學獎勵の遺風に出でずと云ふへからず、若し夫れ其詳細なることに至りては、更に各章下に於て之を叙せむ。

### 第二章 唐朝の儒學

既に前章に於て、唐朝諸學術の概要を叙し、併せて王家の獎勵によりて、大に其發達を助けたりしとを論せり、今又更に其儒學を崇宗せしこと、及び之れか消長を叙せざるべからず。

然るに王家は何にか故に儒學を崇宗せしかと云ふに、當時隋末板蕩の餘を承けて、治教頹敗し、綱

紀紊亂せしかは、此際王者の起る者は、必ず先ず紊れたるを理め廢れたるを興して、大に百世經綸の基礎を立てざるべからず、是に於てか高祖の京邑を定むるや、先づ有司に詔して、州縣に學校を置き、周公孔子の廟を國學に立て、歲時に之を祀らしめ、又皇族子孫、及び功臣子弟の爲めには、詔して秘書外省に於て、別に小學を立てしめたり、蓋高祖の意、以爲らく先代の舊章を案し、往聖の遺訓に則り、以て政治を助け、教化を補はむには、必らず儒學を藉らざるべからず、若し逆に取て順に之を守らざれば、前朝の鑑、遠からず、且つ一治一亂は、毎に教化の頹廢如何に歸するものなり、故に儒學を獎勵して、亂階を未萌に杜絶せんには如かして政術上、特に之を利用せしものなり、故に唐書に曰く「儒學者流、本出於司徒之官、可以正君臣明貴賤、美教化移風俗、莫若於此焉、前古哲王咸用儒術之士」と、亦以て其儒術を崇宗せし所以の本意を見るべし。

太宗既に天下を一統し、亦先意を繼ぎ、情を經術に銳にして大に諸般の學を興せり、其秦王たりし時に於て、文學館を開て廣く文學の士を引き、杜如晦、房玄齡等を初めとして、孔穎達、許敬宗の徒に至るまで、十八人を學士となし、與に天下の事を議し、既に位に即て後、又殿左に於て、弘文館を置き、悉く學士を引内れて、宿直交番せしめ、聽政の餘には、即ち與に古今を討議して、前王の成敗せし所以を道ひ、或は夜分に至るとあるも、少しも怠らざりしか如き、最も儒學の意を見



る、而して其著はす所の「帝範」の一書の如きは、尤も其儒學を假りて治術を修飾し、一代の人心を驅りて、直ちに自家の模倣に内れしむるの意を察するに足る、其の建信篇に曰く「設分懸教以術化人」と、又曰く「術以神隱爲妙」と、是果して何等の言ぞや、身は萬乘の天子たれば、化は應に四海に普かるべきに、神隱秘密の術數を挾て、以て萬民を制せんと欲す、是殆んど艸澤姦雄の心事のみ、然れとも書中の金言は、亦以て千歳小人の心事を看破し盡せるものあり、去讒篇に「爭榮華於旦夕、競勢利於市朝、以其諂諛之姿、惡忠賢之在已上、姦邪之志、恐富貴之不我先」と云ふ如き、尤も其の言の犀利痛快、姦邪讒佞の心腸を照寫して、復た遺す所なきを見る、又曰く「砥躬勵行、莫尚於忠言、敗德敗政、莫踰於讒」と、是れ人の上に立つ者、毎ねに親疎耳目の好惡に蔽はれて忠言の耳に入らざるを誠むるものなり、夫姦邪讒佞負欺の徒、相附托して姦を爲し非を遂るも、上にある者、遂に察せず、人心日に離れて、砥躬勵行の士は一去遠引、復た還らず、以て其毒爪牙に遠かるを致す、是邦家の毎に陵夷する所以にして、古今盛衰の理、洵に此中に在りと云ふへし、而して其崇文篇に云ふ所の「功成設樂、治定制禮、禮樂之興、以儒爲本、宏風導俗、莫尚於文、敷教訓人、莫善於學」とは、即ち正さに其儒學に於ける本意を見るべきものにして、王家獎勵の基く所、實に此に在りとす、然らば則ち「帝範」の一書洵に唐朝政治の秘源たると同時に、又其の文學史

上に最關係ある文字なりとす、是の時に當り魏徵虞世南の流、皆德業文辭、並ひ高く、聲名一時に冠たりしと雖も、皆是建國の名臣にして、殊に儒學者を以て之を視るへからず、然るに王家の儒學を崇宗して、之を獎勵せし所以は、意ふに此等諸名臣を標本として、後起の人を待ちしもの似たり、何となれば此等諸士は、少くとも、儒學の一端を實際に應用せし人なればなり、然れども此希望は、果して實際に於て好結果を得たりしや否やは、更に之を政治史に徵せざるへからず。

貞觀六年に詔して周公の祠を罷めて更に孔子を以て先聖と爲し顔子を先師と爲し、盡く天下の惇師碩徳を召して、學官と爲せり、又學舍を廣むると千二百區、更に書算の二學を置いて、學生の定員を増し、其員數大抵三千二百人に至る、而して諸生の能く一經に通ずるものは、官吏に登用せらるゝとを得たりしかば、四方の俊秀、書策を挾みて京師に集るもの甚衆く、文治炳然として勃興し、新羅、高昌、百濟、吐蕃、高麗等の諸國より來學する者あり、其講筵に登る者、凡八千餘人に及へりと云ふ、此の如くなりしかば隨て又各種の著述出來して其數甚夥く、中に就ても儒學上に關係あるものは(一)顏師古に詔して五經の繆闕を讎正して天下に頒示せしと(二)孔穎達等に詔して、五經の義疏を撰定せしめたること、等にして、此等は實に當時に於ける儒學上の一事業たりしと同時に、儒學か如何に當時に崇宗せられたるかを想見するに足るべきものなり、而して唐朝に於ける儒



學の最盛時代も、亦洵に此時に在りとす。

高宗位を嗣ぎ、吏事を尙ふに及んで、政教漸く衰へ、儒術日に薄く、武后制を稱して、權變に於るに及んで、經術遂に大に壞る、是に由て諸生復た經を以て意となさず、博士、助教の如き唯學官の名ありて其實なく、此間の歲月、僅に二十餘年に過ぎざれども、學教の頓に墮廢せしこと驚くに堪へたり、是時に當り、一方に於ては、詞章漸く盛にして、頼りて以て僥倖仕進を苟偷するの階口となし、竟に儒學を壓倒して之に代りしものは詩歌文章に在りとす、玄宗亦儒學を好みて集賢院を置き、博く群書を彙集して、始めて經史子集の四部に分類し、其の著録せるもの、五萬三千九百一十五卷の多きに至りしも、始めありて終なく、祿山の亂に萬有遂に一炬となりて復た言ふに足るものなし、故に若し時代を以て唐朝の文學を序別せんには、高宗以前を以て儒學時代と爲し、以後を以て詞章時代と爲さるへからず。

今試に文學上に於ける唐朝儒學の性質傾向を尋んに、其の所謂儒學なるものは、蓋經籍の訓詁解釋を主とせしものにして、顏師古、孔穎達の徒の如き、其心力を竭して經營從事せしものは、只此一間に在りとす、是固より漢魏の後を襲て直に焚書以前の儒學を窺はむとするには、亦已むを得ず此の如くならざるへからずと雖、汲々として白首、竟に訓詁の間に埋没して自ら覺らず、一代の儒學

亦隨て精采の處を見ざりしは其弊とや云はむ、然れども其訓詁註解は、後世の所謂漢唐考據の學の由て基く所にして、假令ひ古人の範圍を脱出して曾て自家の新學說を成すと能はざりしにもせよ、又其訓詁なるものも亦多少の紕繆牽強なきにあらざりしにもせよ、其の當時に在りて大に學者を裨益したりしのみならず、後世の爲めにも考古の好材料を貽せしこと輕少にあらす、尙其他にも當時儒者の手に成りしもの甚多く、開元年間の著録に據るに、唐朝學者の自ら爲りし書數は、二萬八千四百六十九卷に上れりと云ふ、然れども多くは詩歌文辭、訓詁註釋の類にして、間、一家の說を爲す者あるも、亦五行陰陽の範圍を出てす、要するに一般の學風は、訓詁註釋、古を考へて經旨を闡明すると云ふに過ぎずして、曾て自家の所見を開て、一派の新學說を成す等の事なく、當時龍蛇始て定り、諸般創業の際なるにも似す、儒學のみ獨り守成の地に立ちて、古人の死句を檢し、廢章を數へて、便ち便々として儒者と稱せしと、亦是非もなき次第なりとす、今左に著名の儒學者、二三の傳を立つ。

陸元朗 字は德明、蘇州の人なり、名理の言を善くし學を周弘正に受く、陳後主、太子たりし時名儒を集めて入講せしむ、德明始て冠して下坐に與る、國子祭酒徐孝克、貴に倚り辯を縦にし、衆多く之に下る、獨り德明、申答して屢、其說を奪ふ、陳亡ひて郷に歸る、隋の煬帝、秘書學士に擢



て國子助教に遷す、王世充號を僭し、子玄恕の爲めに德明を以て師と爲し、其廬に即て東脩の禮を行ふ、德明これを耻ち、巴豆劑を服して東壁の下に假臥す、玄恕入て拜するに及び、之に對し遺利して復た口を開かず、世充平らくに及び、秦王辟して文學館學士と爲す、貞觀の始、國子博士に拜し、吳縣男に封す、尋て卒す、撰著する所、經典釋文三十卷、老子疏十五卷、易疏二十卷ありと云ふ。

**顔師古** 字は籀、京兆萬年の人、父思魯、儒學を以て顯る、師古少ふして博覽善く文を屬す、太宗位に即き、中書侍郎に拜し琅邪縣男に封す、帝嘗て五經の聖を云ると遠く、傳習寔に訛るとを歎し、師古に詔して秘書省に於て之を考定せしめて釐正する所多く、定めし所の書を天下に頒ちしかは學者之に頼れり、秘書少監に拜せられて専ら讎校刊正の任に當る、時に故あり頻りに讎を被り、罔然沮喪し、乃ち門を闔ち賓客を謝して、放情蕭散、林墟の適を爲す、太子の爲めに漢書を註して之を上る、時人班孟堅の忠臣と云ふ、後秘書監弘文館學士に遷る、卒する時年六十五。

**孔穎達** 字は中達、冀州衡水の人、八歳にして學に就き日に千餘言を誦記し三禮義宗を闡記す、長するに及て、服氏春秋傳、鄭氏尙書、詩、禮記、王氏易等に明かなり、又善く文を屬し步曆に通す、隋の煬帝、天下の儒官を召して東都に集め、國子秘書學士に詔して、與に論議せしむ、穎達年

最少く、老師宿儒、其下に出るを耻ち、陰に客を遣て之を刺さしめしが楊玄感の家に匿れて免る、とを得たり、太宗洛を平らけて後、文學館學士を授け、國子博士に遷され、數、忠言を進む、後子爵に封し祭酒に拜す、帝大學に幸して釋菜を觀、穎達に命じて經を講せしむ、畢て釋奠頌を上りしかは、詔して之を褒美す、後致仕して卒す、初め穎達、顔師古、司馬才章、王恭、王琰と詔を受け、て五經正義を撰し、頗る詳博となす、然れとも其中謬冗なき能はず、後尙書左僕射于志寧、右僕射張行成、侍中高季輔等増損を加へて其書始て布下せらる、而して後世學者大に之に頼りて裨益を得ると云ふ。

### 第三章 唐朝の詩

#### 第一節 唐詩の概説

唐朝詩を以て人材を登用して、詩人雲の如くに起る、是に於てか懷忠思君、征旅羈情より、鳥語虫音、花紅柳暗の光景に至るまで、一に詩に入り吟に上らざるものなく、其人物は甚著名ならざるも亦詩を善くする者多く、唐一代の文學中、其最も發達せしものは、寔に詩歌の法門に在りとす、後世批評家、其詩人を別次して、初唐、盛唐、中唐、晚唐の四となし、唐初より玄宗開元の初に至る



凡百餘年間を以て初唐と爲し、開元より代宗太暦の初に至る凡五十餘年間を以て盛唐と稱し、太暦より文宗の大和年間に至る凡七十餘年間を中唐と號し、又唐末に至る凡八十餘年間を稱して晚唐と云へり、然れとも其人或は初唐より盛唐に亘る者あり、或は中唐より晚唐に入る者ありて、劃然たる區域を立つると能はず、抑、唐詩に初盛中晩の區別を爲すは、頗る是非の論、紛然たる所なれども、一代詩風の消長變遷を窺ふには甚便利なるに似たれば、今猶ほ之に因りて、聊、其梗概を見さむと欲す、然れとも讀者は忘るへからず、皆是れ一貫の時代にして、其區別は、共に大槩を擧るものなるを。

既に前章に於て叙述したるが如く、太宗儒學を崇宗して、文章を獎勵し、之か爲め諸般の藝術、蔚然として勃興し、淵涵淳蓄、一代の文運、全く太宗の世に淵源せしに相違なきも、其意、固より經術を以て政度を助るに在りて未だ文學を以て世道を輔弼せんとするにあらず、故に當時作家に乏しからざりしも、猶多くは江左の餘風に浸染して、風氣未だ絢爛なると能はず、魏徵、虞世南諸公の詩、希微玄澹の音多く、王勃、楊炯、盧照隣、駱賓王等に至りて、稍、美麗を加ふと雖、猶是未だ舊習を蟬脱すると能はず、所謂初唐四傑の躰なるもの、以て其氣格を見るに足るべし、陳子昂出ると及ひ始めて能く徐庾鮑麗の躰を一掃して變して雅正に入らしめ、以て大に從來の氣格を變せり、

後に張九齡の感遇十二首、李太白の古風五十九首等出つるに至りしは子昂先づ其前を開けはなり、中宗の時に至り、重に詩文を善くする者を以て、修文館學士を採用し、毎に天子の遊宴に侍して、詩を賦し詞を屬して、其興を助けしめたり、是に於て天子蹕を離宮に駐め、箏を芳苑に鳴す毎に、文字の臣、從て屬和せざるなく、當時世人の欽慕する所たりしも、此輩多くは、狎狠佻佻、宗之間沈餘期の流の如き、特に甚しきものにして、其詩益々名ありて、其人愈々他の稱なし、然れども、詩律の變、亦此時に生ぜり、初め梁の時に沈約鮑照等音韻を以て相婉附し、屬對精緻なりしもの、沈宗に及て又靡麗を加へ、専ら意を對偶平仄の間に用ひ、法律精巧、錦繡文を成し、稱して近躰と云ふ、是古今詩律の一變なり、而して初唐の風氣、此に至りて漸く盛なりとす、開元天寶の際に至りて、高適、岑參の徒、先づ初唐の氣格を變して、悲壯雄渾の一派を開き、李杜の二家起て、白雲卷舒、頓挫激昂、短篇長律、境兼ねざるなく、太白の飄逸、子美の沈鬱、共に騷雅に原本して、才氣、之を驅り、唐詩の完美、既に大成す、此時に當り、大小の名家輩出して、恰も百花の三春に綻ぶか如く、桃李の豔容、梅花の高潔、牡丹、芍藥、馥郁爛熳として相屬し、文質彬々、鋪張排叙、既に其盛を極めたり、世の所謂盛唐とは、實に此時を稱するものなり。

夫盛極るものは必ず變す、是に於てか、中唐の作家は、意を擡て精を取り、言を選て勝を取らむと



欲せり、而して其弊や彫刻太過の病あるを知らず、太暦貞元の際には、韋應物の雅淡、錢起の清曠ありて稍、盛と稱す、下りて永貞元和の際に至り、韓愈の豪傑自ら命し、學問才力を以て李杜の上に誇越せんと欲するありて、其詩奇險近くへからず、柳子厚の温屬靖深なるは韋應物と伯仲の間にありて、其源蓋淵明に出づ、白居易、元稹は率易を旨として音韻亦相似たり、其他劉禹錫、孟郊、賈島の徒の如き、皆是中唐の作家たり、晚唐諸家の詩は、専ら好意を主として聲格を調せず、杜牧の豪縱、李商隱の隱僻、温庭筠の綺麗、共に是晚唐一時の選たり、其他紅女宮闈の流に於ても、能詩の概るべきものあり、其才名尤も喧しき者を舉れば、李季蘭、徐賢妃、花蕊夫人、崔鶯々、魚玄機等の如き、皆能く華藻に富み、或は幸を離宮に望み、或は寵を後掖に妬み、花雨愁月、幽怨を素翰に寫し、或は從軍萬里、寒閨孤棲して、落葉秋緒を悲み、或は情人遠く去りて、水波音書絶へて關山飛魂の情を裁する者あり、亦以て其盛を稱するに足るへし、猶是我平安朝に女流の詞才多かりしか如く、要するに時勢風氣の化する所、此翠帳紅圍の流を驅りて、其盛を致さしめたるなり、唐一代の作者、其最も翹楚と稱すべきものを數ふれば、概ね是の如し、而して詩風の變、亦自ら此間に存す、若夫大小の作家を數ふれば、其幾百なるを知るへからず、詩律幾變して詞源も亦既に竭きたり、故に後世詩を論ずる者皆法を此に取る。

今夫唐詩を以て漢魏六朝の詩に比較せむに、漢魏は質、文に勝ち、六朝は文、質に勝つ、而して其文質彬彬たるものは唐詩なりと、古人も既に之を云へり、蓋漢魏は猶我萬葉時代の和歌の如く、而して唐は則ち古今の歌なり、萬葉の和歌は質を以て勝ち、而して古今は華を以て長所を見る、然れども、其文華婉麗の中に、又自ら雄壯活潑なる氣風の嚴存するものあるは、古今の或は萬葉に怨する所にして、唐詩の文質華實、並ひ兼る所は、亦或は漢魏を凌ぐに足るへし、古人又云ふ『南朝尚詞、而病於理、宋人尚理、而病意興、唐人尚意興、而理在其中』と、是唐詩の貴しと爲す所なり、嚴滄溟嘗て盛唐諸家の詩を以て、透徹の禪と評せり、今夫中晚の詩も、饒令透徹の禪とするに足らずとするも、豈亦些箇の善境界なきものならむや、之を要するに、初唐には自ら初唐の好處あり、中晚にも亦自ら中晚の好處あり、決して之を輕視すべきにあらざるなり、唯三百年の詩運、能く幾百の作家を出して其光采を發揚せしもの、其原因果して何くにか在る、曰く利祿聲譽の在る所勸めずして自ら聚る、況むや上の好む所、應て之を致せるに於てをや、然らば一詩能く爵祿を釣るべく、一吟猶得て名聲を馳するに足る、月桂攀し難からず、誰か清輝を揚ぐるを欲せざらむや、唐朝聲詩の盛、豈亦偶然ならむや、今左に著名の詩人を列擧し、更に其中に就き、十餘人の小傳を立て以て其梗概を見すへし。



虞世南	魏徵	王統	褚遂良	上官儀	李義府	許敬宗
王勃	楊炯	盧照隣	駱賓王	陳子昂	劉希夷	蘇味道
崔融	沈佺期	宋之問	李嶠	李適	杜審言	賈曾
張說	蘇頌	張若虛	韋嗣立	賀知章	王翰	武平一
李邕	張九齡	孫奭	劉春虛	玄宗皇帝	王灣	孟浩然
王之渙	王昌齡	崔顥	高適	岑參	王維	崔颢
崔國輔	邱為	儲光羲	李頎	薛據	李白	杜甫
張巡	張旭	李華	賈至	嚴武	元結	張謂
常建	劉長卿	孟雲卿	韋應物	皇甫冉	皇甫曾	錢起
耶士元	韓翃	李端	盧綸	司空曙	張翥	張繼
裴度	顧况	戴叔倫	孟郊	武元衡	李賀	韓愈
柳宗元	李益	權德輿	羊士騫	盧全	元稹	王涯
白居易	施肩吾	劉禹錫	賈島	歐陽詹	王建	楊巨源
張仲素	竇滂	李涉	李約	令狐楚	李季蘭	馬戴
李商隱	杜牧	溫庭筠	許渾	雍陶	盧翹	唐彥謙
薛逢	趙嘏	殷成式	張翥	李群玉	陸龜蒙	皮日休
鄭谷	羅隱	司空圖	杜荀鶴	韓偓	章莊	釋浩然

第二節 初唐諸家

(一) 初唐四傑

王勃 字は子安、絳州龍門の人、隋末の鴻儒王通の諸孫なり、唐書本傳に、其の六歳の時に文辭

を善くせしことを云へば、意ふに其幼時の教育は、必らず家庭の間に於ける祖父以來の遺風に涵泳せしならむ、且つ又學才の遺傳も亦必ず之を先天に稟けしもの多かりしなるへし、又其九歳の時には、顔師古の註せし漢書を讀みて、其疵瑕を摘發せりと云へば、其眼光も亦決して凡庸ならざりしを見るに足るへし、此兒童は此の如くにして成長せり、而して如何なる方便を以て其知己を得たりしや、幽谷を出て、喬木に遷るは、讀書兒の毎に苦心する所なり、然るに此才漢は容易に知己を得たりしなり、麟徳の初めに劉祥道なる者、關内を巡行せしに、此時早くも此才漢は、此人に向て己の文氣を發露し、以て己の才名を傳らむと欲するの一路を案せり、是に於て直に一書を上りて自ら陳せしかば、祥道は直ちに其才を朝に表して、試験出身の地を與へたり、而して年齒未だ冠するに及はざるに朝散郎を授けらる、是より數、頌を關下に上りて才名漸く聞ゆ、沛王其名を聞き、召して府の修撰となせり、是の時諸王間に闘鷄流行しければ、勃戯に文を爲りて英王の鷄に傲せしが、此傲文端なくも高宗に聞知せられて、其怒に觸れ、是交構の漸なりとて、遂に斥出せられたり、夫舟人は水に死す、勃は自家の長技を以て失敗せり、是より劍南に客寓して、山に登り野を望み、慨然として情懷を詩賦に寫せり、然れとも此才氣漢、争かてか永く閑散放浪の身たるに安んし得んや後に遂に虢州參軍に補せらるゝを得たるも、才に倚りて驕傲なりしかば、忽ち僚吏に嫉惡せられて



死罪に處せられんとせしが、幸に赦されて名を除かれたり、父福時は坐せられて雍州司功參軍より交趾令に左遷せらる、上元二年往て父に省せんとして道に鐘陵に出つ、時に都督閻伯瓊、新に滕王閣を修め成し、九月九日大に賓客を會し、又豫め其婿に命じて序を作り、以て客に誇らむとし、因て紙筆を出して徧く客に請ひしも、敢えて一人として進て之に當る者なし、此時勃は末座に在りて年最も少かりしが慨然として之に應じて辭せさりしかは、都督怒て起ち、竊に吏を遣りて其文を窺はしめしに、報語一再、益、奇なり、乃要然として曰く天才なりと、請ふて遂に文を成さしむ、滿座大に驚く、乃ち贈るに百緞を以てす、酒酣にして即ち帆を擧て去る、舟洋海に入りて水に墮て死す時に年二十九。

勃は文を屬するに初め精思せず、先つ墨數升を磨したる後に酣飲して被を引き而を覆て臥し、寤るに及び直に筆を援り篇を成して、一字を易えず、時人之を腹藁と云へりと、性尤も著書を喜む、祖父通、嘗て漢魏より晋を盡して書百二十篇を作り、以て古尚書に續きしに、後逸亡して、其目存するも其書無きもの十篇ありしかは、勃之を補作して二十五篇を定む、勃又推歩曆算に精しく、嘗て大唐千歲曆を作り、五行を以て曆數に配す、後崔昌なる者あり、勃か舊説を采りて、五行應運曆を上る、著す所の詩文甚多く、尤も詩賦に工なり、楊炯、盧照隣、駱賓王と併稱して初唐の四傑と云ふ、而して、勃の名之に冠たり。

楊炯 是華陰の人なり、幼にして聰敏、善く文を屬す、神童に擧けられて校書郎を授けられ、崇文館學士と爲る、儀鳳中、太常博士蘇知幾上表して公卿以下の冕服に別に節文を立んとを請ひしかは、乃ち有司に下して之を議せしむ、炯議を獻して其非を論す、事理明晰にして筆路雄厚なり、是に由て竟に知幾の請ふ所を寢む、既にして詹事司直に遷り、又俄にして從父弟の故に坐し、出されて梓州司法參軍と爲り、竟に盈川令と爲る、張說箴を作りて之に贈り、以て其苛酷を戒しむ、官に至り果して酷を以て聞ふ、其政を爲すに、意の如くならざる人吏あれば、輒ち之を榜殺し、頗る人の怨望を致せり、夫天言はされとも猶ほ能く玄機あり、人の怨府となる者、豈能く久しからむや、幾くもなく官に卒す、嘗て如意元年七月望、宮中孟蘭盆を出して佛寺に分送せし時、則天、洛の南門より百寮と之を觀て愉色あり、炯、孟蘭盆賦を作りて之を獻す、詞甚雅麗なり、當時文詞を以て王勃、盧照隣、駱賓王と其名を齊ふし、天下稱して王、楊、盧、駱と云ふ、炯之を聞き、心平ならず、人に謂て曰く、吾、廬の前にあるを愧ち、王の後に居るを耻つと、意ふに炯の人と爲り、氣を下すと能はず、強て子安と文名を競はむと欲するもの、如し、何ぞ知らむ、櫻桃梅李、世自ら定評あるを、古來文士の陋、概ね此の如し、是終に其文士にして已む所以か。



盧照麟 字は昇之、幽州范陽の人なり、十歳にして曹憲王義方に就て蒼雅を授かる、博學にして文を善くす、初め鄧王府典籤と爲る、王甚之を愛重し、曾て人に謂て曰く、此即ち寡人が相如なりと、後新都尉に拜せられしも風疾に感染するに因て官を去て太白山中に處り服餌を以て事と爲す、父の喪に會ひ、號慟して丹を嘔き出せり、是より疾益甚し、乃ち具茨山下に去て、園數十畝を買ひ、潁水を疏して舍を周らし、復た豫め墓を爲りて、其中に偃臥す、自ら以爲らく、高宗の時に當り吏を尙へば己は獨り儒なり、武后法を尙へば己は獨り黄老なり、嵩山を封して屢、賢士を聘すれば己は己に廢人たりきと、五悲文(一悲才難、二悲窮道、三悲昔、四悲今日、五悲人生)を作りて自ら明にす、手足拘攣して起行せざること十餘年、春歸り秋至る毎に、雲壑煙郊、嘯ち興して戶庭を出て、悠然として一望す、遂に自ら傷て、釋疾文を作て『覆轍雖廣、嗟不容乎此生、亭育雖繁、恩已絕乎斯代』と云ふ、病むと既に久しく、沈痼變癢、其苦に堪えず、遂に親屬と訣別して、自ら潁水に投して死す、時に年四十、著はす所の詩文、頗る騷人の風あり、文士の爲めに重せらる、意ふに照隣の人と爲り、清狷にして厭世の質に富めり、且つ其經歷境遇は、疑もなく益、此人を驅りて厭世の極に達せしめたるならむ、故に其詩文に映照せし所も、亦偏に悲楚愁傷の韻多く、山花野煙、共に意中の厭世悲愁たらざるはなく、又其吏を尙ふ時に己獨り儒、法を尙ふ時に己獨り黄老と

云ふか如きは、此人の獨り餘子の上に超出する所にして、正さに以て其清狷の士たるを想見するに足る、唯其清狷の士たか故に、渾身厭世の犠牲と爲りて顧みず、蓋其不幸洵に哀むに堪へたりと雖も、此娑婆なるもの固より三界無安の火宅なれば、出づるも亦太た惜しからざるべし、古來詩人の生活、之に類するもの甚多し、蓋詩人は、毎に又究人たるべければなり。

駱賓王 は婺州義烏の人なり、七歳能く詩を賦す、尤も五言に妙なり、嘗て帝京篇を作る、當時以て絶唱となす、高宗の末に長安主簿と爲る、武后の時、數、上疏して事を言ひ臨海丞に貶せられ怏々として志を得ず官を棄て去る、徐敬業の亂に賓王を署して府屬と爲す、乃ち敬業の爲めに檄を作りて天下に傳へ以て武后の罪を暴斥す、后之を讀て但嬉笑せしか『一杯之土未乾、六尺孤安在』と云ふに至り翌然として曰く、誰か之を爲ると、或人賓王と答ふ、后曰く此の如きの才ありて用ひざりしは宰相の過なりと、敗るゝに及び亡命して之く所を知らず、後に宋之問、錢塘に於て靈隱寺に遊び、夜月長廊の下に行吟して曰く『鶯嶺鬱岩曉、龍宮隱寂寥』と云ひ未だ下聯を得ず、老僧の燈を燃して坐禪する者あり、問て曰く少年寐すして吟賦甚苦むは何ぞや、之問曰く此寺に題せんと欲して未だ思想纏らすと、僧咲て曰く何ぞ『樓觀滄海月、門外浙江潮』と道はさると、之問遂に篇を成せり、而して僧の一聯、實に篇中の警策たり、天明に及ひ之を訪へば己に見へす、此僧は即ち



駱賓王なり、傳へ云ふ、海に浮て去ると、中宗の時、詔して其文を求め、鄒雲卿に命じて、之を次序せしめたり。

四傑の略傳、其知るべきもの略、此の如し、其人物性行の一斑も、亦此に由て窺ふとを得へし、聞く當時裴行儉なる者あり、人を知るの鑒ありと稱す、嘗て四傑を評して曰く、士の遠を致すは、器識を先にして文藝を後にす、勃等文才あるも浮淺なり、豈爵祿の器ならんや、楊子稍、沈靜、應に令長に至るへし、餘は終を令くすることを得は幸なりと、然るに不幸にも此豫言は的中せり、然れとも楊炯を沈靜なりと云ひしは果して如何にや、意ふに炯の人と爲りは苛察荆棘、頗る殘忍の心を藏せしにはあらざるか、否らされは張説の箴、何の用かある、王勃は高才倨傲なりしと雖、嘗て人の子たる者は亦醫を知らざるへからすと云て艸を號州に求めたるか如き、又父に交趾に省せしか如き、其一念の發する所を見るに優雅温厚、楊炯と同日の論にあらざるに似たり、盧の性行は餘子の企及ふ能はざる所、父の喪に會ひ號慟して丹を嘔く、只是一事以て其人と爲りを知るに足るべく其の『優々群品、逸々衆人、雖醫其竅、未知其身來從何道、去止何津、誰爲其業、誰作其因、一翻一覆兮如掌、一生一死兮若輪』と云ふか如きに至ては、必ず應に生死事大の際に於て恍然たるものありしなるへし、若夫貧病究苦は其の所謂『高明者、鬼瞰其門、正直者、人怨其筆』ものにし

て其天品の高、き其性行の正しき、畢竟世途の窮ありし所以なるへし、特に其文筆の崢嶸たる、詩思の幽玄なる、最も窮鬼の巢を爲す所、若し照隣をして庸才凡人ならしめたらむには、亦必らず世波と上下して俗紛を樂み、豚の如くに肥え狗の如くに走りて、會て世語の何たるを解せざりしこと亦疑ふへからず、駱賓王の事蹟は甚明ならずと雖、是亦事功を思ふの人なりしなるへし、英雄首を回せば皆神仙たらは、靈隱寺の事、亦以て其人の遺影を認むへし。

之を要するに共に皆一時の文傑にて所謂四傑の名空しからず、其文江左の餘風に沿ふと雖、雄麗恢宏、復た前朝の韻にあらず、其所謂古體は多く四語一轉、蟬聯して下り、琅々として誦すへし、當時崔融、張説等其文を重んず、融曰『王勃文章、宏逸有絕塵之跡、固非常流所及』説曰『楊盈川文思如懸河注水、酌之不竭』と、當時に寶愛せられたると此の如し、陸時雍曰く『王勃高華、楊炯雄厚、照隣清藻、賓王坦易、子安其最傑乎、調入初唐時、帶六朝錦色』と、而して其慣用の癖所を擧れば、盈川は好て古人の姓名を連用し、賓王は好て數を以て對と爲せしこと是なり、故に當時の人楊を黥鬼簿と呼び駱を算博士と稱せりとと、又其作を對照すれば、甚相肖似するものあり、

九月九日眺山川、歸心歸寂秋風、他鄉共酌金花酒、萬里同悲鴻雁天(盧照隣九月九日旅暹)

九月九日望鄉臺、他席他鄉送客杯、人情已厭南中苦、鴻雁那從北地來(王勃蜀中九日)

今其作の孰れか前後なるを知らず、又其摸倣に出してものなるや、又或は偶合に係るや否やを知ら



すと雖も、僅々二十八字の中に於て、消息甚近き、此の如きものあるは頗る一奇と云ふべし。又諸家の作、盛んに洛陽繁華の形勢を叙し、王侯の亭榭樓閣、豪貴宴儔、遊冶の能を述べて、連韻數百言に至るものあり、是正さに當時の一流行にして、其原因は蓋六朝繁華の夢、猶ほ心目に恍惚として存し、其藻葩詞音、現に眼前に疊積すれとも、千幅萬賦、亦較、陳腐に屬するの思あり、是に於てか更に長篇の七古を以て、當時都門の繁盛、池館園榭の駢香を描出せんとを力めたるものなり、此の如く、七古長篇の作、漸く盛なるに及び、彼の六朝以來、因襲せし詞賦は、隨て漸く衰ふるに至れり、亦是唐朝詩變の基く所にして、適、盛唐諸家の爲め、先づ其新局面を開きしものに似たり、若し其優劣を論すれば、王勃先づ之か冠首たらざるへからず、楊炯は粗氣橫生、好て勃と其優劣を較せむと欲すと雖、恐くは文品却て昭隣の下にあるへし、當時既に王楊盧駱の目ありて、聲價定ること久しと雖、試に四傑の集を把て賞味一番せむ者は、亦或は吾人と其見を同ふして王盧と稱するの却て當るを思はむ、今左に王勃の滕王閣一篇を掲出す、盧の長安古意、駱の帝京篇の如き俱に其集中の傑作に屬して、人口に脍炙すること既に久しけれとも、姑らく省略に従ふ。

滕王閣并序

南昌故郡、洪都新府、星分翼轸、地接衡廬、襟三江而帶五湖、控蠻荆而引瓊越、物華天寶、龍光射斗牛之墟、人傑地靈、徐孺下陳蕃之榻、雄州霧列、俊彩星馳、臺隍枕夷夏之交、賓主盡東南之美、都督閻公之雅望、棨戟遙臨、宇文新州之麗範、鸞雛暫駐、十

旬休暇、勝友如雲、千里逢迎、高朋滿座、騰蛟起鳳、孟學士之蘭宗、紫電清霜、王將軍之武庫、家君作宰、路出名區、童子何知、躬逢勝饌、時維九月、序屬三秋、潦水盡而寒潭清、煙光淡而暮山紫、層巒聳於上陸、初風景於崇阿、臨帝子之長洲、得仙人之羽館、層巒聳翠、上山重霄、飛閣流丹、下臨無地、鶴汀鳧渚、窮島嶼之繁迴、桂殿蘭宮、列岡巒之體勢、披瀾園、俯雕甍、山原曠其盈視、川澤時其駭颯、園圃揆地、鏡鳴鼎食之家、柯樾迷津、背雀黃龍之軸、虹銷雨霽、彩徹雲衢、落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色、漁舟唱晚、響窮彭蠡之濱、雁陳驚寒、聲斷衡陽之浦、遙吟俯暢、逸興遄飛、爽籟發而清風生、纖歌澹而白雲遏、睢園綠竹、氣凌彭澤之樽、鄒水朱華、光照臨川之筆、四美具、二難并、窮睇眄於中天、極纒遊於暇日、天高地迥、覺宇宙之無窮、興盡悲來、識盈虛之有數、望長安於日下、指吳會於雲間、地勢極而南溟深、天柱高而北辰遠、關山難越、誰悲失路之人、萍水相逢、盡是他鄉之客、懷帝閔而不乏、奉宣室以何年、嗚呼時運不齊、命途多舛、馮唐易老、李廣難封、屈賈於長沙、非無聖主、竄梁鴻於海曲、豈乞明時、所賴君子安貧、達人知命、老當益壯、寧知白首之心、窮且益堅、不墜青雲之志、酌貧泉而覽爽、處涸轍以猶懼、北海雖賒、扶搖可接、東隅已逝、桑榆非晚、孟嘗高潔、空懷報國之心、阮籍猖狂、豈效窮途之哭、勃三尺微命、一介書生、無路請纜、等終軍之弱冠、有懷投筆、慕宗政之長風、舍管仲於百齡、奉長於萬里、非謝家之寶樹、接孟氏之芳鄰、他日趨庭、叨陪鯉對、今晨捧袂、喜託龍門、楊意不逢、撫凌雲而自惜、鍾期既遇、奏流水以何慙、嗚呼勝地不常、盛筵難再、蘭亭已矣、梓澤丘墟、臨別贈言、幸承恩於後饋、登高仰賦、是所望於群公、敢竭鄙誠、恭疏短引、一言均賦、四韻俱成、滕王高閣臨江濤、佩玉鳴鑾罷歌舞、畫棟朝飛南浦雪、朱簾暮捲西山雨、閑雲潭影日悠悠、物換星移幾度秋、閣中帝子今何在、檻外長江空自流。

(二) 陳子昂、張九齡

陳子昂 字は伯玉、梓州射洪の人なり、家世、富豪、年十八に及ふまで未だ書を知らず、任侠、才を使ふ、後感悔して州の東南なる金華觀に於て、苦節、書を讀み、黃老易象に耽る、尤も善く文を屬す、京師に入り、未だ人に知られず、胡琴を賣る者あり、價百萬と稱す、豪貴傳視して辨するも



のなし、子昂衆を排して突出し、左右を顧み、千縉を以て之を市ふ、衆驚き問ふ、答て曰く、余此樂を善くす、皆曰く聞くことを得へきやと、曰く明日正さに某所に集るへしと、衆期の如く諧に往けは、即ち酒肴を具して胡琴を前に置き、發し畢りて、琴を捧て曰く、蜀人陳子昂、文百軸あり、馳せて京畿に至りしも塵土に碌々として人に知られず、此樂は賤工の役のみ、豈に宜く心を留むへけむやと、舉て之を碎き、其文を以て遍く會者に贈る、一日の内に、聲華都門に溢る、進士に舉けられ右拾遺に拜し、數、上疏して事を陳す、詞皆典美なり、武攸宜、軍を統へ、北、契丹を討つに當り子昂を以て書記となし、軍中の文翰、皆之に委ぬ、會、子昂の父、郷に在りて、縣令殷簡の爲めに辱めらる、子昂之を聞き、遽に郷里に還り、父の喪に會ひ、廬塚に次す、殷簡固より貪殘にして人心なし、其富を聞き詐を造て子昂を誣ひ、賂二十萬縉を協取し、猶之を薄しとして、收て獄に繋く、子昂自ら箠し驚て曰く、天命祐けず、吾殆んと窮するかと、果して獄中に死す、年四十三、子昂狀貌柔雅、性褊躁にして財を輕んし施を好み、尤も朋友の義に篤し、文詞宏麗、甚當時に重せらる、唐興て文學は猶ほ徐庾の餘風を承け、豔麗の味、未だ一掃せず、顯慶、龍朔の間、幾んど五言古詩なし、子昂の感遇三十八首出るに及て、俳優を掃て憂哲を追ひ、始めて變して雅正に趨く京兆司功、王適見て驚て曰く、此子必ず海内の文宗と爲らむと、之に繼て張九齡、李太白起りて、

風裁各異ると雖、復古果して三家に成れり、故に沉德潛も亦云ふ「唐中能復古者、以三家爲最」と、然らば子昂の文壇に於ける位地も以て傑見すへきなり、蓋子昂の意、固より風雅の久しく絶へて、靡麗豔冶の韻、流行するを嘆し、力めて之を一掃せんと欲したりしなり、其自言に曰く「文章道弊五百年矣、漢魏風骨、晉宋莫傳、然而文獻有可徵者、僕嘗暇時觀齊梁間詩、彩麗競繁、而興寄都絕、每以永歎思古人、常恐逶迤頹靡、風雅不作、以耿々也」と、此を見るときは、子昂の志を樂見するに餘あるへし、然して子昂は饒令其志を十分に成し遂ること能はざりしにもせよ、張九齡、李太白等の知音を得て、復古の實を擧るとを得たり。

張九齡 は字を子壽と云ふ、曲江の人にて、官は開元中に平章事に至り、賢相の稱ありき、論者云ふ「唐初五言古、漸趨於律、風格未適、子昂起衰、而詩品始正、曲江繼續、而詩品乃醇」と、今左に其作例を掲ぐ。

林居病時久、水木澗孤清、閒臥觀物化、悠然念無生、昔昔始萌達、米火已滿盈、徂落方自此、感歎何時平（陳子昂感遇）

關塞春殘裏、桂華秋皎潔、欣々似生意、自爾爲佳節、誰知林樾者、閒風坐相悅、草木有本心、何求美人折（張九齡感遇）

(三) 沈佺期、宋之問

沈佺期 字は雲卿、相州内廣の人なり、進士に擧げられて、給事中考功に除せられしも人の昧を



受けて驪州に長流せらる、後に起居郎となり、修文館直學士を兼ね、宮中の宴に侍せし時、帝學士等に詔して回波を舞はしむ、怪期、弄辭を作て帝を悦はしめしかば、詔して牙緋を賜ふ、同時に宋之問と云ふ者あり、詞を以て怪期と名を齊ふす、時人稱して沈宋と云ふ。

宋之問 字は延清、一名は少連、汾州の人なり、偉貌辯給あり、武后に阿附して供奉となる、武后洛南の龍門に遊ひ、從臣に詔して詩を賦せしむ、左史東方朔詩先づ成る、后之に錦袍を賜ふ、之に問俄頃にして亦獻す、后之を覽て嗟賞已ます、更に蚪か錦袍を奪ふて、以て之を賜ふ、時に張易之昵寵甚し、之問心を傾けて之に媚附し、易之か爲めに溺器を奉するに至る、敗るゝに及て瀧州に貶せられ、逃歸て張仲之か家に匿る、會、武三思、事を用ゆ、仲之之を殺さんと謀る、之問、其實を得て變を上り、因て罪を贖ふ、是に由て鴻臚主簿に擢てらる、又太平公主に諂事して、賄賂狼籍す、末路累りに貶謫に遭ひ、後遂に御史に劾奏せられて死を賜ふ、初め之間、劉庭芝を虐殺して、

其『花相似』の句を奪ふ、是に至て人皆以て劉か報なりと爲すと云ふ。  
沈宋の兩人、其操行共に取るべき所なく、特に之間に至ては兇險狠戾、言ふに忍ひざるものあり、然れとも詩律の變、多くは此兩人の際よりして生ぜり、唐書本傳に曰く『魏建安後沈江左、詩律屢變、至沈約庾信、以音韻相婉附、屬對精密、及之間怪期又加靡麗、回忌聲病、約句準篇、如錦繡成

文、學者宗之、號爲沈宋、語曰蘇李在前、沈宋比肩』と、蓋詩律の變、正に兩人より始ると、猶詩風の變、蘇李より始まるか如きを謂ふなり、按するに、律詩は遠く梁陳間の儷句に濫觴す、梁元帝の五言八句の如き、己に律體に近し、七律は、五言八句の變にして、唐已前に在りては、隋煬帝の『揚州舊處可淹留、臺榭高明復好遊、風亭芳樹迎早夏、長阜麥隴送餘秋、深潭桂楫浮青雀、果下金鞍躍紫驪、綠觴素蛾流霞飲、長袖清歌樂戲州』の如き、既に七律の體を具せり、然れとも、風氣未だ全く此に至らず、四傑の集中にも、徃々七律の調なきにあらざれとも、其全く之れあるは、蓋沈宋等の聲音を研揣して、浮切差はさりしよりすと云ふべし、然らば沈宋兩人の人物如何は之を論せず、其の文學史上に於ける姓名は決して之を没すべからず、然れとも、律詩の門既に開け、後世幾多の才傑、趨て之に入り、只巧を既定の字句間に求めて、千幅一律、遂に雄篇大作に乏しきを致せしは、始めて其備を作りしもの、豈に賁なしと云ふべしや、李杜韓蘇の諸大家を以てすら、其所謂雄篇大作と稱すべきものは、僅々數篇に過ぎず、然るに之を以て、西詩の所謂雄篇大作なるものに比較せむか、其優劣は姑く置くも、其大少長短、上下邊幅、亦果して如何そや、蓋東西文學の發達、其本を同ふせず、其原因も亦應に一にして足らざるべきも、之を要するに、字句聲律の間に局配して、大に雄渾特出の氣韻を吐く能はさりしに、因らざるはあらざるなり、果して然らば沈宋の



出しは、支那文學史上、幸か不幸か、吾之を讀者の判断に委せむと欲するなり。

以上は初唐の詩變に於て、最關係ある諸人を掲出せしものなり、沈宋諸人と相鼓吹して、律詩の發達を致せし者を杜審言、崔融諸人の徒と爲す、其他李嶠、劉庭芝、張若虛諸人の如きも亦當時の作家と爲す嶠の汾陰行最佳、其結末四句、或は裁して絶句と爲すものあり、然れども是特に好事家の爲す所たるのみ、庭芝の白頭翁の詩、傳へ云ふ、庭芝嘗て白頭吟を吟り一聯に云ふ『今年花落顔色改、明年花開誰復在』と、既に此語識なりと、嘆して乃ち之を除く、又吟して云ふ『年々歳々花相似、歳々年々人不同』と、復た歎して曰く死生命あり、豈此虚言に由らむやと、遂に之を併存す、舅宋之間、後聯を愛し、其の未だ人に傳らざるを知り、懇に之を求め、遂に奴をして土囊を以て庭芝を壓殺せしめて其句を奪ふ、故に其句今現に之間集中に在りと云ふ、甚ひかな無耻の文人、其心豺狼よりも虐甚し、吾人既に之間の小傳中、其人と爲りを記す、然れども更に深く之を筆誅するにあらざれば、天下後世の酷薄殘忍の好面惡心的小人を殲す能はざるなり、故に又姑らく之に及ぶ。

## 第三節 盛唐諸家

唐三百年の天下は、詩運の天下なり、此詩運の天下に在て、最も其盛を極めたるは、玄宗の開元天

寶の際より代宗の太暦の始に至る、凡五十餘年間に在りとす、而して此五十餘年間に於て、詩壇に立て、最も其雄聲を馳せしは、洵に李太白、杜子美の兩人なりとす、然らば唐三百年、詩人の冠冕たる者、兩家を措て、豈復た其人あらんや。

是の時に當り、大小の作家、林の如くに立ち、其當時に在りては、甚著名ならざりし詩人の作と雖も、優に後世の稱して名作と爲す所たり、兩家と其時を同ふして、出て、之に前後羽翼して、其盛を鳴らせし者、孟浩然、王維、王昌齡、岑參、高適、王之渙、崔頤、儲光義、李頎、常建、賈至諸人あり、其他山阿に高蹈し、水涯に放浪して、興を詩酒に寄せ、會て當世の交を求めざる者、亦一二を以て數ふべからず、而して諸家の作、亦互に長短なきと能はず、或は近体に巧にして古風に拙なる者あり、或は五言に善くして七言に善からざる者あり、是に於てか龍標は絶句を以て鳴り、摩詰は律詩を以て稱せらる、而して太白の律詩、子美の絶句の如きは、共に變調の稱を免れかされども、比較的諸體を具ふる者は、諸家中、總に指を此兩家に屈せざるべからず、若し一韻一詩を取て、其美を對照せしめむには、諸家中、或は兩家を歴して其上に出つる者これなしとせざるべし、然れども、其全體上より、更に大量觀察を下すに於ては、猶ほ是れ大將と名將との體段、自ら同しからざるあるか如く、文壇に於ける大家と名家の區かる、所正さに此に在るなり、今夫揮霍縱橫、



變奇權畧並ひ出て、策すれば必ず中り、戦へば必ず勝つもの、固より名將の事なり、然れども大將、軍に在りて旌旗動かす、神威行はれて、三軍手足の如きに孰れそや、是李杜の獨り大家と稱すべくして、王維諸人の竟に名家として、其地位を保つに過ぎざる所以なりとす。

諸家の地位より云へば、略、此の如し、而して其詩體に至りては、或は悲壯を以て宗と爲すものあり、或は清澹を以て旨とするものありて、各、同一なること能はず、是に於てか青蓮は飄逸を以て一世を聳動し、少陵は沈鬱を以て餘人を壓せり、蓋詩は性情の動て、文學に發現するものなるか故に、其詩の高下は、直ちに其性情の高下を示現するなり、然れども、詩に先天の性情に出づるものあり、身外の境界に成るものあり、是に於てか、或は興會を以て其勝を制するものあり、或は根底を以て其長を見はすものあり、而して風氣の化する所は、此等の如何に拘らず、滔々として春風の魔神に鼓盪せられて、萬木千艸の一時に華さけるか如く、山村水廓、傾窓陋屋の下に至るまで、詩風の薰及する處、其の然るを知らずして、然るものあり、是れ盛唐の作者が、風氣の魔神に感化せられて、自ら空前絶後の詞華を留めし所以なりとす、而して李杜の兩家も、亦其感化に漏るること能はず、適、之に乗して出て、其變化を助けしものと云はざるべからず。

今夫青蓮の飄逸、少陵の沈鬱、文を以て之を喩へば、太白は史記の如く、子美は漢書に似たり、人物を以て之を喩へば、太白は仙にして、子美は聖なり、若し更に性根を以て之を喩へむには、太白は頓にして子美は漸なり、而して其頓たり漸たり、仙たり聖たると、又其の史記の如く漢書の如きを論せず、其造詣の妙處に至りては、亦猶ほ春蘭秋菊の香色淡濃、各、掬すべきものありて、等しく人の心目を動かすに足るか如く、其入神の處、未だ會て相同しからずんばあらず、蓋兩家の境遇性情、亦互に一なると能はず、而して其詩の異曲なる、亦各、由る所なくんばあらず、太白の玄宗に於けるや、特知に出て、金鑾の召見、特に殊禮を以て遇せられ、驥殿に遇ふと雖、猶金を賜ふて之を遺歸し、以て齊魯吳越の間に遊遊して、詩酒に浮沈し湖山に放浪することを得せしめたり、是其詩の高逸縱恣、汗漫自適、飄々然として遺世獨立の意ある所以なり、而して子美は、年將に四十に及はんとして、始めて賦を献するを以て官に叙せられ、其後兵間に崎嶇して、流離轉徙、殆んと自ら存せず、故に其詩に發するもの亦自ら沈痛哀切、感慨悲涼の韻を多しと爲すなり、然れども共に風騷に原本して、漢魏を驅逐し、六朝の靡漫を一掃し、以て一代の詞宗と爲りしに至りては、未だ會て相同しからずんばあらず、元和中、詩人元稹、自家の好惡を挾みて、李杜優劣論を作り、以て軒輊を其間に試みたり、昌黎の韓愈は一代の偉人なり、嘗て言を爲して曰く『李杜文章在、光燄萬丈長、不知群兒愚、那用故謗傷、蚍蜉撼大樹、可笑不自量』と蓋篤論と云ふべし、之を要する



に其詩體の異同あるは、畢竟性情の異同ある所以にして、其繼て起りし者の有無は、其詩體の盛否に關する所なり、而して太白の風神は、學て能くすへからざるも、子美の法度は、迹の尋ぬへきものあり、是後世子美を尊奉する者の益、多くして、太白の曲高きは、繼て起る者の愈、寡きを致せし所以なりとす、宋人多くは理に滯りて詩に通せず、動もすれば、道學的眼光を以て、詩を解せんと欲す、是に於てか少陵を崇尊する者多けれども、青蓮に於ては、却て大に満たざる所あり、是直に風人の性行を知らざるに坐するものにして、退之の所謂群兒の恐たるを免る能はざるものなり、李杜の目、其來ると久し、吾人豈に好て太白に阿附せんや、誠に已むを得ざればなり、今下に於て兩家の平生を考えて、其畧傳を立つ。

## (一) 李白

李白 字は太白、青蓮と號す、隴西成紀の人、涼武昭王九世の孫なり、隋末に當り、其先世、事を以て西城に徙り、隠れて姓名を易ふ、武后の時に至り始めて内地に遷り、蜀の錦州に至りて家す、太足元年、太白生る、懿姜の夕、長庚星夢に入る、故に白と名け、太白を以て之に字す、少ふして逸才あり、志氣宏放、縦横の術を喜み、任俠氣義を尚ふ、嘗て事に因り人を手刃す、又財を輕んして施を重んず、其の韓荆州に與ふる書に曰く『白隴西布衣、流落楚漢、十五好劍術、偏于諸侯、三

十成文章、歷抵卿相、雖長不滿七尺、而心雄萬夫、皆王公大人許與氣義、此疇曩心跡、安敢不盡於君侯哉』と、是殆んと太白の自傳たるものなり、而して其の壯氣雄心は、復た彼の書を宰相門下に奉りて、哀を諷辭恭敬の間に求むる者の比にあらず、當時書を上る者、多くは文章詩賦の雄に誇りて自から贊すること甚高く、或は六經に羽翼すと云ひ、或は騷雅に出入すと稱して、才藝技能の末を趨ひ、以て名位爵祿を釣るの資と爲さんと欲する者、滔々として皆然らざるはなし、然るに太白は獨り超然として時俗の語を爲さず、口を開けば輒ち曰く『雖長不滿七尺而心雄萬夫』と、是直に其才藝技能の外に於て、大に自ら許期する所あるなり、况んや其文章詩賦の富に於ても、遂に當時に傑出するものあるに於てをや、然れども、其の稱する所は『白以此感激、知君侯推赤心於諸賢腹中、所以不歸他人、而願委身國士、倘急難有用、敢効微驅、且人非堯舜、誰能盡善、白謨猷籌畫、安能自矜、至於制作、積成卷軸、則欲塵穢視聽、恐彫蟲小技、不合大人』と云ふに過ぎず、是其の本領爲人の高下を見るに足るべき所なり、而して太白景慕の情をして此の如きに至らしたる韓荆州の人物如何も、想見するに餘りあるなり、蓋當時文運漸く盛んにして、朝野宴安を事とし、邊驚時に至り、藩鎮動もすれば跋扈せんとするにも拘らず、滔々たる肉食の徒は、徒に大平を謳歌し、姑息を思ふて已まず、私朋相擠して、毒舌奸腸を恣にし、俊才猾兒を以て、機敏適世の人と爲し、



骨守節の人に被らしむるには、或は奸物の目を以てし、或は匪忠の徒と誣ひ、甚しきに至りては、明々白々の事實を隠隠し、無影無聲の虚談を構造して、冤を正人君子に吞ましめ、隨て之か辭を作り、以て獍鬼惡刹の面を蔽ふて、菩薩温厚の容を爲る者さへある時世なりければ、太白の飄逸超凡なる、世固に之を容れ得るの偉人あるとなかりしは復た疑ふへからず、然るに荊州の名望は早くも此背世的好漢をして仰風の念に堪へざらしめたるもの、決して尋常一様の二千石にあらざりしを見るへし、意ふに其の平昔に於ける、必らず人を見るの鑑識ありて、之を出すに玲瓏一片の氷心を以てして、曾て幾微の機心を雜ふる底の人にあらざりしことも亦以て之を察するに足るへし、然らずむは、飄逸硬骨の青蓮、豈容易に其氣を下すへき者ならむや、嗚呼滔々たる時俗、何の世か、青蓮の時の如くならざる、唯千載曾て荊洲の如き者を少しと爲すのみ。

太白既に長して岷山に隠れ、州舉あるも應せず、蘇頌、益州長史と爲り、太白を見て之を異として曰く、之の子天才奇特、若し益すに學問を以てせば、即ち相如に比すへしと、然れとも、太白遂に之を顧みず、出て、襄漢に遊び、南は洞庭に泛ひ、東は金陵、揚州に至り、更に汝海に客と爲り、還りて雲夢に憩ふ、此の時、故相許圜子か孫女を娶り、遂に留まると數年、而して其の俠骨稜々として風塵の上に灑脱せしと、郭子儀を行伍の間に識り、主帥に言て其の刑責を脱せしめしか如き、

又譙郡元參軍と妓を携へて晉祠に遊び舟を浮べて水を弄せしか如き、皆是の時に在りとす、既にし去りて齊魯に之き、任城に客寓す、是の時に當り、其交る所は、坎填失意の人にあらされは、隱逸遁世の士なり、其の樂む所は、醉郷酣飲の興にあらされは、嘯山吟水の適なり、是に於て、魯中の諸生、孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔等と徂徠山に居り、日に酣歌沈飲して、竹溪の六逸と號す、意ふに此數子も亦高舉拔俗、世と俯仰せず、寧ろ山中白雲の深きに老るも、彼の蒼蠅に倣て腐臭を逐ひ、阿合荷迎して容れらる、とを求むるを愧ちし者なるへし、今夫牛馬を見るも亦各、其群あり、野干は以て虎窟に入らず、大象は曾て兔徑に遊はず、然らば則ち六逸の太白に於ける、又以て其性情人品を知るに足る、此時に當り、太白と詩壇の雙星たる杜子美も、亦齊魯の間に飄零して不遇の歲月を送れる時にて、其の交遊は夙に傾蓋の間に成れり、而して其沙丘城下寄杜甫詩、

我來竟何事、高臥沙碛城、城邊有古樹、日夕連秋聲、鶯酒不可醉、鶯歌空復情、思君若汝水、潯潯寄南征、

又魯郡東石門送杜二甫詩

醉別復幾日、登臨徧池臺、何時石門路、重有金樽開、秋波落泗水、海色明徂來、飛蓬各自遠、且盡手中杯、

の如き、蓋當時の作に係るものにして、此二詩亦以て其交遊の一斑を窺ふに足るなり、天寶の初、會稽に遊んで、道士吳筠と共に剡中に居る、會、筠召れて闕に赴く、因て太白を朝に薦む、玄宗即ち詔を下して之を徵す、太白乃ち京師に至りて太子の賓客、賀知章に紫極宮に遇ふ、知章一見して



嘆して曰く、子に誠に謫仙人なりと、因て金龜を解て酒に換へ以て樂を爲す、玄宗之を金鑾殿に召見し、翰林の中に入らせしめて、問ふに國政を以てす、又潜かに詔詰を叩せしむるも人の知るものなし、其の和蕃書を草するや、思は懸河の若くにして筆は停輟せず、又頌一篇を奉る、帝之を嘉みして七寶の方丈を以て食を賜ひ、御手にて羹を調して之に飯せしめ、謂て曰く卿は是布衣なれとも其名の朕に知らるゝは素より道義を畜ふるにあらざれば、何を以てか此に及んやと、其の才藻特絶にして、器識兼茂るを以て、便ち上位を以て之を處き、未た命するに官を以てせず、嘗て沉香亭前の牡丹花、方に開ける時に、玄宗楊貴妃と之を賞し、左右に謂て曰く、此の良辰美景に對し豈獨聲伎を以て娛を爲すへけんや、儻し逸才詞人を得て之を咏出せしめは、以て後世に誇耀すへしと、遂に命して太白を召す、太白寧王之招に應じて、酒を被り、已に醉臥して前後を知らず、左右水を以て面に灑き、扶け起して、墨を研き、筆を濡して之に授く、太白筆を授て、立るに清平調辭三章を進めたり。

雲想衣裳花想容、春風拂柳綠輕盈、若非群玉山頭見、會向瑤臺月下逢。  
一枝濃露暎深香、雲雨巫山枉斷腸、借問漢宮誰得似、可憐飛燕倚新粧。  
名花傾國兩相歡、常得君王帶笑看、解得醉風無限恨、沈香亭北倚闌干。

帝梨園の弟子に命して、畧調を約して絲竹を撫し、遂に李龜年を促して之を歌はしむ、貴妃玻璃

七寶の杯を持して、西涼州の葡萄酒を酌み、笑て歌辭を領して、意甚厚し、帝之より太白を顧みること尤も諸學士に異れり、是に於て正を醜むの同列、能を害し謗を成す、會高力士、太白の爲めに靴を脱せしを以て深く耻と爲し、異日其の詩を摘み以て貴妃を激す、帝三たび太白に官を命せんと欲して、卒に宮中の爲めに輒ち沮止せらる、其の自ら容れられざるを知るや、乃ち益酒を籍りて形跡を放浪し以て自ら昏穢にす、賀知章、崔宗之等八人と飲中八仙の遊を爲す、杜子美歌を作りて之を詠す、而して八仙の聲容、髣髴として眼前に躍如たり、蓋其の太白に於けるや尤も意を致せしものなり、抑丈夫爲すあるの才を抱て、志を一時に得ざる者、往々酒を縦にして、其跡を踏晦し、以て偃蹇の節に傲るものあり、若し俗情よりして之を見れば、其世波と浮沈すること能はざるのみならず、全く行路に劣敗して、故らに異を立て奇を標するに似るも、苟も尺を枉て尋を直するは、丈夫の爲す能はざる所にして、寧ろ深山大澤に盤伏して、龍蛇の神となるも、敢て詭遇して塵俗の汙穢を被らざるは大丈夫の志なり、而して太白の二三子に於ける、俱に是れ清風朗月、洵に一世の偉人たれば、這裏の境界、亦以て夷の思ふ所にあらざるものあり、世の眼識なきと久し、單に之を飲仙と呼ぶもの、惡んを以て飲中諸賢の消息を窺ふに足らむや。

此の如くにして、太白は長安に在ると三年、竟に請ふて山に還る、帝亦其の留むへからざるを知り



優詔して金を賜て放還す、乃ち北海の高天師に請ふて、道籙を齊州の紫極宮に受く、既にして其の北海に歸るに及て餞するに詩を以てせり、

道隱不可見、靈霄礙洞天、吾師四萬劫、塵世遞相傳、別杜留青竹、行歌羅紫烟、離心無遠近、長在玉京懸、

夫太白の飄逸曠懷を以てして、一道士に縉々として、備さに恭敬崇尊の意を表し、以て道籙を授かると云ふもの、是直に一場の兒戯に等しきのみ、知らず其の書果して何の記する所ありしやを、蓋し太白の曠達なる、素より導引吸氣、輕舉飛揚の謀を爲さんと欲するものにあらず、蓋更に以て取る所ありしならむ、古來光明絕特の士、仙を愛し禪に入るもの、往々籍りて以て其壯心を鎖磨せんと欲す、意ふに太白も亦仙を假りて、滿腔の熱血を冷却せんと欲せしのみ、是獨り太白に於てのみ之を見るにあらず、幾多の英物をして回首即神仙たらしめしもの其例に乏しとせず、蓋太白は適形式的に此間の消息を洩らせしものにして、這老瞞世の好奇心に過ぎざるのみ、之を徒に仙を愛し禪に入ると云ふは未だ以て太白の心事を知らざるものなり、太白既に道籙を受けて四方に浮遊し、北は趙魏燕晉に抵り、西は郿岐を涉りて、商於の地を歴、洛陽に至て梁に遊ぶ、之に久ふして、復た南、淮泗に遊んで、再ひ會稽に入り、更に金陵に轉徙して、秋浦尋陽に上る、月夜舟に乗して崔宗之と采石より金陵に至る、月明清澄、水天夢の如し、太白宮錦袍を著て舟中に坐し、顧瞻笑傲、

旁に人なきか若し、蓋其の飄逸曠懷、至る所として勝適あらざるなしと雖、殊に其の舟を同ふする者は、瀟灑たる酒仙中の一人、泛ふ所は大江月明の處なれば、假令飄逸の太白ならざるも、豈に此の良辰に對して、兀座愁眠に堪ふへけんや、俗人の見て以て驚く所は、偉人高士の毎に以て意に適すと爲す所に過ぎず、蓋俗人の欲は聲利に在りて、偉人の志は高潔に存す、俗人の樂は絲竹歌管の間を出てさるも、高士の適は江山風月の境に在り、是太白の適意、毎に人の意表に出づる所以にして、尤も這老の面目を想見すべき所なりとす。

天寶十四年安祿山反す、時に太白地を避けて廬山に在り、永王璘、江陵府の都督と爲りて、四道の節度使を兼ね、素より太白の才名を重んじ、辟して府の僚佐と爲す、其の擅に舟師を引て東下するに及び、脅して以て偕に行き、既にして軍敗るゝに及び、太白奔亡して彭澤に至る、因て坐して尋陽の獄に繋かる、宣撫大使崔涣、御史中丞宋若思等以爲らく太白の罪薄ければ宜しく貰ふへしと、遂に太白の囚を釋て其軍事を謀らしめ、肅宗に上書して其の才の用ふべきを薦む、是の時に當り、太白山既に五十七、齒髮頽然たり、時に太白が嘗て救解せし所の郭子儀、今や功名既に成て、勳策當時に冠たりしかば、乃ち請ふて其の官符を以て太白を贖ふ、因て誅を免して夜郎に長流せらる、夫子儀百戰の功を立て、以て汾陽王と爲り、寵榮未久しからず、忽ち故人の急に遭ふ、若し鄙夫



の常情よりすれば、一髮愛者の意なきと能はず、然るに子儀の位冠を見るとは、猶ほ敝履の脱し易きか如く、一擲して之を顧みず、以て其徳に報ず、其道義に厚きこと、蓋亦當時の一人のみ、因りて意ふ、人情日に輕浮に趨き、朝には天に誓て心交と稱するも、夕には雲散常なく、一旦危急の時に臨ては悠々たる行路の人の會て相知らざるか如く、冷炎其時に隨ひ、利害其身を恐るゝもの、概ね然りとす、然らば則ち子儀の太白に於ける、洵に萬綠叢中の一豔紅たると同時に、又太白が人を見るの鑑識ありしを知らざるへからず、是に於て太白は乃ち洞庭に泛んで三峽に上り、以て巫山に至る、道にて赦に遇ひ、還りて岳陽江夏に憩ふ、之に久ふして、復た尋陽に如き金陵を過て、歴陽宣城の間に徘徊し、或は扁舟に乗して、一日千里、或は勝景に遇へば終年移らず、以て其の適を娛めり、時に其の族人李陽氷當塗の令と爲る、太白之を過り、遂に病を以て卒す、時に年六十二、實に肅宗の寶應元年十一月なり、或は云ふ、舟中酔ふて海中の月を探らむと欲し誤て水に落つと、非なり、是より先き、太白牛渚磯を度りて姑熟に至り、謝家の青山を愛して終焉の志あり、此に至りて、終に其東麓に葬ると云ふ。

太白の遊跡は甚廣く、其の詩文も亦甚、多けれども、概ね其の歲月を記せざれば、今其の作の前後を知ると能はず、李陽氷は太白の族人なり、嘗て太白の草堂集を纂するや、古風五十九篇を以て冠

首に列す、其の作、辭旨明白にして、述ふる所、遠くは阮嗣宗の咏懷を追ひ、近くは陳子昂の感遇に比し、其の間、事を指すと深切、情を言ふと篤摯にして、毎に言外の旨多し、古人太白を以て風雅の嗣音、詩人の冠冕と爲すもの、蓋此詩篇あるを以てなり、朱熹嘗て歷代の詩を撰んで一編と爲し、以て三百篇、楚辭の後に繼かんと欲し、太白の古風を以て、之か羽翼と爲せりと、蓋亦卓見と云ふへし、其第一首、

大雅久不作、吾衰竟誰陳、王風委蔓艸、國多荆榛、龍虎相啖食、兵戈連狂秦、正聲何微茫、哀怨起騷人、楊馬激滌波、開流瀉無垠、廢興雖萬變、憲章亦已淪、自從建安來、綺靡不足珍、聖代復元古、垂衣貴清眞、群才屬休明、乘運共躍鱗、文質相炳煥、衆星羅秋昊、我志在刪述、垂輝映千春、希聖如有立、絕筆於獲麟、

是太白が尋常一様の紅を評し綠を品して、徒に聲律の末を追ひ、標榜して詩人と云ふもの、比にあらずして、其の志たる直に風騷に接なんと欲するの意を見るへし、而して太白の氣味は、以て優に之に副ふに足れり、李陽氷稱す『馳驅屈宋、鞭撻楊馬、千載獨步、惟公一人』と、蓋阿好の言にあらざるなり、太白毎に善く古樂府の題を假りて、自家の聲音を出せり、而して其篇什亦甚多し、遠別離の如きは、蓋亦此類の一にして、實に太白か傷時の言なりとす、今夫君子位を失ひ、小人事を用ひて、喪亂山の如くに至り、往て之を救はむと欲するも、身は是江湖一葉の人なれば、即ち其の位地なくして其の時病を熟識する者、豈に之を辭章に見さるを得んや、蓋其の題目は、則ち古樂



府の題目なりと雖も、其の詩は則ち全く太白が自家の聲音に出るものなり、是子美の務て更に新題を擇ふと、其選を異にする所なり。

遠別離、古有吳英之子女、乃在洞庭之南、瀟湘之浦、海水直下萬里深、誰人不言此離苦、日慘慘兮雲冥冥、猩猩啼血兮鬼嘯雨、我縱有之將何補、皇符痛惡不照余之忠誠、雲濛濛兮欲吼怒、魂舞當之亦神禹、君失臣兮龍爲魚、樞歸臣兮鼠變虎、或言鸞幽囚舜野死、九疑聯綿皆相似、重瞳孤墳竟何是、帝子泣兮綠雲開、隨風波兮去無還、慟哭兮遠望、見蒼梧之深山、蒼梧山崩湘水絕、竹上之淚乃可滅(遠別離)

此篇を解する者曰ふ、日慘々の二句、日は君に比し、雲は臣に比す、猩々鬼等は、俱に小人政を亂る者を云ふ、龍爲魚、鼠變虎、鸞幽囚、舜野死等の如きは、暗に李輔國か上皇を西内に遷すの事を謂ふならむと、楊載此篇を評して曰く『波瀾開闔、如江海之波、一波未平、一波復起、又如兵家之陣、方以爲正、又復爲奇、方以爲奇、忽復是正、出入變化、不可紀極』と姑く之を記す、又其の蜀道難は、太白が集中に於て、最も雄篇と稱すべきもの、一にして、其の奇崛横矯、起伏放縱なること、全く楚騷に原本し、青蓮居士にあらざれば、決してこれあると能はざる所なり、

噫吁戲危乎高哉、蜀道之難、難於上青天、羣峯及鳥兔、開國何茫然、爾來四萬八千歲、不與秦塞通人煙、西當太白有鳥道、可以橫絕峨眉巔、地崩山摧壯士死、然後天梯石棧相鉤連、上有六龍回日之高標、下有衝波逆折之回川、黃鶴之飛尚不得過、猿猴欲度愁攀援、青泥何盤々、百步九折繁巖巖、扪參歷井仰脅息、以手撫膺坐長歎、問君西遊何時還、畏途巖巖不可攀、但見悲鳥號古木、雄飛雌從繞林間、又聞子規啼夜月愁空山、蜀道之難、難於上青天、使人聽此凋朱顏、連峰去天不盈尺、枯松倒掛倚絕壁、飛湍瀑流爭喧壑、砢崖轉石萬壑雷、其險也如此、嗚呼蜀道之人胡爲乎來哉、劍閣峥嵘而崔嵬、一夫當關萬夫莫開、所守或匪親、化為狼與豺、朝避猛虎夕避長蛇、磨牙吮血殺人如麻、錦城雖雲樂、不如早還家、蜀道之難、難於上青天、側身西望長咨嗟(蜀道難)

沈德潛此篇を評して曰く、筆陣縱橫、野飛ひ變動きて、雷霆を指顧の間に起すが如し、太白の仙才たる所以なりと、桂臨川も亦曰く、詞旨幽深にして、雄渾飄逸なりと、古人の此篇に對する定説、略、此の如し、而して之を解する者、亦紛々として、或は嚴武蜀に在りて放肆なりしかば、太白乃ち房瑄と杜甫とか爲めに危んで之を作れりと云ひ、或は章仇、兼瓊を諷するものと云ひ、衆訟百出殆んと其命意の在る所を知るへからず、唯蕭士贊か祿山、華を亂り、天子獨に幸する時の作ならむと云ふもの、及び乾隆の批評に、徒に其の文章の奇を賞して、其深情遠意を審にせざるは、未だ以て白を知る者と爲さざるなりと云ふもの、俱に之を得たりとなすなり。

蜀道難と相並ひて、雄篇の稱あるものは、夢遊天姥吟なりとす、而して其の筆勢の天矯として、詩思の曠逸なる、飄揚激振、遊雲轉石の如くなるは、亦太白か獨得の妙境にして、太白の前に一人なく、太白の後に一人あると能はざる所なり、讀者若し此の言を疑はし、請ふ試みに下の篇を一誦せよ、

海客談瀛州、煙濤微茫信難求、越人語天姥、雲霓明滅或可視、天姥連天向天橫、勢拔五嶽掩赤城、天台四萬八千丈、對此欲倒東南傾、我欲因之尋吳越、一夜飛度鏡湖月、湖月照我影、送我至剡溪、謝公宿處今尚在、渌水滄滄清猿啼、脚著謝公屐、身登青嶂梯、半壁見海日、空中聞天鶴、千巖萬壑路不定、迷花倚石忽已暝、熊咆龍吟殷巖泉、慄深林兮驚層巖、雲青青兮欲雨、水澹澹兮生煙、列缺霹靂、岳巒崩摧、洞天石扇、訇然中開、青冥浩蕩不見底、日月照耀金銀臺、霓爲衣兮風爲馬、雲之君兮紛紛而來下、虎鼓瑟兮鸞回車、僊之人兮列如麻、忽魂悸以魄動、恍驚起而長嘯、惟覺時之枕席、失向來之煙霞、世間行樂亦如此、古來萬事東



流水、別君去時何時還、且放白鹿寄巖間、須行即騎訪名山、安能摧眉折腰事權貴、使我不得開心顏(李太白別)  
 七言歌行、本、楚騷樂府より出つ、太白に至りて然して後に、筆勢を窮極して、優に聖域に入る、昔人、其の氣を以て主と爲し、自然を以て宗と爲し、遂逸高揚を以て貴と爲し、之を咏せは人をし、て飄揚として仙せしめんとすと謂て、尤も其天姥吟、遠別離等の篇を推し、以て子美と雖、道ふと能はずと爲す、蓋其才一世を横絶す、故に與會標舉、學て及ふへきにあらずとは、乾隆の批評にして蓋亦定論と云ふへし、又其の憶舊遊寄譙郡元參軍作の如きは、結構極て嚴にして神氣自ら暢ひ、

情文並高く、直に以て其の才の長を擅、にするものなるを知る。  
 憶昔洛陽董博郎、爲余天津橋南過酒樓、黃金白璧買歡笑、一醉累月輕王侯、海內賢豪皆避客、就中與君心交遊、迴山轉海不作離、傾情倒意無所惜、我向淮南攀桂枝、君留洛北愁悲思、不忍別君相隨、相隨迢迢訪仙城、三十六曲水迴環、一溪初入千花明、萬壑度盡松風聲、銀鞍金絡倒平地、漢東太守來相迎、紫陽之真人、邀我吹玉笙、餐霞樓上動仙樂、嘈然宛似鸞鳳鳴、袖長管帶欲輕舉、漢東太守醉起舞、手持錦袍覆我身、我醉橫眠枕其股、當筵意氣凌九霄、星離雨散不終期、分飛楚關山水遠、余既還山尋故巢、君亦歸家渡渭橋、君家嚴君勇貔虎、作尹非州過戎虜、五月相呼度太行、摧輪不道羊腸苦、行來北涼歲月深、感君貴義輕黃金、瓊杯綺食青玉案、使我醉飽無歸心、時時出向城西曲、晉祠流水如碧玉、浮舟弄水滌蛟鳴、微波龍鱗撼神絲、與來攜妓恣經過、其若楊花似雪何、紅粧欲醉爭斜日、百尺清潭寫翠娥、翠娥嬋娟初月輝、美人更唱舞羅衣、清風吹散入空去、歌曲自繞行雲飛、此時行樂難再遇、西遊因欲長楊賦、北園青盤不可期、東山白首遺歸去、渭橋南頭一遇君、揮毫之北又離羣、問余別恨知多少、落花春暮爭紛紛、君亦不可盡、情亦不可極、呼兒長跪絨絨辭、寄君千里遙相憶(憶舊遊寄譙郡元參軍)  
 襄陽歌は、太白か意曠神逸、頽唐の趣を極るものにして、歐陽修の所謂千古に警動する所以のもの、固に此に在るなり。

落日欲沒岷山西、倒著接羅花下迷、襄陽小兒齊拍手、欄街爭唱白銅龜、傍人借問笑何事、笑殺山翁醉似泥、鸚鵡杓、鸚鵡杯、百年三萬六千日、一日須傾三百杯、遙看漢水鴨頭綠、恰似蒲萄初醱醅、此江若變作春酒、壘麴便築糟邱臺、千金駿馬換小妾、笑坐彫鞍歌落梅、車傍側掛一壺酒、鳳笙龍管行相催、咸陽市中歡黃犬、何如月下傾金罍、君不見曹胡羊公一片石、龜頭剝落生蒼苔、淚亦不能爲之墮、心亦不能爲之哀、清風明月不用一錢買、玉山自倒非人推、舒州杓力士鎗、李白與爾同死生、襄王雲雨今安在、江水東流潑夜聲(襄陽歌)

既に襄陽歌を誦して、更に其の奇思曠懷の處を見んと欲せば、須らく把酒問月の作を吟せざるべからず、

青天有月來幾時、我今停杯一問之、人攀明月不可得、月行却與人相隨、皎如飛鏡臨丹闕、綠烟滅盡清輝發、但見宵從海上來、寧知曉向雲間沒、白兔搗藥秋復春、嫦娥孤棲與誰鄰、今人不見古時月、今月曾經照古人、古人今人若流水、共看明月皆如此、唯願當歡對酒時、月光長照金樽裏

以上標舉せし所、皆是太白集中の名篇たりと雖、珍寶名璧藥々として相屬し、未だ以て其の十の一を盡すに足らず、殊に其の樂府歌行、七言長古の作に至りては、徃々風雨分飛して、魚龍百變し、尤も其天才縱逸の槩を見るに足る、獨り其樂府歌行、七言長古のみ然りと爲すにあらず、短篇近跡境の兼ねさるなく、就中其の七言絶句の如きは、洵に唐三百年の第一人なりとす。

朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還、兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山(下江陵)  
 洞房四壁楚江分、水盡南天不見雲、日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君(陪族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至遊洞庭湖)  
 楊花落盡子規啼、聞說龍標過五溪、我寄愁心與明月、隨風直到夜郎西(聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄)  
 故人西辭黃鶴樓、烟花三月下揚州、孤帆遠影碧空盡、惟見長江天際流(黃鶴樓送孟浩然之廣陵)

又其の五七律に於ては、



見既登露路、崎嶇不易行、山從人面起、雲傍馬頭生、芳樹籠秦棧、春流遶蜀城、升沈應已定、不必問君平(送友人入蜀)  
鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流、吳宮花草埋幽徑、晉代衣冠成古丘、三山半落青天外、二水中分白鷺州、總爲浮雲能蔽日、長  
安不見使人愁(登金陵鳳凰臺)

の作の如き、夙に人口に膾炙して、完璧の稱ある所なり、之を要するに、太白天才甚、高く、飄逸放曠、洵に詩人ありてより以來の第一人と稱すべし、若夫徒に巧を字句篇章の間に求めば、或は長を太白に較するに足る者、偶、これなしとせざるべし、然れども、是直に其の末節を追ふて、大木を忘るゝものなり、今夫世に一種の文法家なるものあり、徒に語句の起結を考へて、空しく言詞の活段昧用を講し、句餽を以て巧となし、補綴を以て妙と稱するも、會て自家の胸懷を恣にして、以て雄篇巨作の一世を驚動するに足るものを出すと能はず、而して動もすれば古人を繩墨の内に驅りて其短を摘求せんとす、蓋是先つ其の形骸を構成して、然る後に其の精神氣魄を窺はむと欲するものにして、固より以て文章の神境を語るに足らざるものゝみ、然らば太白の千古に雄視して、其の第一人たる所以のもの、固とに區々たる字句の末にあらずして、脫俗高美、更に着想の靈活入神の處に在るを知るべし、其詩の飄逸放曠なるは、畢竟其人物情性の飄逸放曠なる所以に歸するものにして、其の仙を喜み酒を愛せしか如きは、尤も其の性情の物に籍りて發現せるものに外ならざるなり、故に其酒を愛するも、専ら酣醉を嗜むにあらずして、其の昏迷を取て自ら賞せんと欲するものなり、其の仙を喜むも、亦輕舉避殺を求むるにあらずして、其志氣を鎮磨して、壯心を耗殺せんと欲するものなり、太白嘗て其知友に謂て曰く、吾爾と達すれば天下を兼濟し、窮すれば獨り一身を善くせんと、然るに世既に太白を容れず、轆轤流離して四方に放浪せば、其の志氣抱負も亦何の益する所かある、是太白の酒を籍りて自ら昏迷し、仙を愛して其の壯心を消磨せんとせし所以なるべし、嘗て湖州の司馬か太白に何人なるやと問へるに答て、  
昔蓮居士謫仙人、酒肆藏名三十春、湖州司馬何須問、金粟如來是後身、  
と云ふか如き、何等の輕妙、又山中與幽人對酌、  
兩人對酌山花開、一杯一杯復一杯、我醉欲眠卿且去、明朝有意抱琴來、  
と云ふか如き、汪洋自恣、放懷逸趣、殆んと煙火以外の人たるに似たり、又其月下獨酌、  
花間一壺酒、獨酌無相親、舉杯邀明月、對影成三人、月既不解飲、影徒隨我身、暫伴月將影、行樂須及春、我歌月徘徊、我舞影零亂、醒時同交歡、醉後各分散、永結無情遊、相期邈雲漢、  
天若不愛酒、酒星不在天、地若不愛酒、地應無酒泉、天地既愛酒、愛酒不愧天、已聞清比璣、復道濁如賢、賢聖既已飲、何必求神仙、三杯通大道、一斗合自然、但得酒中趣、勿爲醒者傳、  
諸篇の作の如き、詩酒放曠の狀、視るか如く、殆んと人をして是酒なるか、是月なるか、又將九酒の月と、共に是太白なるかを辨せざらしめんとす、其の人生富貴冠冕の榮を見ること、土塊の如くなるに至りては、或は『功名富貴若長在、淡水亦應西北流』と吟し、或は『五嶽尋仙不辭遠、一生



好入名山遊』と謠ふ、之を彼の蟬唧窮吟して、富貴甘養の得難きを嘆する者に比すれば、其人品の高下、果して如何をや、要するに、是皆太白が性情の放曠にして、胸裡些箇の滯芥なきに歸せずんばならず、而して謫仙の謫仙たる所以、亦實に此に在るなり、又其の最も交善きものを母れば、同じく酒中の仙たる賀知章、崔宗之等を以て第一と爲さるへからず、其の知章に於けるや、

四明有狂客、風流賀季真、長安一相見、呼我謫仙人、昔好杯中物、翻爲松下塵、金龜換酒處、却憶淚沾巾、狂客歸四明、山陰道士迎、勅賜鏡湖水、爲君養酒榮、人亡餘故宅、空有荷花生、念此杳如夢、凄然傷我情、

と哭し、而して宗之には、

飄飄江風起、蕭蕭海樹秋、登壇笑清夜、挂席移輕舟、月隨碧山轉、水合青天流、杳如星河上、但覺雲林幽、歸路方浩浩、徂川去悠悠、徒悲蕙草歇、復恐蕙草愁、岸曲迷後浦、沙明瞰前洲、懷君不可見、望遠增離憂、

と寄す、俱に皆心交胸臆間の語なり、其他は孟郊然、王昌齡、賈至、杜子美諸人より、方外隱逸の流に至るまで、知音甚く多く、其の集中に散見するもの、一二を以て數ふへからず、而して其の能く詩を以て名を齊ふして、一時に馳驟せし者は、獨り襄陽の杜子美一人なりとす、然れとも性情の高下如何に至りては、仙凡自ら別あり、高古曠懷の士、軒輊を其間に置かさらむと欲するも、豈亦得へけむや。

(二) 杜甫

杜甫 字は子美、少陵と號す、本、襄陽の人にて、後に河南の鞏縣に遷る、祖審言、文名あり、官

は修文館學士尙書膳部員外郎に至る、父閑は奉天令に終はる、子美は睿宗の光天元年を以て生る、少時貧にして自ら振はす、玄宗の開元十九年に吳越の間に客遊す、李邕見て其才を奇とす、二十三年京兆に赴き、進士に應じて第せず、二十五年、子美年甫て二十六、是の時に當り、父閑袁州の司馬と爲る、子美乃ち之に省侍して、齊趙の間に遊ひ、山岳の嵯峨たるに登覽し、江水の横瀉たるに遊涉して、頗る其詩思を養へり、而して其詩集は實に此の時より起る、子美の五律中に在りて、結構謹嚴を以て稱せらる、登袁州城樓の作の如き、蓋亦此時に成れるものにて、下の如し、

東郡題庭日、南樓縱目初、浮雲連海岱、平野入青徐、孤嶽秦碑在、荒城魯殿餘、從來多古意、臨眺獨踟躇、

此の時に當り、唐朝詩壇の大白星たる李太白も、亦齊魯の間に在りて、好漢既に能く好漢を知り、互に贈酬の作あり、又時に相携えて勝景を採り、隱者を訪ひしことあり、其の與李十二白同尋范十隱居の句に『李侯有佳句、似々位陰鎌、余亦東蒙客、憐君如弟兄、醉眠秋共被、携手日同行、更想幽期處、還尋北郭生』と云ふか如き、當時文壇の此の雙星か相待て交契の最も密なりしを見るに足る、天寶五年子美は長安に歸り、太白は東吳に在り、而して春日憶李白の作、此の時に成る、

白也詩無敵、飄然思不群、浩新庚開府、俊逸鮑參軍、渭北春樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論文、

六年、天下に詔して、一藝ある者は、殺下に詣らしむ、子美亦之に應せしも、李林甫、尙省書に命して皆之を下して、野に遺賢なきを賀するに及び、乃ち退て東都に至る、此時奉皇章左丞丈二十二



韻の作あり、

執務不餓死、儒冠多誤身、丈人賦靜聽、賤子請具陳、甫昔少年日、早充觀國賓、讀書破萬卷、下筆如有神、賦料楊雄敵、詩看子建親、李邕求識面、王翰願卜隣、自謂頗挺出、立登要路津、致君憂舜上、再使風俗淳、此意竟蕭條、行歌非隱淪、騎驢三十載、旅食草華春、朝叩富兒門、暮隨肥馬塵、殘盃與冷炙、到處滯悲辛、主上頃見徵、欽然欲求伸、青冥却垂翅、蹭蹬無縱鱗、甚愧丈人眞、每於百僚上、猥誦佳句新、竊效貧公喜、雖甘原憲貧、焉能心快々、祇是走陵晨、今欲東入海、即將四去秦、尚憐終南山、回首滯渭濱、常擬報一飯、况懷辭大臣、白頭滯滯游、萬里誰能馴、

而して其の大言壯語は、果して能く自家の手腕の及ぶ所なるや、又其の遠引一往、白鷗滯滯の意は果して一髮名利の其後頭を牽くものなきや、未だ以て知るへからざるも、其の自ら信するの抱負は實に此の如くなりしなり、而して其の『執務不餓死、儒冠多誤身』と吟せしか如き、何そ其言の犀利にして、且つ苦凄なる、蓋男兒生れて書を讀む、寔に身を誤るの基なり、既に讀まず、又義方を解せざるに於ては、一身飄蕩に任せ、朝には東家の籬に傍ふて走り、夕には西家の錦を衣て、得々として計を得たりと爲し、曾て夢にたにも窮餓の其の身に逼るを知らざるを得へし、然れとも天の人を生ずる、亦偶然にわらず、寧ろ義方の其身に不利益なるを知るも、曾て狗盜に倣ふて其志を下さるもの、詢に羞惡の忍ふへからざるものあればなり、古來幾多の讀書兒、多く身を誤るの嘆あるもの、唯此の一問を争へはなり、而して子美の憤を發する所以、意ふに亦此に在るなり、十年三大禮賦を獻す帝之を奇として集賢院に待制せしめ、宰相に命じて文章を試ましむ、十四年西河尉に

擢てられたるも拜せず、右衛率府胄曹參軍に改めらる、又數、賦頌を上り、因て高く自ら稱道す、其言に曰く『先臣恕預以來、承儒守官十一世、迨審言、以文章顯中宗時、臣賴緒業、自七歲屬辭、且四十年、然衣不蓋體、常寄食於人、竊恐轉死溝壑、伏惟天子哀憐之、若令執先臣故事、拔泥塗之久辱。則臣之述作、雖不足鼓吹六經、先鳴諸子、至沉鬱頓挫、隨時敏給、楊雄枚舉可企及也、有臣如此、陛下其忍棄之』と、何そ其言の大にして又何そ其意迫るの甚しき、夫嚴處奇士の行なくして長く貧賤にして好て仁義を語るは、固より以て羞るに足るへしと雖、丈夫の出處、自ら其の宜き所あり、苟も其の時を得ずんば、長く窮巷に沈淪して、麋鹿と同しく群し、樵漁と共に伍するも、未だ曾て其志を害せざるなり、若し徒に其の文華に誇り、辭賦詞章の富を以て、名位爵祿を釣らむと欲せば、假令爵祿至るも、其の人品性情、既に第二に落るのみならず、名位爵祿、亦未だ必しも容易に之を享くると能はざるものあるに於てをや、唐朝文才を尙て、人の身を立て名を成さんと欲する者、乃ち好んで大言壯語を放ちて文字の雄に誇り、以て自贊自薦する者、滔々皆是なり、而して子美も亦遂に其一人たるを免ること能はず、殆んと憐むへしと爲すなり、然れとも子美既に強仕の年に當り、試に應ずれば則ち蹉跎して、貧苦交、至り、幼子亦家に餓ゆ、其情に於ける、果して如何ぞや、古來文人能く窮す、其の窮して後に文人を見る、子美窮せずんば、恐くは亦文人たると能は



ざりしなり。

是の年秋、奉先の白水郷に往き、遂に家を此に置く、尋て京に還り、冬又奉先に赴く、是の時に當り、玄宗色に感溺して、政事に怠り、乃ち楊貴妃と共に幸して華清宮に在り、邊警漸りに至るのみならず、安祿山か反形亦已に成り、國家岌々として累卵の危きに似たり、而して中外宴樂に耽りて會て覺悟せず、子美忠厚の情に堪えず、胸中の憂端、遂に字句の間に迸出して、一大長篇と爲る、是實に其の平生の本領氣魄の見るべきものとして知られたる詠懷の作なりとす。

杜陵有布衣、老大意轉拙、許身一何愚、竊比稷與契、居然成濩落、白首甘契闊、蓋棺事則已、此志常觀瞻、窮年憂黎元、歎息腸內熱、取笑同羣翁、浩歌彌激烈、非無江海志、蕭颯送日月、生逢堯舜君、不忍便永訣、當今廊廟具、構厦豈云缺、葵藿傾太陽、物性固莫奪、願惟蠶蠶室、但自求其穴、胡爲慕大鷗、擬假溟渤、以茲悟生理、獨耻事干謁、兀兀遂至今、忍爲塵埃沒、終愧巢與山、未能易其節、沉飲聊自遣、放歌破愁絕、歲暮百鍊剛、疾風萬鬪裂、天衢陰晦暎、客子中夜發、霜嚴衣帶斷、指直不得結、凌晨過鵝山、御榻在鐙帳、出尤寒栗空、蹴踏崖谷滑、瑤池氣鬱律、羽林相摩戩、君臣留歡娛、樂動殷膠葛、賜浴皆長纒、興宴非短褐、彤庭新分帛、木自寒女出、懶攬其夫家、聚飲貧城闕、帶人憶舊恩、實欲邦國活、臣如忽至理、君豈棄此物、多士盈朝廷、仁者宜戰懼、況聞內金鑰、盡在櫛犀室、中堂有神仙、煙霧蒙玉質、煖客貂鼠裘、悲管逐清瑟、勸客院師舞、霜檉壓香楫、朱門酒肉臭、路有凍死骨、榮枯咫尺異、惆悵難再述、北轍就涇渭、官渡又改轍、羣冰從四下、極目高岸兀、疑是崑崙來、恐觸天柱折、河梁幸未拆、枝撐聲繼響、行李相攀援、川廣不可越、老妻寄異縣、十口隔風雪、誰能久不顧、庶幾共饑渴、入門聞號咷、幼子饑已卒、吾嘗捨一衣、單巷亦鳴咽、所愧爲人父、無食致天折、豈知秋禾登、貧窶有存卒、生常免租稅、名不隸征伐、撫躬猶酸辛、平入閭閻府、歎息失榮徒、因念遠戍卒、憂端齊終南、瀕涸不可援、自京赴奉先縣詠懷五百字

子美の此篇、字は唯、五百字のみ、然れども、其事は則ち他の千言萬語を屬して、豊富と稱するも

の、決して悉すこと能はざる所にして、其の平生の心事本領より、時勢の日に非なるに至るまで優に一篇の中に於て、之を見ることを得へく、或は悲風の天際より來るか如く、或は寒霞の窓を叩くか如く、或は議論を以て人事を云ひ、或は叙景を以て風物を出し、淋漓傾瀉、復た餘蘊なし、是誠に杜詩の其長を見はす所にして、即ち支那韻文の雄渾沈鬱の氣を帯ひ、以て一種獨有の性質を具する所の標本として、之を見るを得べし、此篇既に此の如きか故に、古來之を評釋する者、亦甚く、今左に其一二を擇て之を記せむ。

乾隆の批評に云ふ、此と北征とは集中の鉅篇なり、辭結を據りて胸臆を寫し、蒼々莽々として一氣流轉す、其大段千里一曲の勢あり、而して筆々頓挫、一曲中に又無數の波折あり、甫、布衣の士を以て乃ち帝室に心す、而して是の時明皇政を失し、大亂已に成るも、方さに且つ君臣荒宴して、聞知することなきか若く、甫、局外より時難に蓄目し、言むと欲して不可なるもの、蓋日あり、而して一に此の詩に於て之を發す、前に平日の衷を述べて、後に當前の酸楚を寫し、中幅に於て經る所を以て綱と爲し、見る所を目と爲す、言々深切にして字々沈痛板蕩す、後未だ能く此に及ぶものあらず、此れ甫の千古に度越して、上三百篇に繼く所以のものかと、胡夏客云く、詩凡五百字にして篇中京師を發して、驪山を過ぎ、涇滑に就て奉先に過る、數十字に過ぎざるのみ、餘は皆論議感慨



を以て文を成す、此れ最も變雅の法を得て章を成すものなり、此詩、全篇議論にして、雜ゆるに叙事を以てす、北征は則ち全篇叙事にして、雜るに議論を以てす、蓋詠懷と云へば、自ら應に議論を以て主と爲すべく、北征と云へば、應に叙事を以て主と爲すべきなりと。

今此等の諸評を彙見するに、乾隆は三百篇に繼く所以と云ひ、胡夏客は變雅の法を得て章を成すと爲せり、然るに支那人の詩學に對する觀念は、一に之を詩人敦厚の旨に歸して、其の源は寔に詩の三百篇に在りとす、今子美の此篇、已に能く邦家の禍機に逼るを知るも、布衣如何とも爲すべからず、已を得ずして之を辭章に發す、而して其の辭章に發するもの、或は感慨憂憤を以てし、或は議論痛息を以てするも、亦一に忠厚の意に出でざるものなしとす、是れ諸評の以て或は三百篇に繼くと爲し、又或は變雅の法を得たりと爲す所以なり、前人の此篇に對する定論如何は、略、此の如きのみ、而して支那人の詩學を視ると、唯、單に一個の美術とせずして、則ち以て性情を陶冶するの教具と爲すことも亦此の邊に存するに似たり。

十一月祿山反す、十五年子美白水に往き、家を移して鄜州に寓す、六月長安陥り、玄宗出て、蜀に幸す、七月肅宗立て位に靈武に即き、至德と改元す、子美鄜州より出て、羸服して行在に走らむと欲し、途に賊の爲めに捕えらる、此の時に當りて、京畿四近の旁邑村落は、皆戎馬間關の場と爲

りて、長安昔日の繁華は、煙と共に散し『神堯奮天下、會見出腥臊』とは、目を世道に當るの人にあらざるよりは、何人も定めて預期せざりし所なるへし、而して弱骨特操なきの腐腸漢等は、之を好機として、或は腥賊の僞官を受る者あり、或は人の子女を掠奪するものありて、綱紀蕩然として地を掃えり、時に子美は長安の賊中に陥り居て、亂離の感に堪えず、仰て君國を憂ひては、日月何の時にか復た明なるを知らず、俯して家を思ふては、兒女の何の狀を爲すかを悲み、千百の愁緒は、一時に心目に集りて、其の情に勝えず、而して之を洩すものは、一に微言幽旨の間に在りしのみ。

國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪、(春望)

今夜鄜州月、團圓只獨看、遙憐小兒女、未解憶長安、香露雲鬟濕、清輝玉臂寒、何時倚虛幌、雙照淚痕乾、(月夜)

少陵野老吞聲哭、春日潛行曲江曲、江頭宮殿鎖千門、細柳新蒲滿綠隄、憶昔霓旌下南苑、苑中萬物生顏色、昭陽殿裏第一人、同

坐隨君侍君側、裁前才子帶弓箭、白馬嚼齧黃金勒、翻身向天仰射雲、一笑正墜雙飛翼、明眸皓齒今何在、血污遊魂歸不得、清渭

東流劍閣深、去住彼此無消息、人生有情淚沾臆、江水江花豈終極、黃昏胡騎踏滿城、欲往城南望城北、(哀江頭)

等の作の如き、最も人口に膾炙する所にして、實に此時に成るものなり、夫開元、天寶の際は、唐朝文華の全盛時代なると同時に、又唐朝危亂の回轉期なりしなり、何となれば之を外にしては、回紇、吐蕃の邊寇あり、之を内にしては祿山の亂ありて、其影響を政度文物の上に及ぼせしと、固より淺少にあらず、然るに其の詩學の一道に於けるか如きは、尤も意外の好影響を及せしものありし



に似たり、蓋當時人文繁盛の際として、其聲詩の上に顯はるゝものも、亦皆流暢華麗にして太平盛世の音にあらざるはなかりしに、其の亂に及んでや、忽ち時勢の變態は人心を刺衝して、悲壯沈鬱の氣を増さしめたるなり、而して子美は最も其刺撃を受けたるものなり、故に子美の詩、殊に沈鬱の韻多し、子美の長安城中に在りしとは殆んど一年に餘れり、此の如くにして、至德二年夏四月に亡けて鳳翔に至り、帝に行在所に謁して、左拾遺に拜せらる、其喜達行在所三首は、此時の作に係るものにて即ち下の如し。

西憶岐陽信、無人送却迴、眼穿當落日、心死著寒灰、霧樹行相引、蓮峰望忽開、所親驚老瘦、辛苦賊中來、  
 愁思胡笳夕、淒涼漢苑春、生還今日事、問道暫時人、司隸章初視、南陽氣已新、喜心翻倒極、鳴咽淚霑巾、  
 死去憑誰報、歸來始自憐、猶瞻太白雪、喜遇武功天、影靜千官裏、心懸七校前、今朝漢社稷、新數中興年、  
 子美既に賊を脱して行在所に至り、又官に拜せられたりければ、神魂も亦稍、定る所あり、因て室家の安否を思ひて述懐の詩あり、

去年潼關破、妻子隔絕久、今夏草木長、脫身得西走、麻鞋見天子、衣袖露兩肘、朝廷慙生還、親故傷老醜、涕淚受拾遺、流離主恩厚、柴門雖得去、未忍即開口、寄書問三川、不知家在否、比同同福禍、殺戮到雞狗、山中瀟茅屋、誰復依戶牖、摧頽蒼松根、地冷骨未朽、幾人念性命、盡室豈相偶、嶽盜猛虎場、鬱結迴裴首、自寄一封書、今已十月後、反長消息來、寸心亦何有、漢運初中興、生平老耽酒、沈思觀會處、恐作窮獨叟、

既にして家書亦至りて消息始めて通せり、六月同僚の裴薦等と連署して、岑參を薦めて曰く、臣等竊に岑參を見るに、識度清遠にして、議論雅正なり、佳名蚤く上り、時輩の仰く所なり、今や諫諍

の路、大に開けたるも、獻替の官、未だ備らず、恭しく惟れば、近侍は實に茂材に籍る、臣等謹て閣門に詣り、狀を奉して陳薦し、以て聞すと、參之に因て右補闕を授けらる、而して子美の詩壇の羽翼たる岑參との交は、此の際に成れり、八月鳳翔より鄜に還りて家に省す、鄜州は鳳翔の東北に在り、而して子美の心血文字として、彼の赴奉先詠懐と共に雄辯の名ある北征は、實に此の時に成るものなり。

皇帝二載秋、閏八月初吉、杜子將北征、蒼茫問家室、維時遭艱虞、朔野少暇日、願懸恩私被、詔許歸蓬藿、拜辭詣闕下、怵惕久未出、雖乏諫諍姿、恐君有遺失、君誠中興主、經綸固密勿、東胡反未已、臣甫憤所切、揮涕戀行在、道途猶恍惚、乾坤含瘡痍、憂虞何時畢、靡靡踰阡陌、人烟眇蕭瑟、所遇多被傷、呻吟更流血、迴首鳳翔縣、旌旗晚明滅、前登突山頂、腰得飲馬窟、邪邪入地底、涇水中瀉溢、猛虎立我前、蒼崖吼時裂、菊垂今秋花、石戴古車轍、青雲動高興、幽事亦可悅、山果多瓊細、羅生雜橡栗、或紅如丹砂、或黑如點漆、雨露之所濡、甘苦齊結實、細思桃源內、益歎身世拙、坡陀望鄜時、巖谷互出沒、我行已水濱、我僕猶木末、鷗鳥鳴黃桑、野鼠拱亂穴、夜深經戰場、寒月照白骨、潼關百萬師、往者散何卒、遂令半秦民、殘害爲異物、况我墜胡塵、及歸帝華髮、經年至茅屋、妻子衣百結、慟哭松聲迴、悲泉共幽咽、平生所嬌兒、顏色白勝雪、見爺背面啼、搥脚脚不礙、牀前兩小女、那能才過膝、海闊拆波瀾、春潮移曲折、天吳及紫微、顛倒在短褐、老夫情懷惡、嘔泄臥數日、那無囊中帛、救汝寒凍慄、粉黛亦解苞、衾裯稍雜列、瘦妻面復光、癡女頭自飾、學母無不爲、曉妝隨手抹、移時施朱鉛、狼籍畫眉澗、生還對童稚、似欲忘飢渴、問事耽挽髮、誰能即呻吟、翻思在賊愁、甘受雜亂語、新歸且慰意、生理焉能脫、至寶猶蒙塵、幾日休練卒、仰觀天色改、坐視妖氛溢、陰風西北來、慘澹隨回轡、其王願助順、其俗善馳突、送兵五千人、驅馬一萬匹、此輩少爲貴、四方服勇決、所用皆鷹隼、破敵過箭疾、聖心頗虛佇、時臨氣欲奪、伊洛指掌收、四京不足拔、官軍請深入、善銳伺俱發、此舉開背徐、旋瞻略恒碣、吳天積霜霰、正氣有肅殺、驅轡亡胡歲、勢成擒胡月、胡命其能久、皇綱未允絕、憶昨狼狽初、事與古先別、姦臣竟效鵠、同惡隨鴻析、不聞夏殷衰、中自誅褒姒、周漢復再興、宜光果明哲、桓桓陳將軍、仗劍奮忠烈、微爾人盡非、於今國猶活、淒涼大同殿、



寂寞自默園、都人望翠華、佳氣向金闕、國險固有神、掃灑數不缺、煌煌太宗業、樹立甚宏遠(北征)  
吾人既に上段に於て、赴奉先詠懷を出し、且つ附するに、諸家の批評を以てしたり、今又讀者に向て此の大篇を紹介するの機を得たれば、例に依りて、亦二三の批評を抄録せざるべからず、子美の集中に在りて、最も長篇大作と稱すべきものは既に述べたるか如く、實に詠懷と此篇なりとす、而して此篇の特色は、直に胸臆を發揮して、渾灑流轉、徒に句を煉り詞を烹るを以て、工を爲さざるに在り、乾隆の批評に曰く、排天幹地の力を以て、屬詞比事の法を行る、萬物を具備して大空を横絶す、前に古人なく後に來者なし、五言ありてより此を以て大文字と爲さざるを得ざるなりと、李因篤曰く、其才は則ち海涵地負、其力は則ち排山倒岳、極尊嚴の處あり、極瑣細の處あり、繁は則ち千門萬戸の象の如く、簡は則ち急弦促柱の悲の如し、元河南が一代の興亡を具して、風雅と相表裏すと云ふは、知言と云ふへしと、之を要するに、北征の一篇は、寔に子美が一腔の血性を見るべきものにして、詩聖の目、蓋亦此に存す。

十月官軍西京を收め肅宗京に還る、子美家に在て韶を聞き、脚より京に至る、三年乾元と改元す、是より先き、房琯宰相と爲り、請ふて自ら師を帥めて賊を討し、陳濤斜に敗れて相を罷めらる、子美、瑄と布衣の交あり、是に至りて、上疏して瑄が罪を細なりと爲し、宜しく大臣を罷免すべから

すと云ふ、賀蘭進明因て之を譖す、肅宗怒て瑄を貶して刺史と爲し、子美を出して華州司功參軍と爲す、子美因て金光門を出て、親故と辭別し、往事を回想して詩を作る、

此遺書歸順、四郊胡正煩、至令猶破膽、應有未招魂、近侍歸京邑、移官豈至尊、無才自衰老、駐馬望千門、

是れ正さに子美か風雅の遺を得ると稱せらる、所以にして、其一飯、君を忘れざるの情、其身、放たると雖、敢て一毫の怨を君に歸せず、明かに讒毀の貶黜に遭ふを知ると雖、才無きを以て自ら解くは、尤も其深厚の意を見るなり、蓋士の明識を抱き、義を見ては侃々諤々として一身の利害を顧みず、方寸の志を致さんと欲するも、聞く者毎に耳目親近の私情に蔽はれて、唯に之を善とせざるのみならず、却て讒口毒舌を信して、忠言を疎んずるもの、古來往々にしてこれあり、彼の賀蘭進明、何人ぞ、奸佞邪智の資を以て、正人方直を忌み、誣言毒説を出して、君子の人を中傷す、其腐腸俗肺、固より論するに足らずと雖、人の上に立て幾百の群雄を驅使する者、乃ち耳目浸潤の譖を辨せず、以て腐受の訴を信するか如きは、豈嘆すべきの至ならずや、嗚呼時事以て知るべきのみ、二年春官軍鄴に潰え、朝廷兵を調すると益々急なり、而して子美か樂府詩の詩として知られたる、三吏三別の篇什は、皆鄴師敗後の事を言ふを見れば、意ふに蓋此際に成りしものならむ、今左に各一首を節録す、



暮投石壕村、有吏夜捉人、老翁踰牆走、老婦出門看、吏呼一何怒、婦啼一何苦、聽婦前致詞、三男鄴城戍、一男附書還、二男新  
戰死、存者且偷生、死者長已矣、室中更無人、惟有乳下孫、有孫母未去、出入無完裙、老嫗力雖衰、請從吏夜歸、急應河陽役、  
猶得備晨炊、夜久語聲絕、如聞泣幽咽、天明登前途、獨與老翁別(石壕吏)

免絲附蓬麻、引蔓故不長、嫁女與征夫、不如無路傍、結髮爲君妻、席不煖君牀、暮婚晨告別、無乃太匆忙、君行雖不遠、守邊赴  
河陽、妾身未分明、何以拜姑嫜、父母養我時、日夜令我藏、生女有所歸、鴛鴦亦得將、君今往死地、沉痛迫中腸、誓欲隨君去、  
形勢反蒼黃、勿爲新婚念、努力事戎行、婦人在軍中、共氣恐不揚、自嗟貧家女、久致羅縵裳、羅襪不復施、對君洗紅妝、仰視百  
鳥飛、大小必雙翔、人事多錯逆、與君永相望(新婚別)

子美既に官に至る、時に關輔饑て穀食踊貴す、二年秋竟に官を棄て去て秦州に客となる、時に東都  
の舊廬は殘毀して、故郷歸るへからざるを以て、是れより長く西京に別る、而して子美の五律中、  
最も連串渾成の稱ある、秦州雜詩の作は、此の時の吟に係る、是の時に當りて、子美か文章第一の  
契交たる李太白は、永王璘の事に坐して、夜郎に長流せられたれば、乃ち之を思ふて、天末懷李白  
の作あり、

涼風起天末、君子意如何、鴻雁幾時到、江湖秋水多、文章憎命途、魑魅喜人過、應共冤魂語、投詩贈汨羅、  
又夢李白二首あり、

死別已吞聲、生別常惻惻、江南瘴癘地、逐客無消息、故人入我夢、明我長相憶、恐非生平魂、路遠不可測、魂來楓林青、魂返關  
塞黑、君今在羅網、何以有羽翼、落月滿屋梁、猶疑照顏色、水深波溟濛、無使蛟龍得、

浮雲終日行、遊子久不至、三夜頻夢君、情親見君意、昔歸常局促、苦道來不易、江湖多風波、舟楫恐失墜、出門搔白首、苦負平  
生志、冠蓋滿京華、斯人獨憔悴、孰云網恢恢、將老身反累、千秋萬歲名、寂寞身後事、  
而して其の高適、岑參の親交に寄する詩中にも『故人何寂寞、今我獨淒涼、死去亦難盡、秋來興甚

長』の句ありて、舊故落莫、身世の感に堪すえ、其窮苦の状は、山に登りて薪を採り、林に入りて  
橡栗を拾ひ、以て自ら給するに至る、其の同谷縣に寓居するや歌七首を作る、

有客有客字子美、白頭亂髮垂過耳、歲拾橡栗隨狙公、天寒日暮山谷裏、中原無書歸不得、手脚凍皸皮肉死、嗚呼一歌兮歌已哀、  
悲風爲我從天來、

長幹長幹白木柄、我生託子以爲命、黃精無苗山雪盛、短衣數挽不掩脛、此時與子空歸來、男呻女吟四壁靜、嗚呼二歌兮歌始放、  
鄰里爲我色惆悵、

有弟有弟在遠方、三人各瘦何人強、生別展轉不相見、胡塵暗天道路長、東飛鴛鴦後鷓鴣、安得送我置汝傍、嗚呼三歌兮歌三發、  
汝歸何處收我骨、

有妹有妹在鐘離、良人早沒諸孤懸、長淮浪高蛟龍怒、十年不見來何時、扁舟欲往箭滿眼、杳杳南國多旌旗、嗚呼四歌兮歌四奏、  
林猿爲我啼清悲、

四山多風溪水深、寒雨颼颼枯樹濕、黃昏古城雲不開、白狐跳梁黃狐立、我生何爲在窮谷、中夜起坐萬感集、嗚呼五歌兮歌正長、  
魂招不來歸故鄉、

南有龍兮在山湫、古木龍盤枝相樛、木葉黃落龍正蟄、蝮蛇東來水上遊、我行怪此安敢出、拔劍欲斬且復休、嗚呼六歌兮歌思迴、  
溪壑爲我迴春姿、

男兒生不成名身已老、三年饑走荒山道、長安雍相多少年、富貴應須致身早、山中儒生舊相識、但話宿昔傷懷抱、嗚呼七歌兮歌終  
曲、仰視皇天白日迴、

是の年冬、蜀に入りて成都に流落す、次年上元と改元す、上元元年成都に在りて、地を城西の浣花  
溪に卜し、草堂を營んで之に居る、然れとも、此地倚るへき者なく、間、出て、新津、青城の間に  
往來して食を謀る、會、嚴武劍南東西川の節度となりて成都に至る、子美往ひて之に依る、乃ち奏



して節度參謀撰校尚書工部員外郎と爲す、武は子美と世蕃ありしを以て待遇甚隆なりき、唐史氏曰く、武親しく子美の家に至るに、子美放恣にして自ら檢束せず、或は巾せずして之を見ることあるに至る、性又褊躁傲誕なり、曾て醉に憑て武の牀に登り、瞪視して曰く嚴挺之乃ち此の兒ありと、武も亦急暴なりと雖、務て忤ふとを爲さず、然れども中心頗る之を衒み、竟に子美を殺さんと欲するに至れりと、然れども是れ未だ以て容易に信を置くに足らず、蓋武か故舊に於けるの情、厚からずと謂ふへからず、假令ひ其幕中に於ける、或は未だ禮數を以て相拘はるとありしを免れずと雖、子美たる者、亦如何と驟かに之に禮容なきを得んや、今其集中頻りに武に贈るの詩あるを見ても、其の遇に感せしの意を見るに足るなり、唯、子美褊躁にして、武も亦寛大の長者にあらず、時に或は意氣の扞格ありしを免れざるへし、而して其の極頂點に上りしは、殆んど遺閭奉皇嚴鄭公二十韻の時に在るか如し、其の辭氣を案するに、固に既に其の辭職の張本と見るべきものあり、斯くて永泰元年の春に至りて、子美は果して武か幕を辭して草堂に歸れり、然れども武か卒するに及ては乃ち走りて親しく之に哭せり、後に亦八哀の詩を作りて武を懷へり、然らば子美の武に於ける、豈其遇を忘れんや、且武も亦果して子美を殺さんと欲せば、豈亦何の憚る所かあらんや、況んや子美も亦嘗て己を殺さんと欲せし者を稱すること、豈驟かに八哀の詩の如きに至らんや、故に吾人は斷し

て知る、唐史氏の未だ深考せざりしとを、武既に卒して崔旰等亂を起し蜀中大に亂る、子美其家を提て亂を避け、雲安より夔州に入る、時に代宗の大曆元年にして、子美年既に五十五、頽然たる一老翁なり、然れども所謂夔州以後の詩、老去りて漸く詩律に細かなるもの、殊に其の七言近體に於て之を見る、秋興、詠懷、古跡、諸將等の篇の如き、其の尤も鴻製の稱あるものなり、今一一之を録せず、唯單に秋興八首を聯擧して、他は省略に従ふ、

玉露凋傷楓樹林、巫山巫峽氣蕭森、江間波浪兼天湧、雲上風雷接地陰、叢菊兩開他日淚、孤舟一繫故園心、寒衣處處催刀尺、白帝城高急暮砧、  
夔府孤城落日斜、每依北斗望京華、聽猿實下三聲淚、奉使虛隨八月槎、畫省香爐過伏枕、山樵粉蝶隱悲笳、請看石上藤蘿月、已映洲前蘆荻花、  
千家山郭靜朝暉、日日江樓坐翠微、信宿漁人還泛泛、清秋燕子故飛飛、匡衡抗疏功名薄、劉向傳經心事違、同學小年多不殘、五陵衣馬自輕肥、  
聞道長安似奕棋、百年世事不勝悲、王侯第宅皆新主、文武衣冠異昔時、直北關山金鼓震、征西車馬羽書馳、魚龍寂寞秋江冷、故國平居有所思、  
蓬萊宮闕對南山、承露金盤霄漢間、西望瑤池降王母、東來紫氣滿函關、雲移雉尾開宮扇、日繞龍鱗識聖顏、一臥滄江驚歲晚、幾回青瑣點朝班、  
瞿唐峽口曲江頭、萬里風煙接素秋、花萼夾城通御氣、芙蓉小苑入邊愁、珠簾繡柱圍黃鶴、錦纜牙樁起白鷗、迴首可憐歌舞地、秦中自古帝王州、  
昆明池水漢時功、武帝旌旗在眼中、織女機絲虛夜月、石鱗甲動秋風、波漂菰米沉雲黑、露冷蓮房墜粉紅、關塞極天惟鳥道、江湖滿地一流翁、



昆五御宿自遠遊、紫閣峰陰入漢陵、香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝、佳人拾翠春相問、仙侶同舟晚更移、綵筆昔曾干氣象、白頭吟望苦低垂、

子美既に老ひ、輾珂落托、江湖に飄零して、靜居に暇あらず、罨塘より出て、江陵を下り、沅湘に游て、衡山に登る、竟に郴州に往て、舅氏崔偉に依らんと欲し、因て來陽に客たりし時に、大水遽に至り、旬日食を得ず、縣令之を知り、書を致して酒食を餽る、子美乃ち詩を爲て謝を致す、或は云ふ縣令牛炙白酒を饋りにしに、子美大醉して一夕にして卒すと、又或は云ふ然らず、其の風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南諸友の什は、實に子美か絶筆なり、而して其篇は來陽より北に還らむと欲して湖中に成れるものなりと、今其孰れか是なるを審にせず、之を要するに子美は實に代宗の大曆五年秋冬の際に五十九歳を以て竟に窮苦坎壈の間に卒せしなり、然れとも其音容は髣髴として長く一千四百餘篇の間に存し、以て今日に至れるなり、而して其性情行徑と當時の社會に於ける一半の狀況とは亦一に詩篇の中に存せり、是世に詩史の稱ある所以なりとす。

李杜兩家の詩體と性情氣質、各異るありと雖、其の異曲同工、唐三百年、詩壇の雙星として永く光を文學史上に放つに至りては洵に以て千古の奇觀と稱せざるべからず、當時の羣雄、王維諸人より以下皆遠く兩家の下風に趨走して、曾て雄を其間に競ふ能はざるもの、豈兩家の才の雄なると氣の厚きとに因らすんは安んそ能く此に至らんや、亦以て尙ふべしと爲すのみ。

(三) 孟浩然、王昌齡、高適、岑參、王維、及び其他の諸家

孟浩然 は襄陽の人なり、少ふして節義を好み、喜て人の患難に當る、鹿門山に隠れ、五言詩に工なり、四十にして京師に出て諸名士の間に遊ぶ、嘗て秘書聯句を集む、浩然曰く「微雲淡河漢、疎雨滴梧桐」と、衆欽服す、張九齡王維等極めて之を稱道す、維、金鑾に待詔し、一旦私かに浩然を邀入れて、風雅を商榷す、俄かに玄宗臨幸す、浩然錯愕して床下に伏匿す、維敢えて隠さず、因て之を奏聞す、帝喜て曰く、朕素より其人を聞きしも、未だ見ざりきと、詔あり、出て、再拜す、帝問て曰く、卿、詩を將ち來るやと、對て曰く、偶、齋さす、即ち命して近作を吟せしめしに、而して『不才明主棄、多病故人疎』の句に至り、帝慨然として曰く、卿仕を求めず、朕何ぞ嘗て卿を棄てんやと、因て命して南山に歸らしむ、開元の末に王昌齡襄陽に遊び、相見て歡すると甚しく、浪情宴讌、莫逆の義を極めたりと云ふ、既にして道を病み卒す、後王維、浩然の像を鄂州に畫て、浩然亭を作る、咸通中、鄭絳と云ふ者あり、以謂く賢者の名、斥すべからずとて、名を孟亭と改む、其詩清雅にして、匠心獨妙、五言詩は尤も長する所なり、同時知名の士に王昌齡あり、位官並に甚く顯れず。

王昌齡 字は少伯、大原の人なり、進士に第して秘書郎に補せられ、又宏辭に中り、汜水尉に遷



る、後に細行を護せざるを以て、龍標尉に貶せらる、世の亂るゝに及ひて郷里に還り、刺史閻丘曉に忌れて殺さる、昌齡詩に工なり、其詩、緒密にして思清く高適、王之渙等と名を齊ふし、時に王江寧と稱せらる、蓋其嘗て江寧令と爲りしを以てなり、而して其七言絶句の如き、深情苦恨、之を玩て盡るとなく、世之を稱して唐人の騷語と爲すと云ふ。

高適 字は達夫、一の字は仲武、涪州人なり、少ふして拓落、小節に拘らす、常科に預るとを耻ちて、跡を博徒に隠す、然れとも才名遠く聞ゆ、後舉られて封丘尉と爲り、諫議大夫に擢らる、氣を負ひ敢言す、李輔國其才を忌む、蜀亂るゝに及ひ、出されて蜀彭二州の勅史と爲り、還て左散騎常侍となりて永泰の初に卒す、適氣節を尙ひ、王霸を語り衰々として厭はず、時の多難に遭ふて、功名自ら許す、嘗て汴州を過て、李白、杜甫と會飲し、吹臺に登て悲歌慷慨す、人以て測ると莫かりしと云ふ、其詩、悲壯を以て勝ち、岑參と風骨相似たり。

岑參 は南陽人なり、左補闕起居郎に官し、出て、嘉州刺史と爲る、後に職方郎中兼侍御史に拜せられ、蜀に終ふ、參戎幕を佐けて、鞍馬烽塵の間に往來すること十餘載、備さに征行離別の情を極む、其間に於て史籍を誦覽し、工に文を屬す、詩調尤も高く、尤も邊塞の作に長す、之を讀めば人をして恍惚懷感せしむるものあり、高適と名を齊ふして世に之を高岑と稱す。

王維 字は摩詰、太原祈の人なり、九歳にして辭を屬することを知り、草隸に工なり、又畫を善くす、張九齡、政を執る時、右拾遺に擢らる、天寶の末、給事中と爲り、祿山の亂に、賊に得られ藥を服して下痢し、僞て瘡すと稱す、祿山素より其才を知り、迎へて洛陽に置き迫て僞官を授け、大に凝碧池に宴す、時に悉く梨園の弟子を召す、諸工皆泣く、維聞て痛悼して『萬戸傷心生野煙、百官何日再朝天、秋槐葉落空宮裏、凝碧池頭奏管絃』の詩を賦す、賊平て僞官を授かりし者、皆罪せらる、當時維の詩、行在に聞えたりしかは、特に太子中允に下遷せしのみにして、後に尙書右丞に遷り上元の初に卒す、年六十一、其疾甚しき時、弟縉鳳翔に在りしかは、書を與て別を爲し、又親故に書數幅を遺し、筆を停て化せりと云ふ、其詩遠韻饒く、論者之を妙品上乘と爲す、畫思も亦然り、山水平遠、雲勢石色、皆天機の到る所にして學て能すへきにあらず、自ら詩を作て曰く『宿世謔詞客、前身應畫師』と、蘇東坡も亦維を評して曰く『詩中有畫、畫中有詩』と、之を要するに維の詩、意興を主として、字句亦之を苟もせざるものなり、而して後世神韻を主とする者、皆維を奉して歸本と爲す、維又篤志、佛に奉す、蔬食素衣、妻を喪て娶らず、孤居三十年、母亡して後、其別墅の輞川に在るものゝを表して、寺院となせりと云ふ。

儲光羲 は兗州の人にして官は監察御史に至れり、其詩、陶を學ひて其の眞樸を得たり、亦是王



右丞と道を分て鑑を運ぬるもの、李傾は東川の人、官は新郷尉に至れり、常建は開元十五年の進士にして肝胎尉に官せり、頤と詩品相似て並ひに超凡を以て長を見る、崔曙は宋州の人、開元二十六年の進士、崔灝は汴州の人、亦開元間の進士にして官は司勳員外郎に至れり、賈至は字を幼鄰と云ふ、洛陽の人なり、官は散騎常侍に至りて卒せり、王之渙は并州の人、陶翰は潤州の人。

以上皆是盛唐の名家にして其他、羣豪、林の如くに立ち、詞采、雲の如くにでてし、今一一例舉せず、下に五六の作例を掲げて聊、其盛を窺ふに便ならしめんとす、然れとも亦一二を千百に存するものなれば、固より以て讀者の意を満たすに足らざるを知る。

山光忽西落、池月漸東上、散髮乘夕涼、開軒臥閒敞、荷風送香氣、竹露滴清響、欲取鳴琴彈、恨無知音賞、感此懷故人、中宵勞夢想(孟浩然夏日晚亭懷李大)

人日題詩寄草堂、遙憐故人思故鄉、柳條弄色不忍見、梅花滿枝空斷腸、身在南蕃無所預、心懷百憂復千慮、今年人日空相憶、明年人日知何處、一臥東山三十春、豈知香劍老風塵、龍鐘還忝二千石、槐爾東西南北人(高適人日寄杜二拾遺)

君不聞胡笳聲最悲、紫髯綠眼胡人吹、吹之一曲猶未了、愁殺樓蘭征戍兒、涼秋八月蕭關道、北風吹斷天山草、真箇山南月欲斜、胡人向月吹胡笳、胡笳怨兮將送君、秦山遙望隴山雲、邊城夜々多愁夢、向月胡笳誰喜聞(岑參胡笳歌送顏真卿使赴河隴)

清晨入古寺、初日照高林、曲徑通幽處、禪房花木深、山光悅鳥聲、潭影空人心、萬賴此俱寂、惟聞鐘磬音(常建破山寺後禪院)

昔人已乘黃鶴去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠、晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲、日暮鄉關何處是、煙波江上使人愁(崔灝黃鶴樓)

漢文皇帝有高臺、此日登臨曙色開、三晉雲山皆北向、二陵風雨自東來、關門令尹誰能識、河上仙翁去不回、且欲近尋彭澤宰、陶然共醉菊花杯(崔曙九日登望仙臺呈劉明府)

渭水自繁秦塞曲、黃山舊繞漢宮斜、驪輿迥出千門柳、關道迴看上苑花、雲裏帝城雙鳳閣、雨中春樹萬人家、爲乘陽氣行時令、不

是宸遊玩物華(王維奉和聖製從蓬萊向殿閣道中留春雨申春望之作應制)

黃河遠上白雲間、一片孤城萬仞山、羌笛何須怨楊柳、春光不度玉門關(王之渙涼州詞)

楓岸粉々落葉多、洞庭秋水晚來波、乘興輕舟無近遠、白雲明月月中娥(賈至巴陵與李十二袁九泛洞庭)

四宮夜靜百花香、欲卷珠簾春恨長、斜抱雲和深見月、朦朧樹色隱昭陽(王昌齡四宮春怨)

第四節 中晚諸家

中晚の諸家に在りては、錢起、韋應物、劉長卿、孟郊、白居易、劉禹錫、杜牧、李商隱の徒の如き皆能く一時に呼號して、詩壇の雄將と稱せられし者なり、而して韓退之、柳子厚の如きは、唐朝第一の散文家たると同時に、又能く中唐詩人の驍傑たるもの、蓋韓詩の原本する所は雅頌に在りて、其學問才氣は、以て大に厭辭を暢はすに足れり、而して其風骨の峻嶒として、橫矯奇峻なるは、洵に李杜以後の第一人と稱するに足る、古人李杜の神を得て、其貌を襲かすと爲すもの、頗る的確と云ふへし、只其豪放餘ありて、深婉足らざるは、昌黎の毎に病とせらるゝ所なり、然れとも鷲鳥には自ら鷲鳥の氣勢あり、豈に故らに之に望むに、鳩鴉の溫柔を以てすへけむや、之を要するに、粗險の中に、一種峻刻の處あるは、這老文章の本色なり、頼山陽は、昌黎を崇宗せると同時に、尤も其詩に深きものなり、其の調衡嶽窟の作を評して曰く、此れ獨り詩の法とすへきのみならず、公の氣魄、天地に俯仰して、詐る所なきものなりと、試に其詩を誦するに、奇氣人を襲ふ、東坡の所謂



力能く衡山の雲を開くもの、誠<sup>まこと</sup>に其<sup>その</sup>譽<sup>うた</sup>を見るに足るなり、蓋亦我讀者の必らず誦せんことを欲する所なるべし、

五岳祭秩皆三公、四方環鎮嵩當中、火維地維足妖怪、天假神柄專其雄、噴雲泄霧收朝暉、我來正逢秋雨節、陰氣晦昧無清風、潛心默禱若有應、豈非正直能感通、須臾靜掃衆崑崙、仰見突兀撐霄空、紫蓋逶迤接天柱、石廬騰輝耀神淵、森然動魄下馬拜、松柏一迤邐雲宮、粉牆丹柱動光彩、鬼物圖畫填青紅、昇階儼儼薦脯酒、欲以肅禱明其衷、唐令老人識神意、唾肝俛仰能鞠躬、手持杯蛟尊我擲、云此最吉餘難同、冥運靈荒幸不死、衣食纒足長終、侯王將相豈久絕、神縱欲福難爲功、夜投佛寺上高閣、星月掩映雲曠曠、猿啼鐘動不知曙、杲杲寒日生于東(詔衡嶽廟遂符嶽寺置門樓)

又其五言中に在りて雄篇の稱ある、夫の元和聖德詩の如きは、語を屬すること一千二十四字、辭嚴に義偉なりと雖、問、指議の免る能はざるものあり、南山詩に至りては氣脈逶迤して、筆勢竦峭、古來の批評家、以て直に杜子美の北征と韻類するに足ると爲せり、孫辛老嘗て子美の北征を以て南山に勝ると謂ふ、王平甫は南山を以て北征に勝ると爲し、終に相服すること能はず、時に黃山谷尚少ふして坐に在り、乃ち曰く、若し工巧を論せば、北征、南山に及はず、若し一代の事を書し、以て國風雅頌と表裏を相爲さむには、則ち北征無かるへからず、而して南山は作らずと雖、未だ害あらざるなりと、二公の論、遂に定れりと云ふ、然るに今文學上より之を論せむには、其工巧を取らずして、其れ將た何をか取らむや、夫國風雅頌を以て詩の歸本と爲すものは、特に支那人一種の詩教の意に出るものにして、文學上に於ける詩、即ち韻文の性質に於て、何かあらむ、蓋詩三百は、

仲尼の認て以て教學上に有益なりと爲せるものに係れば、仲尼の刪定外なる逸詩の如き、固より未だ必ずしも雅頌の規矩を存すとせざるなり、而して安んぞ知らむ、其逸詩に於て、現存の三百六篇よりも、文學上更に幾等の好詩ありしとを、然らば所謂雅頌は、之を仲尼好尚の詩體と稱するは則ち可なるも、之を支那本來固有の詩體として、獨り標準を此に取るは、則ち謬れりと云ふべし、之を譬ふるに有力の士ありて方略上曲謹溫柔の人を尙ふに、若し豪放奇崛の徒ありて、曾て其の範圍の内に局從すること能はずとせむには直に、這の好漢を以て一個の好人物と爲すと能はざるか、豪放奇崛の曲謹溫柔と其性質を異にせると固より論なく、曲謹溫柔は順使するに便なるも、豪放奇崛は細墨に中り難きものあり、然るを一家の好尚を以て是非の標準を此に取り以て去取を爲さば、其失ふ所豈少しとせむや、故に吾人は將さに云はむと欲す、仲尼以後の論詩家は、皆等しく敦厚の詩教の範圍に味沒せられて曾て醒悟せず、更に以て開拓すべきの廣原あるを知らざる者なりと、今南山詩を出して、昌黎の才力が如何に雄大にして、且奇拔なりしかを知らしめんと欲す、

吾聞京城南、按維群山圖、東西兩際海、巨細難悉究、山經及地志、茫昧非受授、圓辭試提挈、挂一念萬漏、欲休諒不能、粗叙所經視、嘗昇崇丘望、戢戢見相濤、晴明出稜角、縷脉碎分縷、蒸嵐相瀆洞、表裏忽通透、無風自飄簸、融液照柔茂、橫雲時平澗、點點露數圃、天空淨俯眉、濃綠畫新就、孤標不嶮絕、海浴瀟颯鳴、春陽滑沮洳、濕漉吐深秀、巖巖雖擗舉、輒弱斯含附、夏炎百木盛、蔭澗增埋覆、神靈日歎歎、靈氣爭結搆、秋霜豈刻鑿、隳卓立飛旋、參差相疊置、剛耿凌宇宙、冬行雖幽鑿、冰雪工琢鑿、新曠照危峨、悠丈恒高表、明昏無停暝、頃刻異狀候、四兩雄太白、突起炎明燄、藩都祀德運、分宅占丁戊、迢遙越坤位、既許陪



乾寶、空虛寒院、風氣散搜、朱維方鳩日、陰陰懸繡、昆明大池北、去規偶晴、歸時窮俯視、倒側因清、微瀾動水面、  
 隨風飄搖、驚呼惜被碎、仰喜財不、前尋徑杜、金殿華原、崎嶇上軒、始得觀覽富、行行將遠、嶺嶺互走、鬱然思  
 坳裂、擁掩離怨、巨靈與穿、遠期必得、還疑造物意、固履蓄精神、力雖能排、雷電怯呵、攀絲脫手足、斷壁抵橫、  
 茫如試矯首、掃生而愁、威容震蕭、近新迷遠、拘官計日月、欲進不可、因緣窺其、凝法閱陰、魚鯉可俯、神物安  
 敢、林柯有脫、欲隨鳥、爭銜、投、旋、遊、特、前、  
 探、初、時、淚、峻、直、上、若、雲、步、推、馬、斷、且、復、若、  
 退、所、左、右、杉、葉、陀、羅、吳、蘇、介、胃、專、心、懷、平、道、脫、險、逾、避、及、昨、來、逢、清、露、宿、願、竹、始、割、離、離、歸、家、頂、條、因、維、  
 前、低、割、開、關、細、細、堆、飛、或、迎、若、相、從、或、感、若、相、關、或、安、若、呖、伏、或、疎、若、驚、確、或、散、若、瓦、解、或、赴、若、驅、  
 馬、或、背、若、相、惡、或、向、若、相、仇、或、亂、若、抽、符、或、燥、若、注、矣、或、錯、若、拾、珠、或、纏、若、柔、積、或、羅、若、星、離、或、碎、若、  
 賭、勇、前、勝、先、強、勢、已、出、後、鈍、唯、語、或、如、帝、王、親、遊、集、朝、賤、幼、雖、親、不、親、雖、遠、不、悖、或、如、臨、食、案、肴、核、粉、  
 九、原、墳、墓、包、柳、或、紫、若、益、畏、或、揭、若、蠶、極、或、覆、若、曝、曬、或、顧、若、戲、龍、或、翼、若、搏、鷲、或、齊、若、友、朋、或、隨、若、  
 或、進、若、流、落、或、顧、若、留、或、反、若、仇、讎、或、密、若、婚、媾、或、微、若、蛾、冠、或、駭、若、舞、袖、或、吃、若、戰、陣、或、圍、若、  
 北、首、或、如、火、烹、燔、或、若、氣、饋、餽、或、行、而、不、羈、或、遠、而、不、收、或、斜、而、不、倚、或、馳、而、不、鼓、或、赤、若、禿、  
 或、若、卦、分、離、或、前、橫、若、劍、或、後、斷、若、劍、延、延、離、又、刷、夫、夫、叛、還、還、嗚、嗚、魚、關、落、落、月、經、宿、關、關、  
 初、就、開、張、偶、偶、誰、勸、借、劍、裁、補、而、巧、戮、力、忍、勞、疾、得、非、施、斧、斤、無、乃、假、阻、現、鴻、荒、竟、無、傳、功、大、  
 歎、與、變、然、作、詩、歌、惟、用、報、稱、

子厚之詩は、清峭簡澹にして古雅の處あり、蘇軾嘗て評して曰く、李杜の後詩人繼て出づる者、遺韻ありと雖、而かも才其意に逮はず、獨韋應物、柳子厚は、織襪を箭古に發し、至味を澹泊に寄すと、餘子の及ぶ所にあらずと、又曰く枯澹に貴ぶ所のものは、其外枯て中膏ひ、澹なるに似て、

實、美なるに在り、淵明、子厚の流、是なりと、而して子厚の詩を以て、直に淵明の下、應物の上に在りと爲せり、世稱して韋柳と云ふものは、其詩の出る所、共に淵明に在ればなり、應物の詩は閑雅平淡にして風韻あり、是亦建安以還に馳驟して、自ら一家を成せるものなり、而して其性情の眞率高潔なるは、容易に淵明の磁鐵を引きし所以なるべし、此の如き詩人なりしにも拘らず、其壯年の時に當りては、任侠を尚ひ、氣節を行ひ、後に始て節を折りて書を讀めりと云ふ、故に其晚年楊開府に贈る詩に、『少事武皇帝、無賴恃恩私、身作里中橫、家藏亡命兒、朝持撈蒲扇、暮竊東隣姬』の句あり、而して其官は蘇州の刺史に終りしか故に韋蘇州の稱あり、其性高潔にして食鮮く、又欲寡し、居る所、必ず香を焚き地を掃て坐し、心を象外に冥し、以て人事を屏除せりと云ふ、而して時代より云へば、其人は中唐なるにも拘らず、其詩は、間、優に盛唐作者と相韻頡して愧るなきものあり、是吾人の既に盛晩を以て唐詩を分つの非なるを稱して、猶ほ唯、便利上、此序列に従ひし所なりとす。

貴賤雖異等、出門皆有營、獨無外物牽、遂此幽居情、微雨夜來過、不知春草生、背山忽已晴、鳥雀繞舍鳴、時與道人偶、或隨樵者行、自當安樂勞、誰謂薄世榮(韋應物幽居)  
 秋氣集南圃、獨遊亭午時、迴風一蕭瑟、林泉久參差、始至若有得、稍深遂忘疲、羈禽嚙幽谷、寒蕩舞淪漪、去國魂已遠、懷人淚空垂、孤生易爲感、失路少所宜、索莫竟何事、徘徊祗自知、誰爲後來者、當此與心期(柳宗元南圃中題)



白居易 字は樂天、香山居士と號す、太原の人なり、官は太子大傅に至る、其左拾遺たる時に當り、忠誠察諤、抗論して回らず、中頃遠謫に遭ひ、江州の司馬と爲り、之に處して怡然たり、當時牛李黨を構て相軋轢せしも、絶えて依附する所なく、煉要を以て時に逢ふことを爲さず、黨援を以て進むとを干めず、又能く坎壈顛蹶を以て會て沮喪することを爲さず、是其識力涵養、大に人に過るものあるにあらざるよりは、安んを能く是の如きに至らむや、蓋樂天夙に力を參禪悟道に得る所ありて、其情性を涵養せしかば、隨て深く和平安詳の旨に達せるものなるべし、而して其詩の流麗安詳なるは、即ち其性情の發して字句となれるに外ならず、人或は樂天を以て樂天的詩人と爲すも、安んそ知らむ、其樂天的なるは、畢竟其安心立命の際に於て、些箇の凝滯なきに出るものなるを、是香山の尋常一様の詩人と、大に其選を異にする所以なりとす、其詩は六義を以て主と爲して、和平溫厚の旨に歸し、會て字句の間に於て艱難を尙ひず、傳云ふ、一篇成る毎に、必ず其家の老嫗をして之を讀ましめ、解すれば則ち録し、解せされは又復た之を易ふと、故に後人其詩を評して、山東の父老か農桑を課するか如しと云へり、大和開成の後に及び、香山年既に老ひ、時事亦日に非なりしかは、官情愈々淡く、唯々醉吟を以て事と爲し、遂に詩に托して以て自ら傳んとせり、元稹は其心交なり、詩体亦香山と相似て、贈酬の作甚多し、香山嘗て書を與て曰く、志は兼濟に在り、行

は獨善に在り、諷論は意激して言質なり、閒適は思澹にして辭迂なりと、是香山の詩を作る指歸の見るべき所なり、元和年間に左拾遺たりし時、嘗て新樂府、及び詩百餘篇を作りて時事を諷規す、後流傳して禁中に聞ゆ、帝之を悦ひ、召して翰林學士に拜す、其新樂府の序に「凡九千二百五十二言、斷爲五十篇、篇無定句、句無定字、繫於意不繫於文、首句標其目、卒章顯其志詩三百之義也、其辭質而徑、欲見之者易論也、其言直而切、欲聞之者深誠也、其事覈而實、使采之者傳信也、其體順而律、可以播於樂章歌曲也、總而言之、爲君爲臣爲民爲事而作、不爲文而作也」と云へり、是支那詩人の常言たる詩教の意に歸するものなり、然れとも香山の詩にて、其最も能く世間に流傳して人口に膾炙するものは琵琶行、長恨歌等の諸篇なりとす、蓋此等の諸篇は、初唐四傑の體に本つて、又變化を加へしものにて、香山の所謂文の爲めにして作りしものなり、然れば其文辭に於けるの價值は、却て此に存すと云ふべし。

元和十年、余左遷九江郡司馬、明年秋、送客湓浦口、聞船中夜彈琵琶者、聽其音、鏗々然、有京都聲、問其人、本長安胡女、嘗學琵琶於穆曹二善才、年長色衰、委身爲賈人婦、遂命酒使快彈數曲、曲罷、憫然自敘少小時歡樂事、今漂淪憔悴、轉徙於江湖間、予出官二年、恬然自安、感斯人言、是夕始覺有遷謫意、因爲長句歌、以贈之、凡六百一十二言、命曰琵琶行、  
潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟、主人下馬客在船、舉酒欲飲無管絃、醉不成歡慘將別、別時茫茫江浸月、忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發、尋聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲、移船相近邀相見、添酒圍燈重開宴、千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面、轉軸撥絃三兩聲、未成曲調先有情、絃索掩抑聲、似訴平生不得意、低眉信手絃索聲、說盡心中無限事、輕攏慢捻抹復挑、初爲霓



雲後六么、大絃嘈々如急雨、小絃切々如私語、嘈々切々錯雜彈、大珠小珠落玉盤、閉關驚語花底滑、幽咽泉流冰下澌、水泉冷澌絃凝絕、凝絕不通聲暫歇、別有幽愁暗恨生、此時無聲復有聲、銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴、曲終收撥當心斷、四絃一聲如裂帛、東船西舫悄無言、惟見江心秋月白、沈吟放撥掩絃中、聲頓衣裝起欲容、自言本是京城女、家在蝦蟆陵下住、十三學得琵琶成、名屬教坊第一部、曲罷長教善才服、絃成每被秋娘妬、五陵年少爭纏頭、一曲紅綃不知數、細頭銀篋擊節碎、血色羅裙翻酒污、今年歡笑復明年、秋月春風等閑度、弟走從軍阿嬖死、暮去朝來顏色故、門前冷落鞍馬稀、老大嫁作商人婦、商人重利輕別離、前月浮梁買茶去、去來江口守空船、遼州明月江水寒、夜深忽夢少年事、夢啼妝淚紅闌干、我聞琵琶已曠息、又聞此語重唧々、同是天涯淪落人、相逢何必曾相識、我從去年辭帝京、灞橋風雨秋無聲、終歲不聞絲竹聲、住近湓江地低濕、黃蘆苦竹遶宅生、其間且暮聞何物、杜鵑啼血猿哀鳴、春江花朝秋月夜、往往取酒還獨傾、豈無山歌與村笛、嘔啞嘲哢難爲聽、今夜聞君琵琶語、如聽仙樂耳暫明、莫辭更坐彈一曲、爲君翻作琵琶行、感我此言真久立、却坐促絃轉轉急、凄凄不似向前聲、滿坐重聞皆掩泣、座中淚下誰最多、江州司馬青衫濕(琵琶行并序)

元稹 字は微之、樂天の心交なり、其詩亦平易、樂天と相似たり、樂天長恨歌ありも微之、亦連

昌宮辭あり、俱に皆開元天寶間の宮事を言ふもの、評者以て聯璧と稱す。

連昌宮中滿宮竹、歲久無人森似束、又有橋頭千葉桃、風動落花紅較々、宮邊老人爲余泣、少年進食因會入、上皇正在望仙樓、太真同澤欄干立、樓上樓前盡珠翠、燒燼燈照天地、歸來如夢復如痴、何暇備言宮裏事、初過寒食一百六、店舍無煙宮樹綠、夜半月高絃索鳴、賀老琵琶定所展、力士傳呼覓念奴、念奴潛伴賭那宿、須臾覓得又連催、特約街中許然烟、春嬌滿眼睡紅綃、掠削雲鬢旋裝束、飛上九天歌一聲、二十五郎吹管逐、邊巡大遍涼州徹、色々飄飄飄綠纒、李華壓笏傍宮牆、偷得新翻數段曲、平明大駕發行宮、萬人歌舞送路中、百官隊仗避岐嶷、楊氏隨姨重關風、明年十月東都破、御路猶存綠山過、賜令供頓不敢廢、萬姓無聲淚霑臍、兩宮定後六七年、卻尋家舍行宮前、莊園燒盡有枯井、行宮門閉樹宛然、爾後相傳六帝帝、不到離宮門久閉、徂來年少說長安、玄武樓前花萼廢、去年勅使因斫竹、偶值門閉暫相逐、蒲橋橋比塞池塘、狐兔嬌疑綠樹木、無樹欲傾舊尚存、文憑尚殘紗綺綠、塵埋粉壁蕙花鈿、鳥啄風箏碎珠玉、上皇偏愛臨砌花、依然御榻臨階斜、地出燕窠盤國棋、菌生香案正當衙、殿殿相連端正樓、太

亂梳洗樓上頭、晨光未出塵影黑、至今反掛珊瑚鉤、指示樹人因慟哭、却出宮門淚相續、自從此後還閉門、夜々狐狸上門屋、我聞此語心骨悲、太平誰致亂者誰、翁言野父何分別、耳聞眼見爲君說、姚崇宋璟作相公、勸諫上皇言昭切、變理陰陽不黍豐、關和中外無兵戎、長官清貧太守好、擢選賢官由相公、開元之末姚宋死、朝廷漸々由妃子、祿山宮裏養作兒、虢國門前開如市、弄權宰相不記名、依稀憶得楊與李、廟殿四側四海橋、五十年來作瘡痂、今皇神聖悉相明、詔書纒下吳蜀平、官軍又取淮西賊、此賊亦除天下寧、年々耕種宮前道、今年不遺子孫耕、老翁此意深望幸、努力剛護休用兵(連昌宮辭)

中唐の大家と稱すべきは、上記の韓白諸人たること世以て異論なし、殊に香山の篇什多きとは、殆んど三千八百餘首の上に出づ、而して其流傳の弘き、遠く海瀆の外に出るに至る、其他中唐の作家に於て盧綸、吉中孚、韓翃、錢起、司空曙、苗發、崔洞、耿漳、夏侯審、李端等十人を、大歴の十才子と稱せり、十子の列にあらざれども亦錢起と其名を齊ふして郎仕元あり、時人云ふ前に沈宋あり後に錢郎ありと。

晚唐の作者は先づ杜牧、李商隱、溫庭筠等を以て特出と稱せざるべからず、杜牧は字を牧之と云ひ、樊川と號す、京兆の人なり、性剛直にして奇節あり、毎に躡々として小謹を爲すを欲せず、好みて大事を論列して、利病を指陳し、年五十にして卒せり、死に臨み自ら墓誌を寫して頗る怪詭の事を云ふ、其詩、豪邁にして麗情多し、論者以て之を子美に比し、大杜、小杜の稱を以て之を區別せり、牧容姿美にして麗情多く歌舞を好みて風情頗る張れり、淮南の繁華、名姬絶色多かりければ



牧心を恣にして之を賞せり、故に其風流逸事の世間に存するもの亦頗る多し。

李商隱 字を義山と云ふ、懷州河内の人なり、當時牛李の黨人互に相陥排せし時なりしに、義山は一往一反の間に逡巡せしか爲めに、其官も亦遂に達せずして卒せり、義山博學強記、著作する毎に多く書冊を檢閲して左右に鱗次す、世以て獮の魚を祭るに似ると云へり、温庭筠は義山と名を齊ふして温李と稱せられし人にて字を飛卿と云ふ、并州の人なり、側詞艶曲に工なり、二家の詩怪譎を以て自ら一格を爲せり、後の學ぶ者、之を稱して西崑体と云ふ、宋初の楊劉一派の詩の如き、則ち其の後塵なりと稱せらる。

上記諸人の外に中晩の作者を數へんと欲せば亦一二を以て悉くすべからずと雖、今皆汰略に従ひ左に作例數篇を附出して此章を結ばむとす。

新年艸色遠蕪々、久客將歸歸路蹊、暮雨不知浪口處、春風只到穆陵西、孤城落日空花落、三戶無人自鳥啼、君在江南相憶否、門前五柳幾枝低(劉長卿使次安陸寄友人)  
二月黃鸝飛上林、春城紫禁曉陰陰、長樂鐘聲花外盡、龍池柳色雨中深、陽和不散窮陰恨、霄漢常懸捧日心、獻賦十年猶未遇、差將白髮對華簪(錢起贈闕下裴舍人)  
慈母手中線、遊子身上衣、臨行密密縫、意恐遲々歸、誰知寸艸心、報得三春暉(孟郊遊子吟)  
回樂峯前沙似雪、受降城外月如霜、不知何處吹蘆管、一夜征人盡望鄉(李益夜上受降城聞笛)  
山圍故國周遭在、潮打空城寂寞回、淮水東邊舊時月、夜深猶過女牆來(劉禹錫石頭城)

恒龍寒水月籠沙、夜泊秦淮酒家、商女不知亡國恨、隔江猶唱後庭花(杜牧泊秦淮)  
猿鳥猶疑畏簡書、風雲常爲護儲符、徒令上將揮神筆、終見降王走傳車、管樂有才真不忝、關張無命復何如、他年錦里經祠廟、梁父吟成恨有餘(李商隱驛館壁)  
楊子江頭楊柳春、楊花愁殺渡江人、數聲風笛離亭晚、君向瀟湘我向秦(鄭谷淮上與友人別)

## 第四章 唐朝の散文

### 第一節 唐文概説

吾人は既に前章に於て、唐朝韻文の概畧を叙述したり、今復た其散文に於ける消息如何を窺はさるべからず。

然るに讀者は應に記憶せるなるべし、六朝以來は詩賦にもあらず、又在來の散文にもあらず、一種變調の駢儷文、一般に流行して、上は政府の訓令布達文の類より、下は日常書牘往復の辭に至るまで、殆んど此文体を使用するに至りしことを、蓋此文体の淵源する所は、遠く漢魏の際に在りしも、當時未だ全く十分なる其脉を爲すに至らず、爾來浸潤して六朝齊梁の間に至り、尤も其盛を極めたるなり、而して唐の文學は、其後を承けたるものなれば、文辭も亦猶ほ其舊に依りて、自ら此駢儷體の後を襲けるを免れず、是の時に當り、先づ崛起して其詞采を馳せしものは、所謂初唐四傑



の徒にして、詞華麗新を競ひ、措句流暢を尙ひしのみならず、排闥縦横の概あるに至りては、恐くは唐朝の駢儷中、復た諸子の右に出るものなかるへし、降て玄宗の初に至り、蘇頌、張説の文章あり、時に燕許の大手筆と稱せられしも、當時文章萎縮して荆榛路を塞ぎし時なりければ亦是群盲隊中の具眼者たるに過ぎざりしなり、大曆貞元の際に至り、韓愈、柳宗元の徒出て、古文を唱道するに及び、唐朝の文、大に振ひ、雄偉光明の辭始めて出てたり、唐史氏文章の變遷を叙して曰く、『唐有天下三百年、文章無慮三變、高宗太宗大難始夷、汾江左餘風、誦章繪句、揣合低昂、故王楊爲之伯、玄宗好經術、群臣稍厭雕琢、索理致、崇雅黜浮、氣益雄渾、則燕許擅其宗、大曆正元間、美才輩出、囁嚅道真、涵泳聖澤、於是韓愈倡之、柳宗元、皇甫湜、李翱等和之、排逐百家、法度森嚴、抵轍晉魏、上風漢周、唐之文完然爲一王法、此其極也』と、故に今唐一代の文章を盡して其變遷種類を窺はむに、若し其時代を以て之を叙別せば、王楊諸傑の文を以て第一期と爲し、燕許諸公を以て第二期と爲し、而して韓柳諸子を以て第三期と爲さるへからず、第一期の文は、所謂駢儷の文にして、第二期は、時文の又較、其變調に屬するものと云はさるへからず、而して第三期の文は、所謂八代の衰を起せる古文辭にして、唐史氏の稱する唐朝一王の文たるものなり、然るに其文體上より類別すれば(一)時文即ち駢儷の文(二)古文即ち韓柳唱道の文の二體に歸せさるへから

ず、而して時文中に於ける制冊文にては常表、楊炎、陸贄等之れか巧を稱す、又史筆の文あり、其原本する所は、馬班の古文體にありと雖も、多くは句法局促にして筆路晦澁し、尤當時の文章の萎弊せし處を見るに足るなり、吾人は今此等の類別に由らず、唯單に韓柳一派の古文辭を標擧するのみにして、餘は一二を千百に存して、將に大に省略に従はむと欲す、何となれば、爾餘の文體は、縱令一時其流行の廣かりしにもせよ、唐一代の文章上より觀察するときは、雄偉條達、決して韓柳の右に出ると能はさるのみならず、散文の韓柳あるは、猶ほ韻文の李杜に於けるか如く、諸體を備へて更に一生面を開きしものなればなり。

然るに爰に一奇觀と稱すへきは、駢儷の文は本、美辭を主として、其語調を流麗にし、務めて字句の間に錦繡を織りしにも拘らず、其文學上の價值あるものに至りては、唯一二の作を除きては、殆んど古文體の文に及はず、古文體の文は、達意を主として、邊幅長短の如何を論せず、唯、暢達明快を求めしものなるも、其文辭炳然として大に觀るべきものあり、然らば則ち知るへし、文章なるものは、其美辭を主とすると、達意を主とするとを論せず、又如何に流暢華麗を貴ふにもせよ、其根する所は必ず着想の如何に在るを、然れとも所謂駢儷中にては亦達意の文なきにしもあらず、陸贄の奏議文の如きは、全く當時の駢儷體に依りしものなるも、筆路周盡、懇到意の如くならざる